
朝霞市

中道・中道下遺跡

都市計画道路岡通線（朝霞市浜崎地内）埋蔵文化財発掘調査報告

2010

埼玉県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



展開写真



第22号住居跡出土土器（埴甕）



同 出土状況

中道・中道下遺跡の紹介

中道・中道下遺跡は、縄文時代から古代にわたるさまざまな時代の遺構が重複して存在する「複合遺跡」です。

荒川の支流である黒目川を望むこの台地上に、はじめて人間の生活の跡が残されたのは、今から約4000年前の縄文時代中期の終わり頃のことです。当時の家の跡である竪穴住居跡や、墓や食糧貯蔵庫とみられる土壙が発見されました。

弥生時代になると、この地域でも有数の大きなムラが生まれ、たくさんの竪穴住居跡が残されました。住居跡の床からは、上屋を構成していた柱や梁の一部とみられる炭化材が発見されました。分析の結果、これらの炭化材は、現在でもこの地域に多くみられるクヌギの仲間であることがわかりました。

このほか、古墳時代や奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居の跡も発見されています。

序

埼玉県では、「ゆとりとチャンスの埼玉プラン」を策定し、渋滞のない円滑な自動車交通の実現を目指し、幹線道路網の整備に努めています。なかでも都市計画道路の建設は、都市の骨格を形成する重要な事業であり、広域のかつ長期的な視点に立った整備計画が進められております。今回報告する中道・中道下遺跡は、都市計画道路岡通線の建設に先立って発掘調査されたものです。

事業地内には縄文から古代にわたる遺跡の存在が知られていました。その取扱いについては、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。発掘調査は埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、縄文・弥生・古墳・奈良・平安の各時代の住居跡や土壇など貴重な遺構が発見されました。とりわけ弥生時代の住居跡は、狭い範囲から16軒発見され、この地域の中核的な集落の一端が明らかになりました。

これらの成果をまとめたものが本書であります。埋蔵文化財の保護や普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として広く御活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県県土整備部道路街路課、朝霞県土整備事務所、朝霞市教育委員会並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成22年8月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 藤野龍宏

例言

1. 本書は、埼玉県朝霞市浜崎に所在する中道・中道下遺跡第7次から第9次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

中道・中道下遺跡第7次
埼玉県朝霞市浜崎4丁目573-1番地他
平成20年11月5日付け教生文第2-56号

中道・中道下遺跡第8次
埼玉県朝霞市浜崎4丁目581-5番地他
平成21年12月3日付け教生文第2-52号

中道・中道下遺跡第9次
埼玉県朝霞市浜崎4丁目581-8番地他
平成22年5月18日付け教生文第2-13号
3. 発掘調査は、街路整備工事（道路改良工）都市計画道路岡通線事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受け、財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団が実施した。また、整理報告書作成事業も同課から委託を受け、当事業団が実施した。
4. 本書に係る発掘調査および整理作業の受託事業名は次の通りである。街路整備工事（道路改良工）都市計画道路岡通線 朝霞市浜崎地内
5. 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3の組織により実施した。

第7次調査は、平成20年11月4日から平成21年2月16日まで、細田 勝、岩瀬 謙、篠田泰輔が担当し実施した。

第8次調査は、平成21年12月1日から平成21年12月25日まで、細田 勝が担当した。

第9次調査は、平成22年5月11日から平成22年5月28日まで、上野真由美が担当した。

整理報告書作成事業は、平成21年12月1日から平成22年3月31日まで西井幸雄が、平成22年6月1日から平成22年6月30日まで渡辺清志が担当して実施し、平成22年8月31日に事業団報告書第371集として印刷・刊行した。
6. 発掘調査における基準点測量は、株式会社ビッソ測量計画に委託した。

放射性炭素年代測定、炭化物樹種同定は株式会社加速器分析研究所に委託した。
遺物の展開写真は小川忠博氏に委託した。
7. 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、出土物の写真撮影は西井・渡辺が行った。
8. 出土品の整理・図版作成は主に西井・渡辺が行い、上野真由美の協力を得た。
9. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、IV-2を細田、VIを渡辺、それ以外を西井が行った。
10. 本書の編集は渡辺・西井が行った。
11. 本書に掲載した資料は、平成22年9月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。
12. 発掘調査、本書の作成にあたり、朝霞市教育委員会から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。

凡例

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、世界測地系（新測地系）による国土標準平面直角座標第Ⅱ系（原点北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値を示し、各挿図に記した方位は全て座標北を示す。
A-1グリッド北西杭の座標は、
X = -20150.000m、Y = -20680.000m
である。
2. 調査区で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10×10mの範囲を基本に（1グリッド）とし、調査区全域をカバーする方眼を設定した。
3. グリッドの名称は、北西隅を起点に南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に算用数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと算用数字を組み合わせた。
4. 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は以下のとおりである。
S J…竪穴住居跡 SK…土壌 SD…溝跡
P…ピット・柱穴
5. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。例外的なものについては、個別に示した。
遺構図面
全体図…1/1200、1/400、1/250
竪穴住居跡…1/60 土壌…1/60
溝跡…1/200
遺物図版
縄文土器実測図…1/4 縄文土器拓本…1/3
石器…4/5、2・3、1・3、1/4
6. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を表す。
7. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行1/50,000、朝霞市都市計画地図1/2,500を使用して、編集した。
8. 本書の編集にあたり、発掘調査時の遺構番号を以下の通り一部変更した。
（調査時）→（本書）
SK 4→S J 17
S J 24→S J 13
S J 25→S J 12
S J 26・27→S J 11
SD 1→SK 8
SD 2→SK 33
SD 3→SK 34
SD 4→SK 35
SD 9→SK 36
SD 10→SK 37
SD 7→SK 38
SD 5→SD 1
SD 6→SD 2
SD 8→SD 3
なお、グリッドピットの番号振り替え状況については第17表に記した。旧称の記載が無いものは整理作業段階で命名したピットである。

目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	(1) 住居跡	39
1. 発掘調査に至る経過	1	3. 古墳時代	61
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(1) 住居跡	61
3. 発掘調査・報告書作成の組織	3	4. 平安時代	62
II 遺跡の立地と環境	4	(1) 住居跡	62
1. 地理的環境	4	(2) 遺構外出土遺物	65
2. 歴史的環境	5	5. 中・近世	68
III 遺跡の概要	9	(1) 土壌	68
IV 遺構と遺物	12	(2) 溝跡	71
1. 縄文時代	12	(3) ビット	71
(1) 住居跡	12	V 自然科学分析	75
(2) 土壌	24	VI 調査のまとめ	80
(3) 遺構外出土遺物	28	写真図版	
2. 弥生時代	39		

挿図目次

第1図 埼玉県の地形図	4	第13図 第22号住居跡出土遺物(3)	20
第2図 周辺の遺跡	6	第14図 第25号住居跡	21
第3図 基本土層	9	第15図 第25号住居跡出土遺物	22
第4図 遺跡位置図	10	第16図 第26号住居跡	23
第5図 調査区全体図	11	第17図 第26号住居跡出土遺物	23
第6図 第17号住居跡	12	第18図 縄文時代の土壌(1)	25
第7図 第17号住居跡出土遺物	13	第19図 縄文時代の土壌(2)	26
第8図 第18号住居跡	15	第20図 縄文時代の土壌(3)	27
第9図 第18号住居跡出土遺物	16	第21図 縄文時代の土壌出土遺物(1)	29
第10図 第22号住居跡出土遺物	17	第22図 縄文時代の土壌出土遺物(2)	30
第11図 第22号住居跡出土遺物(1)	18	第23図 縄文時代の土壌出土遺物(3)	31
第12図 第22号住居跡出土遺物(2)	19	第24図 縄文時代の土壌出土遺物(4)	32

第25図	遺構外出土縄文土器 (1) ……………	34	第50図	第27号住居跡 ……………	58
第26図	遺構外出土縄文土器 (2) ……………	35	第51図	第27号住居跡出土遺物 ……………	59
第27図	遺構外出土縄文土器 (3) ……………	36	第52図	弥生時代住居跡の硬化面 ……………	60
第28図	遺構外出土縄文土器 (4) ……………	37	第53図	第1号住居跡および出土遺物 ……………	61
第29図	遺構外出土縄文石器 ……………	38	第54図	第3号住居跡 ……………	62
第30図	第2号住居跡 ……………	39	第55図	第3号住居跡遺物出土状況 ……………	63
第31図	第4号住居跡 ……………	40	第56図	第3号住居跡出土遺物 ……………	64
第32図	第4号住居跡出土遺物 ……………	41	第57図	第6号住居跡および出土遺物 ……………	65
第33図	第5号住居跡および出土遺物 ……………	42	第58図	第8号住居跡出土遺物 ……………	65
第34図	第7号住居跡 ……………	43	第59図	第8号住居跡 ……………	66
第35図	第7号住居跡出土遺物 ……………	44	第60図	第14号住居跡および出土遺物 ……………	67
第36図	第9号住居跡および出土遺物 ……………	46	第61図	第20号住居跡 ……………	68
第37図	第10号住居跡 ……………	47	第62図	近世の土壌 (1) ……………	68
第38図	第11号住居跡 ……………	48	第63図	近世の土壌 (2) ……………	69
第39図	第11号住居跡出土遺物 ……………	49	第64図	近世の溝跡 ……………	70
第40図	第12号住居跡 ……………	49	第65図	遺構外出土の古代遺物 ……………	70
第41図	第12号住居跡出土遺物 ……………	50	第66図	時期不明のピット (1) ……………	73
第42図	第13号住居跡 ……………	50	第67図	時期不明のピット (2) ……………	74
第43図	第15号住居跡および出土遺物 ……………	51	第68図	[参考] 暦年校正年代グラフ ……………	77
第44図	第16号住居跡および出土遺物 ……………	52	第69図	第21号住居跡炭化材出土状況 ……………	78
第45図	第19号住居跡 ……………	53	第70図	中道・中道下遺跡第21号住居跡 遺構出土炭化材の顕微鏡写真 ……………	79
第46図	第19号住居跡出土遺物 ……………	54	第71図	弥生時代竪穴住居跡の主軸方向 ……………	80
第47図	第21号住居跡および出土遺物 ……………	55	第72図	第22号住居跡出土土器と周辺地域の土器 ……………	84
第48図	第23号住居跡および出土遺物 ……………	56			
第49図	第24号住居跡 ……………	57			

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧表 ……………	7～8	第10表	第23号住居跡出土遺物観察表 ……………	56
第2表	第4号住居跡出土遺物観察表 ……………	41	第11表	第27号住居跡出土遺物観察表 ……………	59
第3表	第5号住居跡出土遺物観察表 ……………	42	第12表	第1号住居跡出土遺物観察表 ……………	60
第4表	第7号住居跡出土遺物観察表 ……………	44	第13表	第3号住居跡出土遺物観察表 ……………	64
第5表	第9号住居跡出土遺物観察表 ……………	46	第14表	第6号住居跡出土遺物観察表 ……………	65
第6表	第11号住居跡出土遺物観察表 ……………	49	第15表	第14号住居跡出土遺物観察表 ……………	68
第7表	第15号住居跡出土遺物観察表 ……………	51	第16表	遺構外出土の古代遺物観察表 ……………	70
第8表	第16号住居跡出土遺物観察表 ……………	52	第17表	ピット計測表 ……………	72
第9表	第19号住居跡出土遺物観察表 ……………	54			

図版目次

- | | | |
|------|-------------------|--------------------|
| 図版 1 | 1 遺跡から北西方向を望む | 4 第12号住居跡 |
| | 2 第7次調査区A～Cグリッド付近 | 5 第13号住居跡 |
| | 3 第7次調査区D・Eグリッド付近 | 6 第15号住居跡 |
| | 4 第7次調査区E～Gグリッド付近 | 7 第16号住居跡 |
| | 5 第8次調査区北半 | 8 第19号住居跡 |
| | 6 第8次調査区南半 | 図版 6 |
| | 7 第9次調査区 | 1 第21号住居跡 |
| | 8 基本土層 | 2 第21号住居跡炭化物出土状況 |
| 図版 2 | 1 第17号住居跡 | 3 第23号住居跡 |
| | 2 第25号住居跡 | 4 第24号住居跡 |
| | 3 第25号住居跡埋壘出土状況 | 5 第27号住居跡 |
| | 4 第26号住居跡 | 6 第27号住居跡遺物出土状況(1) |
| | 5 第18号住居跡 | 7 第27号住居跡遺物出土状況(2) |
| | 6 第22号住居跡 | 8 第1号住居跡 |
| | 7 第22号住居跡炉跡 | 図版 7 |
| | 8 第22号住居跡埋壘出土状況 | 1 第3号住居跡 |
| 図版 3 | 1 第1・22号土壌 | 2 第3号住居跡カマド遺物出土状況 |
| | 2 第2号土壌 | 3 第3号住居跡カマド |
| | 3 第5号土壌 | 4 第6号住居跡 |
| | 4 第14・15号土壌 | 5 第8号住居跡 |
| | 5 第21号土壌 | 6 第14号住居跡 |
| | 6 第24号土壌 | 7 第8・33・34号土壌 |
| | 7 第25号土壌 | 8 第1・2号溝跡 |
| | 8 第27号土壌 | 図版 8 |
| 図版 4 | 1 第28号土壌 | 1 第18号住居跡出土遺物 |
| | 2 第30号土壌 | 2 第22号住居跡出土遺物 |
| | 3 第2号住居跡 | 3 第22号住居跡出土遺物 |
| | 4 第4号住居跡 | 4 第25号住居跡出土遺物 |
| | 5 第5号住居跡 | 5 第22号住居跡出土遺物 |
| | 6 第7号住居跡 | 6 第4号住居跡出土遺物 |
| | 7 第7号住居跡遺物出土状況 | 図版 9 |
| | 8 第9号住居跡 | 1 第7号住居跡出土遺物 |
| 図版 5 | 1 第9号住居跡炉跡 | 2 第7号住居跡出土遺物 |
| | 2 第11号住居跡 | 3 第7号住居跡出土遺物 |
| | 3 第11号住居跡遺物出土状況 | 4 第7号住居跡出土遺物 |
| | | 5 第9号住居跡出土遺物 |
| | | 6 第11号住居跡出土遺物 |
| | | 7 第15号住居跡出土遺物 |
| | | 図版10 |
| | | 1 第27号住居跡出土遺物 |

- | | | | | | |
|------|---|-----------------|------|---|-----------------------|
| | 2 | 第27号住居跡出土遺物 | 図版17 | 1 | 土壌出土遺物 (1) |
| | 3 | 第27号住居跡出土遺物 | | 2 | 土壌出土遺物 (2) |
| | 4 | 第1号住居跡出土遺物 | 図版18 | 1 | 土壌出土遺物 (3) |
| | 5 | 第1号住居跡出土遺物 | | 2 | 土壌出土遺物 (4) |
| | 6 | 第3号住居跡出土遺物 | 図版19 | 1 | 土壌出土遺物 (5) |
| | 7 | 第3号住居跡出土遺物 | | 2 | グリッド出土遺物 (1) |
| | 8 | 第3号住居跡出土遺物 | 図版20 | 1 | グリッド出土遺物 (2) |
| 図版11 | 1 | 第14号住居跡出土遺物 | | 2 | グリッド出土遺物 (3) |
| | 2 | 第14号住居跡出土遺物 | 図版21 | 1 | グリッド出土遺物 (4) |
| | 3 | 第14号住居跡出土遺物 | | 2 | グリッド出土遺物 (5) |
| | 4 | 第14号住居跡出土遺物 | 図版22 | 1 | グリッド出土遺物 (6) |
| | 5 | グリッド出土遺物 | | 2 | グリッド出土遺物 (7) |
| | 6 | グリッド出土遺物 | 図版23 | 1 | グリッド出土遺物 (8) |
| | 7 | グリッド出土遺物 | | 2 | グリッド出土遺物 (9) |
| | 8 | グリッド出土遺物 | 図版24 | 1 | 第4・5・9号住居跡出土遺物 |
| 図版12 | 1 | 第17号住居跡出土遺物 (1) | | 2 | 第7号住居跡出土遺物 |
| | 2 | 第17号住居跡出土遺物 (2) | 図版25 | 1 | 第9・16号住居跡出土遺物 |
| 図版13 | 1 | 第18号住居跡出土遺物 (1) | | 2 | 第11・12・15号住居跡出土遺物 |
| | 2 | 第18号住居跡出土遺物 (2) | 図版26 | 1 | 第19号住居跡出土遺物 |
| 図版14 | 1 | 第22号住居跡出土遺物 (1) | | 2 | 第21・23・27号住居跡出土遺物 |
| | 2 | 第22号住居跡出土遺物 (2) | 図版27 | 1 | 第1号住居跡出土遺物 |
| 図版15 | 1 | 第22号住居跡出土遺物 (3) | | 2 | 第3号住居跡出土遺物 |
| | 2 | 第22号住居跡出土遺物 (4) | 図版28 | 1 | 第6・14号住居跡出土遺物・遺構外出土遺物 |
| 図版16 | 1 | 第25号住居跡出土遺物 | | 2 | 鉄製品 |
| | 2 | 第26号住居跡出土遺物 | | | |

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、5カ年計画の中で、「渋滞のない円滑な自動車交通の実現」を掲げ、「県内のどの地域にも予定した時間どおりに移動でき、人々の豊かな交流や活発な経済活動を支える道路網」の整備を積極的に進めている。

また、県南西部地域は、狭い道路の解消を通して、安全で快適なゆとりのある都市空間を整備していくことを課題としてとらえ、道路の拡幅や歩道の整備を進め、道路交通網の拡充により経済活動を下支えする円滑で安全な自動車交通を実現しているところである。その中で、朝霞市の都市計画道路岡通線は朝霞市内の市街地を南北に貫く主要道路で、その整備による効果が大きく期待されている。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、このような施策に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

都市計画道路岡通線の整備にかかる埋蔵文化財の所在及び取扱いについて、埼玉県道路街路課長から生涯学習文化財課長あて、平成20年6月18日付け道街第107号で照会があった。

これに対し、生涯学習文化財課では平成20年6月27日に試掘調査を行ったところ、埋蔵文化財を確認し、平成20年7月17日付け教生文第912号で、道路街路課長あて次のとおり回答した。

1 埋蔵文化財の所在

工事予定地内には次の埋蔵文化財が所在します。

名称 (No.)	種別	時代	所在地
中道・中道下道跡 (No08-014)	集落跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安	朝霞市浜崎4丁目地内

2 法手続き

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地が所在しますので、工事着手に先立ち、文化財保護法第94条の規定による発掘通知を提出してください。

3 取扱いについて

別図「発掘調査を要する区域」について、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

発掘調査については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、埼玉県朝霞県土整備事務所、生涯学習文化財課の三者で調整協議を行った。事業工程の関係から、年度を分割して調査を実施することになった。調査の実施期間は、平成20年11月4日から平成21年2月16日、平成21年12月1日から12月25日、平成22年5月1日から5月31日であった。

それぞれ、文化財保護法第94条の規定に基づく埋蔵文化財発掘通知が朝霞県土整備事務所長から、また同法第92条の規定に基づく発掘調査届が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、発掘調査が実施された。

なお、発掘調査届に対する県教育委員会教育長からの通知番号は、平成20年11月5日付け教生文第2-56号、平成21年12月3日付け教生文第2-52号、平成22年5月18日付け教生文第2-13号である。

(生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

本報告書に係る中道・中道下遺跡の発掘調査は、1,000㎡を対象とし、第7次調査から第9次調査までの3回に分けて実施した。

第7次調査は平成20年11月4日から平成21年2月16日まで実施し、調査面積は820㎡である。第8次調査は平成21年12月1日から平成21年12月25日まで実施し、調査面積は145㎡である。第9次調査は、平成22年5月11日から平成22年5月28日まで実施し、調査面積は35㎡である。

調査開始にあたっては発掘事務所を設置し、危険防止の囲柵の敷設等の環境整備も行った。

発掘調査は、まず重機によって表土を除去し、その後人力による遺構確認作業を行った。また、記録作業のための基準点測量を行った。

次に確認された遺構は順次精査を行い、土層断面図、平面図等の記録を作成し、写真撮影を行った。出土した遺物は図面・写真等による記録作業を行いつつ逐次採り上げていった。

遺構・遺物の調査を完了した後、器材の撤収、発掘事務所の撤去を行い、すべての作業を終了した。

(2) 整理報告書作成

整理報告書作成作業は、平成21年12月1日から平成22年3月31日まで第7・8次調査分を、平成22年6月1日から平成22年8月31日まで第9次調査分を対象として実施した。

整理作業は、出土遺物の水洗・注記を行った後、接合・復元作業に着手した。接合・復元が完了したのから、遺構ごとに掲載すべき遺物を抽出し、順次実測した。遺物は機械実測機を利用して素図を作成し、その素図をもとに実測図を完成させた。破片遺物は、断面実測、拓本作業を行った。完成した実測図・断面図はトレースし、遺物図版の版組作業を行った。

遺構原図は整理し、修正して第二原図を作成した。第二原図はスキャナーでパソコンに取り込み、パソコン上でトレースを行い、土層説明等の入力データと組み合わせて、遺構図版を作成した。

また、遺構・遺物を計測して観察表を作成し、報告書掲載用の表の編集を行った。完成した図版および表は印刷用割り付け用紙に貼り込み、原稿を執筆した。

これと並行して写真図版の編集を行った。遺構写真は発掘調査時に撮影したものを使用し、遺物写真はスタジオで撮影した。報告書掲載用に選別した写真は画像処理ソフトで画像調整とトリミングを行い、パソコン上で割り付け・写植等を行い、写真図版を完成させた。

平成22年6月下旬に印刷業者を決定し、文字原稿・挿図・写真図版を揃えて入稿した。校正は3回を行い、平成22年8月末に報告書を刊行した。また、遺物・図面類・写真類は整理・分類し、収納作業を行い、すべての作業を終了した。

		H20	11	12	H21	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	H22	1	2	3	4	5	6		
発掘調査	7次																								
	8次																								
	9次																								
整理作業	7次																								
	8次																								
	9次																								

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成20年度（発掘調査）

理 事 長	刈 部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	村 田 健 二
総務部		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	調 査 第 二 課 長	細 田 勝
総 務 課 長	松 盛 孝	主 査	岩 瀬 譲
		主 査	篠 田 泰 輔

平成21年度（発掘調査・報告書作成）

理 事 長	刈 部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	小 野 美 代 子
総務部		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	調 査 第 二 課 長	細 田 勝
総 務 課 長	田 中 雅 人	整 理 第 二 課 長	富 田 和 夫
		主 査	西 井 幸 雄

平成22年度（発掘調査・報告書作成）

理 事 長	藤 野 龍 宏	調査部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	小 野 美 代 子
総務部		調 査 部 副 部 長	昼 間 孝 志
総 務 部 副 部 長	金 子 直 行	調 査 第 二 課 長	細 田 勝
総 務 課 長	田 中 雅 人	整 理 第 二 課 長	官 井 英 一
		主 査	上 野 真 由 美
		主 査	渡 辺 清 志

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

中道・中道下遺跡は、朝霞市浜崎に所在し、JR 武蔵野線北朝霞駅と東武東上線朝霞台駅の南西約1kmに位置している。

遺跡のある朝霞市は埼玉県の南部の武蔵野台地の東縁に位置し、東側は荒川を挟んでさいたま市、北は志木市、東は和光市、西は新座市、南は東京都練馬区と接している。市城の大きさは東西4.6km、南北6.3kmで面積は18.38km²である。

朝霞市域の大半を占める武蔵野台地は、東京都と埼玉県にまたがる洪積台地である。青梅市付近を起点に古多摩川によって形成された扇状地地形で、東西約50km、南北約30kmの広がりを持つ。標高は、扇頂部である青梅市付近で約180mを測り、扇端部である朝霞市周辺では10~20m前後である。

朝霞市内では、台地は新河岸川・黒目川およびその支谷によって複雑に開析されており、また北東部には荒川低地が広がっていて、その地形は変化に富んでいる。これらの地形は、その成り立ち

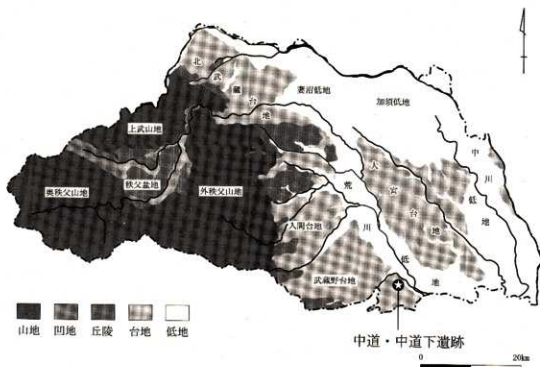
の上で武蔵野面・立川面・荒川低地を形成する沖積面の三つに大きく区分される。

中道・中道下遺跡は黒目川左岸の立川面に立地している。遺跡周辺の標高は約9mである。

黒目川の流路は古多摩川の河道の名残りで、現在の水量に比べて川幅が広く、遺跡周辺では数百mを測り、台地との標高差は10m以上に及んでいる。

現在の黒目川は、小平市の東端にある小平霊園内に源を發し、多くの支流を集め新河岸川に合流して荒川に注いでいる。その全長は約17kmである。

流域は東久留米市周辺=上流域、新座市周辺=中流域、朝霞市周辺=下流域に区分される。上流域は黒目川の水源となる多くの湧水と小河川が樹枝状に分岐している。中・下流域は両側に崖線が發達し、また流域に沿って立川面に相当する台地が広がっていて、数多くの遺跡が立地している。



第1図 埼玉県の地形図

2. 歴史的環境

本書に係る発掘調査で、縄文時代中期と弥生時代後期及び古墳時代、平安時代の竪穴住居跡が多数検出された。以下、同地域における関連時期の遺跡を概観する。

旧石器時代

黒目川の流域に沿って多くの遺跡が所在している。特に上・中流部は、著名な遺跡が多く分布する。朝霞市周辺の下流部は、左岸の台地上（武蔵野面）に朝霞市泉水山・富士谷遺跡（44）が所在する。数次にわたる発掘調査が行われたものの、いまだ全貌は明らかになっていない。岩宿Ⅱ期の石器群と膨大な礫群が検出され、国府型のナイフ形石器が出土している。右岸台地上には中道・岡台遺跡（66）と向山遺跡（73）が所在する。

和光市花ノ木遺跡（89）と柿ノ木坂遺跡（107）は白子川流域に属し、共に複数の文化層を有する遺跡である。花ノ木遺跡は黒曜石製の大型の槍先形尖頭器を含む石器群と、岩宿Ⅱ期の石器群が検出されている。柿ノ木坂遺跡は谷を挟んだ二つの地点から数多くの石器集中と礫群が検出された。

富士見市栗谷ツ遺跡（33）でも幾つかの地点で旧石器時代の石器が出土しており、接合資料を含む第Ⅵ層の石器群の良好な資料が得られた。また、打越遺跡（38）からも複数の地点から異なる時期の石器群が検出されている。

縄文時代

黒目川等の台地内河川から入り込む支谷の周辺には、縄文時代の遺跡が数多く分布している。

草創期の遺跡としては、石斧等の石器群が出土した朝霞市中道・岡台遺跡（66）、矢柄研磨器・有茎尖頭器等が出土した泉水山・富士谷遺跡（44）が挙げられる。

早期の遺跡では、泉水山・富士谷遺跡（44）・打越遺跡（38）等で炉穴群が検出されている。

前期の遺跡としては、県内有数の地点貝塚群である富士見市打越遺跡（38）と水子貝塚（40）

が挙げられる。谷を挟んで隣り合う岡台遺跡は、研究史においても重要な位置を占めており、酒誌仲男、和島誠一の貝塚論、原始集落論、先史食料論等の基礎となった。なお、水子貝塚は1969年に国指定の史跡となっている。

中期の遺跡は数多く存在するが、なかでも志木市西原大塚遺跡（30）は、これまで調査された竪穴住居跡の数が100軒を超え、この地域有数の大集落と目されている。

後期の遺跡としては和光市柿ノ木坂遺跡（107）と丸山台遺跡（111）が挙げられる。丸山台遺跡では多数の竪穴住居跡と掘立柱建物跡が発見され、袋状・フラスコ状などの大型の土壇が多数調査されたことで知られている。

晩期の遺跡は比較的数量が少ないが、中道・中道下遺跡に隣接する西久保・宮山遺跡から該期の遺物が出土している。

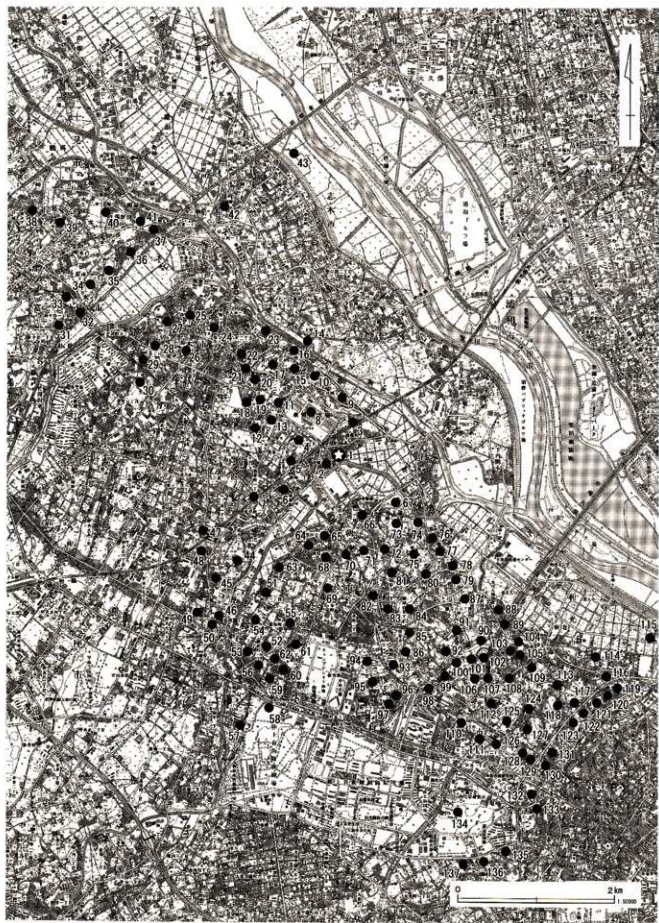
弥生時代

この時期の遺跡の分布は縄文時代とは異なっており、荒川低地を望む台地縁辺部へと集中し、さらに低地部分にも進出している。荒川を挟んで北側の大宮台地南西部でも同様な遺跡分布を示しており、両地域の関連が注目されている。

中道・中道下遺跡周辺では、黒目川上流左岸側に後期の集落跡である泉水山・富士谷遺跡（44）が存在する。また、黒目川をはさんで対岸の台地上には、弥生時代から古墳前期の大集落と方形周溝墓群が検出された向山遺跡（73）が所在し多量の土器と鉄剣、鉄斧、銅劍、ガラス玉等が発見されている。

隣接する宮台・宮原遺跡（75）からは、遺構は確認されていないものの弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土しており、また、有銅銅劍が出土している。

南の和光市内では、白子川流域の花ノ木遺跡（89）が存在する。調査された竪穴住居跡の件数



第2図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧表

No	市町村	遺跡名	時代・時期	No	市町村	遺跡名	時代・時期
1	朝霞市	中道・中道下	縄文(早・前・中)、弥生(後)、古墳(後)、平安・中世、近世	48	朝霞市	下の原第二	縄文
2	朝霞市	西久保・富山	縄文(前・中・後・晩)、弥生(後)、平安・中世、近世	49	朝霞市	下の原第二	縄文、近世
3	朝霞市	入部・峽(峠山古墳)	旧石器、縄文(早・中)、弥生(後)、古墳(前・後)、中世、近世	50	朝霞市	下の原第四	旧石器、中世
4	朝霞市	北原・谷津	縄文(前)、弥生(後)、古墳(後)、近世	51	朝霞市	丹沢	縄文、中世、近代
5	朝霞市	北原・西原	縄文(早)、平安、近世	52	朝霞市	北浦第一	縄文
6	朝霞市	南郷・西久保	縄文(早)、弥生(後)、奈良、平安、近世	53	朝霞市	北浦第二	縄文、古墳
7	朝霞市	弁財上・弁財谷	縄文、近世	54	朝霞市	北浦第三	旧石器、縄文(中)
8	朝霞市	八塚古墳	古墳	55	朝霞市	北浦第四	縄文、古墳
9	朝霞市	長塚(長塚古墳)	縄文、弥生(後)、古墳	56	朝霞市	藤折宿	縄文、弥生、古墳
10	朝霞市	八ヶヶ・中道	縄文(早)、弥生(中)、古墳(前・後)、近世	57	朝霞市	子の神	縄文(前)、中世、近代
11	朝霞市	道合・立出	旧石器、縄文(早)	58	朝霞市	蛇塚	縄文(中・後)
12	朝霞市	中浦第一	縄文	59	朝霞市	上の原第一	旧石器
13	朝霞市	中浦第二	縄文	60	朝霞市	上の原第二	縄文、中世
14	朝霞市	馬場	古墳(前)	61	朝霞市	上の原第三	縄文
15	朝霞市	大瀬戸	縄文(中)、弥生(後)、古墳(前・後)、中世	62	朝霞市	上の原第四	古墳
16	朝霞市	大山第一	旧石器、縄文(早～後)、弥生(後)、古墳(後)、平安	63	朝霞市	後根	縄文、弥生(後)～古墳(前)、中世、近世
17	朝霞市	大山第二	縄文(早～中)古墳(後)、中世	64	朝霞市	宮下	縄文、古墳、中世
18	朝霞市	大新田第一	縄文	65	朝霞市	古厩敷	縄文、古墳
19	朝霞市	大新田第二	縄文	66	朝霞市	中道・岡台	旧石器、縄文、弥生(後)、古墳(後)、平安、中世、近世
20	朝霞市	立出	旧石器、縄文(早)	67	朝霞市	城戸	縄文(早・前・中)、中世、近世
21	志木市	大原	近世以降	68	朝霞市	大塚敷	縄文、古墳
22	志木市	富士前	弥生(後)～古墳(前)	69	朝霞市	行人塚・金子塚下	旧石器、縄文、平安、中世、近世
23	志木市	田子山	縄文(草創～晩)、弥生(後)、古墳(後)、平安、中世、近世、近代	70	朝霞市	諏訪原・中道	旧石器、縄文、平安、中世、近世
24	志木市	市場裏	弥生(後)～古墳(前)、近代	71	朝霞市	榎戸・諏訪原	平安
25	志木市	中野	旧石器、縄文(早・中)、弥生(後)、古墳(前～後)、平安、中世、近世	72	朝霞市	中谷津	縄文、古墳
26	志木市	永川前	古墳、平安	73	朝霞市	向山	旧石器、縄文(草創～早・前・中・後・晩)、弥生(中・後)、古墳(前・中・後)、奈良、平安、中世、近世
27	志木市	城山	縄文(草創～中)、弥生(後)、古墳(前～後)、平安、中世	74	朝霞市	宮台	旧石器、縄文(中・後)、弥生(後)、古墳(前・後)、平安、中世
28	志木市	中道	旧石器、縄文(中)、弥生(後)、古墳(後)、平安、中世、近世	75	朝霞市	宮台・宮原	旧石器、縄文(早)、弥生(後)、古墳(前)、平安
29	志木市	新郷	縄文(前)、古墳(前)、中世、近世	76	朝霞市	根岸通第一	縄文
30	志木市	西原大塚	旧石器、縄文(前～後)、弥生(後)、古墳(前・後)、平安、中世、近世	77	朝霞市	根岸通第二	縄文、古墳、中世
31	富士見市	北通	旧石器、縄文(前)、弥生、古墳、平安	78	朝霞市	根岸通第三	中世
32	富士見市	別所	旧石器、縄文(早・前)、弥生、平安	79	朝霞市	新厩敷	弥生(中・後)、古墳(前・後)、中世、近世
33	富士見市	栗谷フ	旧石器、縄文(早)、奈良、平安	80	朝霞市	新井前	縄文、古墳、中世
34	富士見市	正綱	縄文(晩)、弥生、平安	81	朝霞市	宮原・塚越	弥生～古墳、平安
35	富士見市	東台	縄文(前)、弥生、平安	82	朝霞市	天ヶ久保第一	縄文、古墳
36	富士見市	神明	平安	83	朝霞市	天ヶ久保第三	中世、近世
37	富士見市	観音前	古墳(後)、平安	84	朝霞市	馬場	旧石器、縄文、平安、中世、近世
38	富士見市	打越	旧石器、縄文、弥生、古墳、平安、中世	85	朝霞市	西尾山第一	縄文、古墳
39	富士見市	松山	縄文(前)、平安	86	朝霞市	西尾山第二	縄文、中世
40	富士見市	水子具塚	縄文(前)、平安	87	朝霞市	稲荷山・郷戸	旧石器、縄文、弥生(後)、古墳(前)、平安、中世、近世
41	富士見市	東前	平安	88	和光市	上之郷	弥生(後)～古墳(前)
42	富士見市	宿	中世	89	和光市	花ノ水	旧石器、縄文、弥生(後)、古墳、奈良、平安、中世、近世
43	志木市	関根兵庫館跡	中世	90	朝霞市	南ヶ谷フ	縄文、弥生、古墳、中世
44	朝霞市	泉水山・富士谷	旧石器、縄文(早・前・中・後)、弥生(後)、奈良、平安、中世、近世	91	朝霞市	向原・中堂原	平安
45	朝霞市	島の上・泉水山	縄文(前・中)、中世、近世	92	朝霞市	東流山・水久保	縄文
46	朝霞市	島の七	縄文(前)	93	朝霞市	東流山・越戸第二	旧石器、縄文、近世
47	朝霞市	下の原第一	縄文	94	朝霞市	平沢・原畑	旧石器、縄文(早・前・中・後)、弥生(中・後)、中世、近世

No.	市町村	遺跡名	時代・時期	No.	市町村	遺跡名	時代・時期
95	朝霞市	越戸	旧石器・縄文(早・前・中・後)・近世	117	和光市	妙典寺	縄文・弥生(後)・古墳
96	朝霞市	萱野第一	縄文・古墳・中世	118	和光市	宮ノ脇	縄文(前)・古墳・平安
97	朝霞市	萱野第二	中世	119	和光市	吹上	縄文・弥生・古墳・平安・中世
98	和光市	小井戸	縄文(後)・弥生(後)	120	和光市	吹上貝塚	縄文(前・中)
99	和光市	北原新田	縄文・弥生(後)	121	和光市	吹上原	縄文(中)・弥生(後)・古墳
100	和光市	松山	縄文(中)・古墳	122	和光市	吹上原横穴墓群	古墳(後)
101	和光市	上谷津	縄文(中)・古墳・平安	123	和光市	市場峠・市場上	縄文(早～後)・弥生・古墳・平安
102	和光市	向原	縄文(中)・古墳	124	和光市	妙蓮寺	縄文(中)・古墳(前)
103	和光市	藁	縄文(早)・弥生(後)・古墳・平安	125	和光市	谷戸島	縄文(中)・弥生(後)
104	和光市	芋三池	縄文(早)・弥生(後)・古墳	126	和光市	義名山	縄文(後)・平安
105	和光市	藁前	弥生・古墳・平安	127	和光市	庚塚	縄文(中)・古墳(前)・中世
106	和光市	柿ノ木坂西	縄文(中)・古墳	128	和光市	中丸	縄文
107	和光市	柿ノ木坂	旧石器・縄文(中・後)・弥生・古墳・平安	129	和光市	浅川	縄文・平安
108	和光市	鎌台	縄文・弥生・古墳	130	和光市	城山南	旧石器・縄文・弥生
109	和光市	四ツ木	縄文(早～晩)・弥生・古墳・平安	131	和光市	城山	縄文・弥生・古墳
110	和光市	丸山	縄文・平安	132	和光市	白子宿上	縄文(早～後)・弥生・古墳・平安
111	和光市	丸山台	旧石器・縄文(後)・古墳・奈良・平安	133	和光市	越之上	縄文(前・中)・弥生(後)
112	和光市	水久保	旧石器・縄文(中)・弥生・古墳・奈良・平安	134	和光市	向山	縄文(中)
113	和光市	仏ノ木	縄文(中)・弥生・平安・中世・近世	135	和光市	牛房	縄文(中)・弥生・古墳
114	和光市	午玉山	旧石器・縄文・弥生・古墳・平安・中世	136	和光市	越後山	縄文(前・中)・弥生(後)
115	和光市	榎堂	弥生(後)・古墳・平安・中世	137	和光市	西越後山	縄文(早)・古墳(前)・中世
116	和光市	下里	弥生(後)・古墳				

こそ少ないが、環濠と方形周溝墓が発見されており、中期後半から後期にかけての遺物が出土している。午玉山遺跡(114)は荒川低地内の独立丘陵状の台地上に立地している。中期後半から後期の環濠集落で、100軒を超える堅穴住居跡が発見された。両遺跡とも菊川系等の他地域の土器群が出土している点が注目される。

北の志木・鶴瀬市境を流れる柳瀬川流域では、西原大塚遺跡(30)で後期から古墳時代前半の堅穴住居跡が約500軒調査されている。

古墳時代

この時代の遺跡は、その性格上、古墳と集落遺跡に分けられる。

近隣の古墳群として、黒目川左岸の内間木古墳群・右岸の根岸古墳群がある。それぞれの群に属する主要な古墳として、内間木古墳群に八塚古墳(8)・長塚古墳(9)・峽山古墳(3)が、根岸古墳群には一夜塚古墳・塚塚古墳が存在する。

一夜塚古墳からは副葬品として挂甲、馬具類、鏡が出土し、塚塚古墳からは円筒埴輪・家形埴輪が出土している。

なお、根岸古墳群の範囲は広く、向山遺跡(73)・

宮台遺跡(74)・宮台・宮原遺跡(75)にまたがっている。

集落遺跡は、中道・中道下遺跡と黒目川を挟んで対岸の台地縁辺部に中道・岡台遺跡(66)が所在し、前期と後期の堅穴住居跡が検出されている。少し下流に位置する向山遺跡(73)は弥生時代から古墳時代前期の大集落である。

古代

朝霞市周辺は、奈良時代に新羅郡が新設(758年)されている。当該地域の奈良・平安時代の遺跡は、殆どが堅穴住居跡数軒から10軒程度の小規模な集落遺跡である。その中で特筆されるのは向山遺跡(73)で、掘立柱建物跡が多数発見され、円面硯、緑釉陶器、灰軸陶器が出土している。宮原・塚越遺跡(81)は、四面庇付掘立柱建物跡が見つかり、灰軸陶器と緑釉陶器が出土している。和光市花ノ木遺跡(89)の火災住居からは多数の食器類と共に鬘斗(火のし)・クルリ鍵・鎌・紡錘車等の金属製品が出土している。

いずれも官衙的・宗教的要素を持つ遺構・遺物群といえるが、これらが出土した個々の遺跡の性格付けは未だ困難な状況である。

Ⅲ 遺跡の概要

中道・中道下遺跡は朝霞市浜崎、JR 武蔵野線北朝霞駅と東部東上線朝霞台駅の南西約1kmに所在する。遺跡は黒目川左岸に沿って形成された立川面に存在しており、範囲は東西約450m、南北約230mと広大である。

これまで第1～6地点の発掘調査が実施されており、縄文時代から中・近世の遺構・遺物が見つかっている。今回実施した第7・8・9次調査は、遺跡範囲の西端にあたり、県道を挟んで西久保・宮山遺跡と対峙している。朝霞市では遺跡範囲を自然地形ではなく道路等の区画で区分しているため、各時期の集落の広がりや遺跡範囲との間に整合性がみられない場合もある。その意味では、今回の調査で主体を占める弥生時代後期の集落は、中道・中道下遺跡の範囲に展開するのではなく、むしろ西側に隣接する西久保・宮山遺跡を含めて検討する必要がある。

調査区は道路の拉幅に伴う発掘調査のため、幅約13m、長さ約110mと南北方向に長く、黒目川と直交する方向になっている。標高は、北側が9m、南側が8mと緩やかに傾斜している。

今回の発掘調査では、縄文時代から中・近世の遺構と遺物が検出された。旧石器時代の調査は、基本土層を観察するため深掘グリッドを設定したが遺物は検出されなかった。

縄文時代の竪穴住居跡は、調査区の南側E・F-4・5グリッドに5軒がまとまっている。土壌は、竪穴住居跡の北側の少し高い範囲に分布している。

弥生時代の竪穴住居跡は、調査区全域に分布し16軒検出された。集落の範囲は、東西方向に広がっていることが窺える。竪穴住居跡の主軸は、北西と北東方向の2つに大きく分けられる。

古墳時代の竪穴住居跡は1軒、平安時代の竪穴住居跡は4軒検出された。過去の調査で複数軒検

出されており、集落の中心部分は東側の可能性が高い。

基本土層は、B-2グリッドに設定した深掘グリッドの断面を用いた。

第I層：表土、耕作土、色調は黒褐色である。

第IIa層：黒褐色土、第I層と比べ粒系が細かくしまりがある。

第IIb層：灰褐色土、赤色スコリアを若干含む。ローム層への漸移層と思われる。

第IV層：ハードローム、色調は橙色で赤色スコリア、白色粒子を含む。

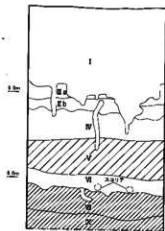
第V層：第1暗色帯、色調はにぶい褐色で赤色スコリア、黒色スコリア、白色粒子を含む。第IV層と比べ、粘性が強くなる。

第VI層：ハードローム、色調は暗褐色で赤色スコリアを少量含む、浅黄橙と赤色スコリアがブロック状に含まれる。

第VII層：第2暗色帯上部、色調は暗褐色で第VI層より色調は若干明るい。

第IX層：第2暗色帯下部、色調は黒褐色で粘性が強く、ベトベトである。

以上各層位の説明であるが、武蔵野面のローム層とは様相が異なっている。第III層のソフトローム層は確認できなかった。第VI層から下部は水の影響を受けており、色調の変化は少なく暗褐色を呈している。特に第IX層は粘土化が著しい。



第3図 基本土層

IV 遺構と遺物

1. 縄文時代

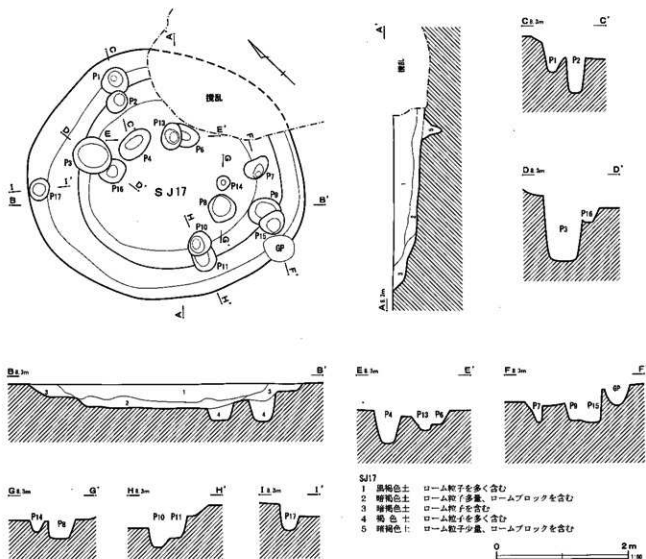
(1) 住居跡

第17号住居跡 (第6図～第7図)

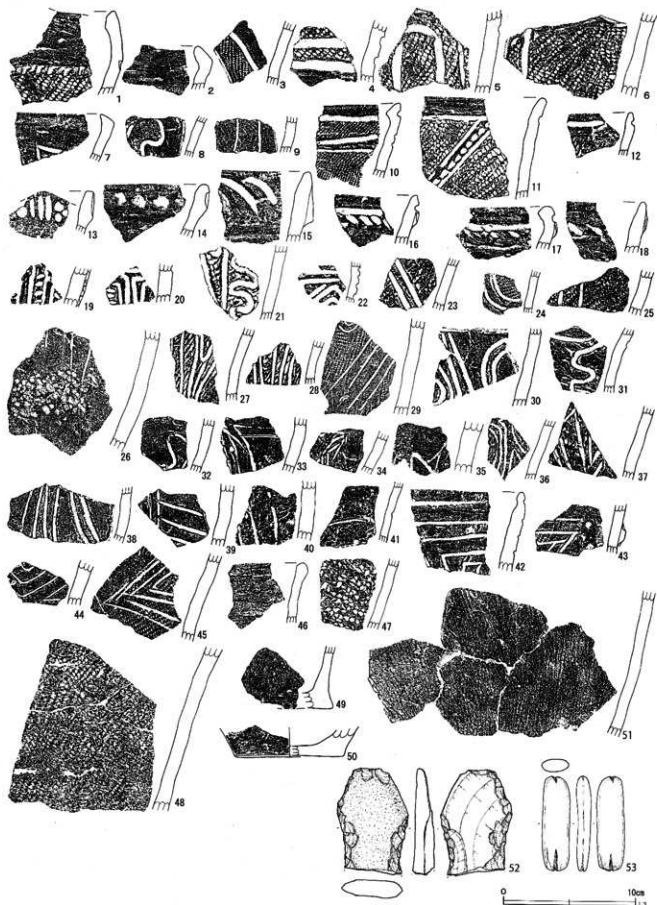
F-5グリッドで検出された。中期末葉の第22号住居跡に近接し、後期前葉の第18号住居跡と重複関係にある。住居東側の一部が攪乱によって失われているが、平面形態は長径4.2m、短径3.8mの楕円形で、2段の掘り込みを有する。壁は、中央部分で検出面から0.52m、浅い部分では0.12mである。埋土は自然堆積で、炬を持たないことから、いわゆるベッド状遺構あるいは小竪穴状遺構の拡張の可能性が考えられる。この住居跡に伴う

柱穴は総数15基が検出された。位置関係が不安定であるが、内周する壁に接して比較的深い柱穴が穿たれる傾向がうかがえる。

第7図は第17号住居跡出土遺物で、中期後半から後期前葉までの土器を含んでいるため、住居の使用ないしは廃絶時期を明確にしがたい。1は加曾利EⅣ式、2～3・7～10は称名寺式、4～6・11～41は堀之内1式である。47・48は縄文のみの破片、51は無文の胴部、49・50は底部破片だが、堀之内1式であろう。42～47は堀之内2式と



第6図 第17号住居跡



第7图 第17号住居跡出土遺物

考えられる。

石器の出土は2点のみである。52は分銅形石斧で、中央から刃部が欠損している。砂岩製で、長さ8cm、幅5.4cm、厚さ1.7cm、重さ82.4gである。53は石錘で、黒色頁岩の礫の両端に抉りを施している。長さ7.2cm、幅2.1cm、厚さ1.1cm、重さ26.8gである。

第18号住居跡（第8図・9図）

E-F-4~5グリッドで検出された。遺構検出時に遺物が集中していたことから慎重に調査を進めたが、壁の掘り込みを検出することはできなかった。従って、炉と柱穴の位置関係に遺物の分布状況を加味して住居跡と判断した。

住居跡は炉を中心に柱穴が円形に廻ると想定され、特に南西側のP11~P13、P9、P10の位置から、あるいは柄鏡形住居の可能性も考えられる。

炉は長径1.6m、短径1.3mの楕円形で、検出面からの深さは0.43mである。

第9図に出土遺物を示した。すべて遺構検出時に出土したものである。1は底部から直線的に開く深鉢形土器で、胴中位までに蕨手状と直線的な懸垂文が描かれ、以下が無文となる。2は小型深鉢で、器面前面に細い沈線で格子目状の沈線文が描かれている。堀之内1式の最も新しい様相であろう。

3~4は口縁部に幅狭い文様帯をもち、無文の頸部を挟んで、胴部が丸みを持つ深鉢形土器であろう。5~6は縄文地上に沈線文をもつ深鉢である。7以下は沈線のみで文様が描かれた土器、あるいは無文の土器を一括した。文様には7の細い沈線による格子目文と思われる文様、11の平行沈線文と蕨手文、12の懸垂文間が斜行沈線で連結された文様などがある。20は球形胴の注口土器で、把手に接する注口部の両側に、円形刺突をもつ貼付文が認められ、注口部を中心に微隆起線による文様が展開すると考えられる。

石器は24・25に示した2点のみである。24は磨

り石の欠損品で安山岩製、長さ12.5cm、幅10cm、厚さ5.6cm、重さ1029g。25は、片縁に敲打痕があり、台石と考えられる。閃緑岩製、長さ14.7cm、幅17.8cm、厚さ3.5cm、重さ1405gである。

第22号住居跡（第10図~13図）

F-4~5グリッドで検出された。縄文時代後期の第18号住居跡、弥生時代後期の第14号、15号住居跡と重複関係にある。第22号住居跡は、径3.3mの隅丸方形の比較的小ぶりの住居跡である。壁は垂直に掘り込まれているが、検出面からの深さは0.14mと浅い住居跡である。床面は平坦で、部分的にロームブロックを基調とした貼り床が認められた。

この住居跡に伴う柱穴は、埋甕と炉を結ぶ主軸の奥壁寄りのP2と、壁のコーナー近くに位置するP3、P6、P1、P4が想定されるが、南東壁寄りでは検出することができなかった。

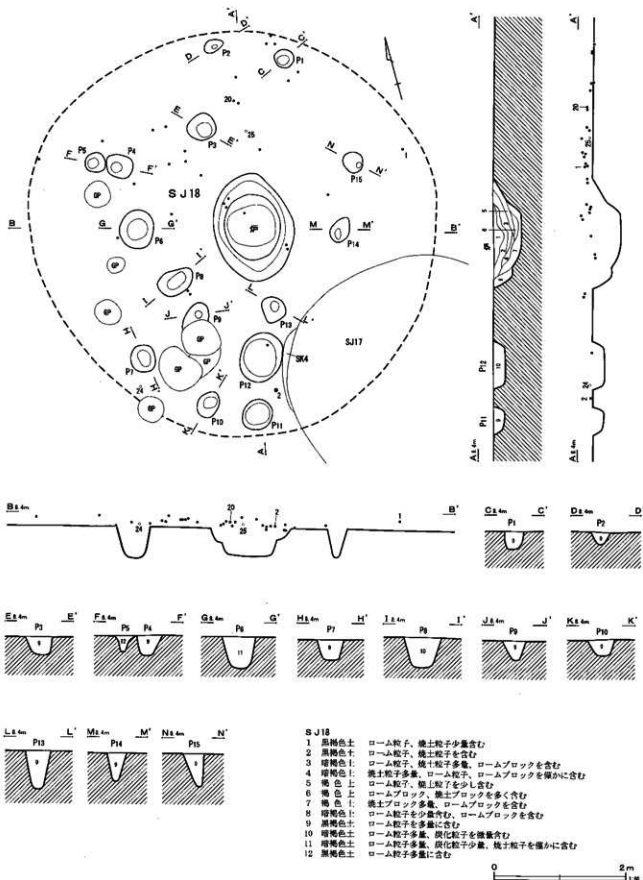
床面の中央部から入口寄りに炉が検出され、胴下半部を欠いた加曾利EⅢ式新段階の深鉢形土器（第11図2）が埋設されていた。さらに、炉の南西側に埋甕（第11図1）が埋設されており、縄文時代中期末の典型的な在り方を示している。

第11図~13図は第22号住居跡出土遺物である。第11図1は埋甕である。緩いくびれ部を境に上下2段の文様が描かれる深鉢で、上半は長方形とU字状のモチーフで、長方形のモチーフ内にはS字状の沈線が描かれている。下段は逆U字状ないしは長方形と蕨手状のモチーフが6単位に配置されている。閉塞されたモチーフ外の縄文は磨り消されている。口径19.2cm、推定器高34.0cmである。

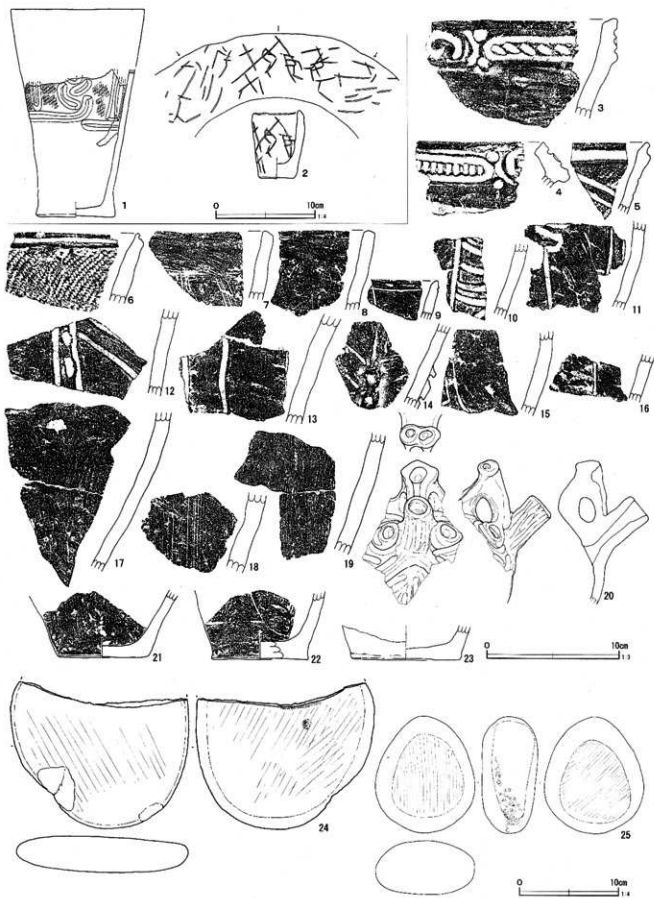
2は炉に埋設されていた土器で、口唇無文部に接して幅狭い逆U字状文が垂下する。沈線間の地文は磨り消されている。口径31.5cm、推定器高38.0cmである。

3は床面に伏せた状態で検出された磨り消し懸垂文の底部破片である。

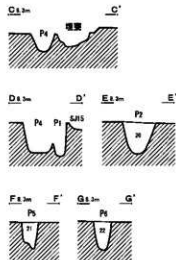
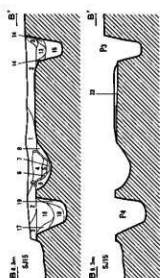
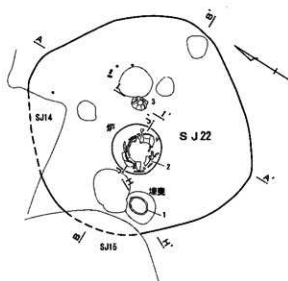
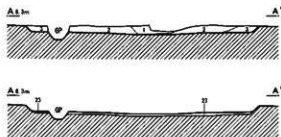
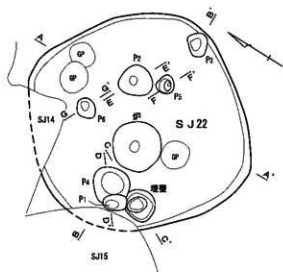
4~22は埋土中から出土した土器である。4~



第 8 図 第 18 号住居跡



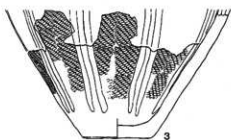
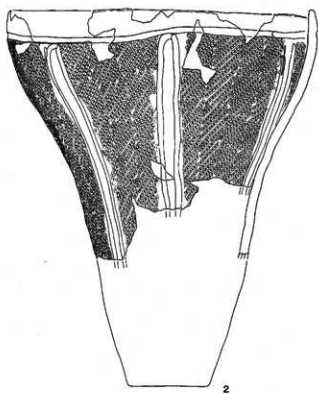
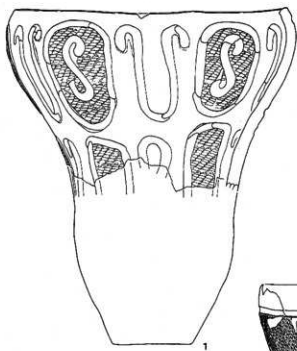
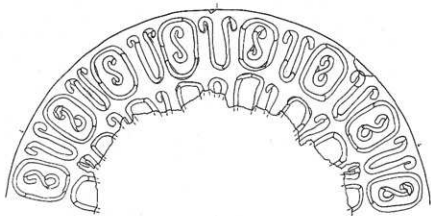
第9图 第18号住居跡出土遺物



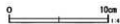
- S J 22
- 1 黒褐色土 ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子を少し含む
 - 2 暗褐色土 ローム粒子少量、ロームブロックを含む
 - 3 暗褐色土 ロームブロックを多く、ローム粒子を含む
 - 4 黒褐色土 焼土粒子多量、ローム粒子を含む
 - 5 暗褐色土 焼土ブロック多量を含む
 - 6 暗褐色土 焼土粒子多量、ローム粒子、ロームブロックを含む
 - 7 暗褐色土 ローム粒子を多く、焼熱して硬化したロームブロックを含む
 - 8 暗褐色土 ローム粒子を多く、焼土粒子を含む
 - 9 暗褐色土 ロームブロック多量を含む
 - 10 暗褐色土 ローム粒子を含む
 - 11 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多く含む
 - 12 黒褐色土 ローム粒子を多く、焼土粒子を含む
 - 13 暗褐色土 ローム粒子を多く含む
 - 14 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量を含む
 - 15 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量を含む
 - 16 暗褐色土 ローム粒子を多く、焼土粒子、炭化粒子を少し含む
 - 17 暗褐色土 ロームブロックを多量、ローム粒子を含む
 - 18 褐色土 ロームブロックを多量、ローム粒子を含む
 - 19 暗褐色土 ロームブロックを多く、ローム粒子を含む
 - 20 暗褐色土 ローム粒子を多く含む
 - 21 暗褐色土 ロームブロックを少し、ローム粒子を含む
 - 22 褐色土 ロームブロックを少し、ローム粒子を含む
 - 23 暗褐色土 ロームブロックを多く、ローム粒子を含む

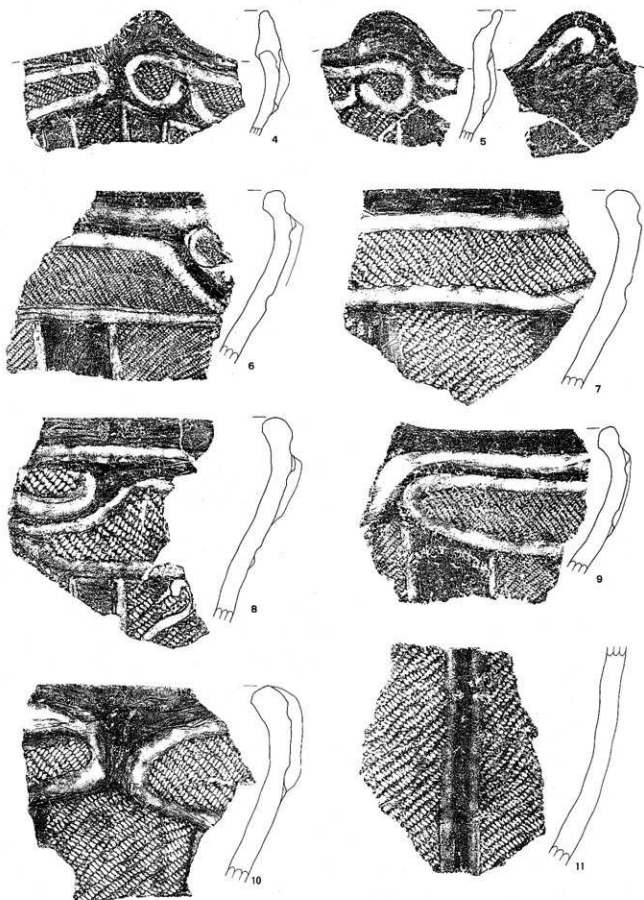


第10図 第22号住居跡出土遺物

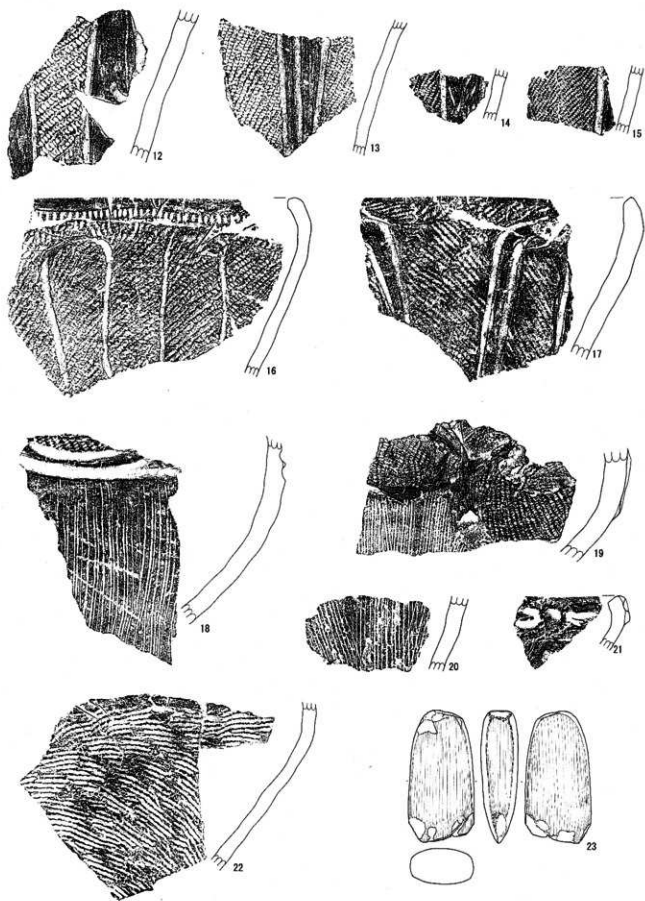


第11圖 第22号住居跡出土遺物 (1)

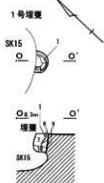
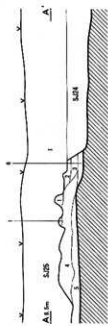
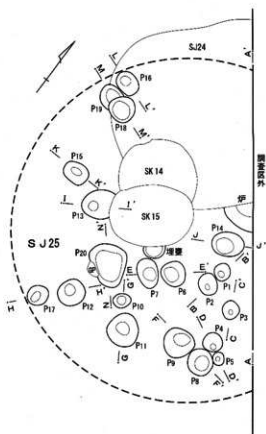




第12图 第22号住居跡出土遺物(2)



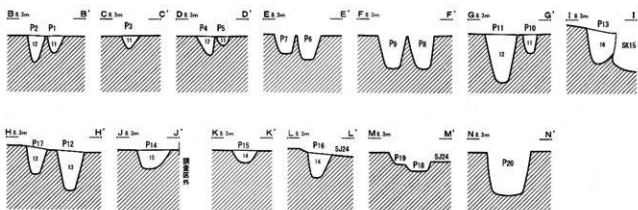
第13图 第22号住居跡出土遺物(3)



S J 25

表土 (遊成土)

- 1 黒褐色土 ローム粒を隔かに含む
- 2 黒褐色土 ローム粒少量含む
- 3 暗褐色土 ローム粒少量、粘土粒を含む
- 4 黒褐色土 ローム粒を含む
- 5 暗褐色土 ロームブロックを多く、ローム粒を含む
- 6 暗褐色土 粘土粒子多量、焼土ブロック少量、ローム粒を含む
- 7 黒褐色土 ローム粒を多く含む
- 8 暗褐色土 ローム粒を含む
- 9 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒を含む
- 10 黒褐色土 ローム粒子多量、ロームブロックを含む
- 11 暗褐色土 ローム粒子少量含む
- 12 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを含む
- 13 暗褐色土 ローム粒子、炭化粒少量含む
- 14 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む
- 15 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロックを含む
- 16 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを隔かに含む



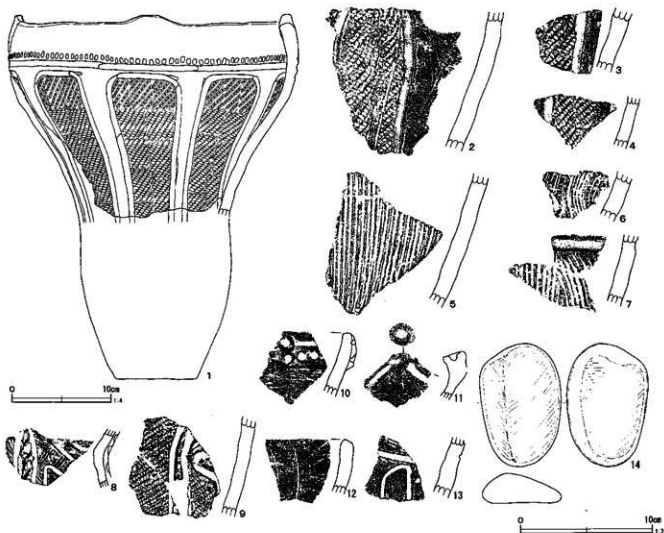
第14図 第25号住居跡

5は小突起をもつ口唇部破片で、同一個体である。6～10は平縁の口縁部破片で、6、9は同一個体であろう。いずれもモチーフは沈線主導で描かれ、口縁部と胴部の境界が緩やかとなり、幅広い懸垂文が描かれる特徴がある。11～15は磨り消し懸垂文の胴部破片である。

16～17は連続する波状文が描かれた深鉢形土器

で、17は下部から逆U字状文が貫入する構成である。16は口唇下に刺突文が廻る。17は口唇の縄文施文方向を変えている。

18～20は両耳壺と推定され、胴下部には槌状工具による条線が施文されている。21は小型土器の口縁部破片で、モチーフの一部が刺突文で表現されている。22は鉢ないしは両耳壺であろう。



第15図 第25号住居跡出土遺物

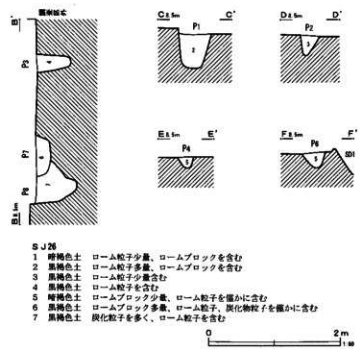
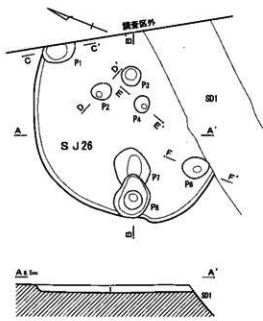
住居跡から出土した石器は、1点のみである。23は磨製石斧で、刃部は欠損後に再生された痕跡がある。砂岩製で、全長10cm、幅5cm、厚さ2.8cm、重さ269gである。

第25号住居跡（第14・15図）

E-4～5グリッドで検出された。炉と埋甕周囲から多数の柱穴が検出されたことから、壁柱穴が廻る住居跡と判断した。東半分が調査区域外にあり、土壌や住居と重複しているため、全容を把握しがたい。掘り込みを検出することはできなかったが、径が5m程度の円形の住居であろう。炉は住居の奥壁寄りに位置すると推定される。調査区域外に延びることや、第24号住居跡によって大半が破壊されているため、詳細は不明であるが、

ほぼ円形で皿状の掘り込みを持つ地床炉であろう。炉の西側で埋甕が検出された。第15号土壌により半周分が破壊されていたが、胴下部を欠いた深鉢形土器が埋設されていた。この住居に伴うと判断した柱穴は、総数20基である。柱穴が近接していることや、一部で重複関係にあることから、建て替えられた可能性がある。炉と埋甕を住居の主軸とすると、P11、P13が入口寄りの対ピットと想定され、壁柱穴で上屋を支える住居と想定される。

第15図が住居跡から出土した遺物である。1は埋甕で、4単位の小突起をもち、無文の口唇部と胴部に一帯の文様帯を持つ深鉢形土器で加曾利EⅢ式古段階であろう。口唇部と胴部は刺突列と沈線によって区画されている。胴部は下端解放の逆



第16図 第26号住居跡

U字状の沈線文が施文され、沈線文間の地縄文は磨り消されている。地縄文は胴上端がLRL、以下がLRである。胴下部が失われている。口径29.3cm、推定器高36.7cmである。

2～4は幅広い磨り消し懸垂文の深鉢胴部破片、5～7は櫛歯状工具で施文された深鉢であるいは両耳壺の可能性がある。

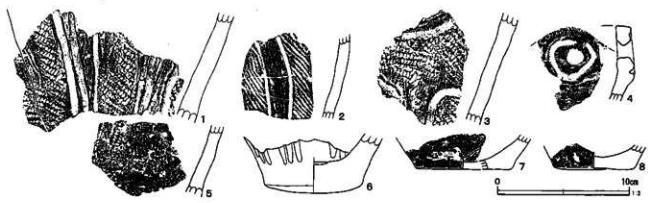
8は称名寺式、9～13は堀之内式である。遺構検出中に出土したもので本住居に伴うものではない。

14は磨り石で、断面三角形で平坦面に摩耗痕が

観察される。長さ9.2cm、幅6cm、厚さ2.3cm、重さ178g。

第26号住居跡 (第16図・17図)

E-4グリッドで検出された。住居の東側が調査区域外に延びるほか、南側が第1号溝によって破壊されていたため、全容を把握できなかった。遺存部位から、平面形態は、径が3.5m～3.1mの隅丸長方形と推測される。住居跡の壁は、西側では検出面から約0.1m程度と浅く、埋土も1層のみであった。床面はほぼ平坦であるが、貼り床などは検出できなかった。



第17図 第26号住居跡出土遺物

住居跡に伴う柱穴は総数8基が検出され、このうちP1、P6、P7、P8が主柱穴に相当すると考えられる。柱穴には柱痕などは確認できなかった。住居跡の平面形態や柱穴の位置関係からみて、炉跡は第1号溝に破壊されたものと推定される。

第17図が第26号住居跡出土遺物である。1は加曾利EⅢ式の磨り消し懸垂文が施文される深鉢胴下部、2は加曾利EⅣ式の球拍文が施文されると

思われる胴部破片、3は逆U字状沈線文が施文される胴部破片で、1と同時期と推定される。4は堀之内1式口縁部で、波頂部直下の円孔周囲に環状の沈線が廻っている。5は胎土等から加曾利E式と推定される。6は懸垂文が描かれる底部破片で、恐らく1と同時期であろう。7～8は時期不詳である。

(2) 土壌

第1号・第22号土壌 (第18図・21図)

C-3グリッドに位置する。第1号土壌は径0.69～0.97m、深さ0.14m、第22号土壌は長径1.75×短径1.06m、深さ0.28m。第1号土壌から加曾利EⅣ式土器(第21図1)が出土した。

第2号土壌 (第18図・21図)

F-4グリッドに位置する。一部が破壊されているが、径1.25×1.44m、深さ0.38mである。称名寺式の破片(第21図2～18)がまとまって出土した。

第4号土壌 (第18図)

F-5グリッドに位置する。径1.74×0.74mの楕円形で、深さ1.06mである。

第5号土壌 (第18図・21図・22図)

F-4グリッドに位置し、径が1.5m前後と推定される。深さ0.41mで底面は南に緩く傾斜している。

第21図19～第22図37が第5号土壌出土遺物である。19～20は加曾利EⅢ式、21～22、24は称名寺式終末、23、25～31は堀之内1式である。

第6号土壌 (第18図・22図)

E・F-4グリッド北東端に位置する。径1.0×0.7m、深さ0.52mである。堀之内式土器破片(第22図38・39)が出土した。

第10号土壌 (第18図・22図)

E-4・5グリッドに位置し、第24号住居跡、第1号溝に破壊され、一部が調査区域外に延びる。

径0.9～1.2mの楕円形で、深さ0.26mである。埋土内から称名寺式土器(第22図40・41)が出土した。

第17号土壌 (第18図・23図)

E-4グリッドに位置し、径が1.0m前後の楕円形と推定される。住居跡床面からの深さは0.42mである。第23図64～67が第17号土壌出土遺物で、称名寺式、堀之内式土器が出土した。

第11号土壌 (第18図・22図)

E-4グリッドに位置し、径0.6m前後、深さ0.3mである。加曾利EⅢ式土器(第22図42)が出土した。

第12号土壌 (第18図・22図)

E-4グリッドに位置し、径0.4～0.66m、深さ0.33mである。称名寺式土器片(第22図43)が出土した。

第13号土壌 (第18図・22図)

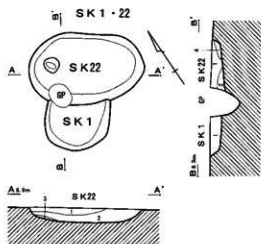
E-4グリッドに位置する。径0.47×0.9m、深さ0.53mである。第22図44が出土した。

第16号土壌 (第18図)

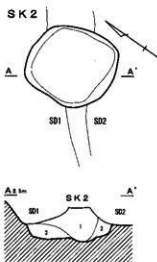
E-3グリッドに位置する。径0.5m前後、深さ0.42m。

第14号・第15号土壌 (第19図)

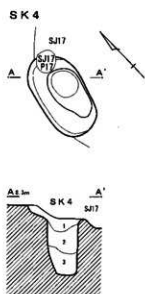
E-4・5グリッドに位置する。第15号土壌は、径0.95×1.27m、深さ0.53m。袋状である。第14号土壌は径0.7～1.2m、深さ0.65m。第15号土壌からややまとまった称名寺式土器(第22図49～63)が出土した。胴部2段J字文と推定される。



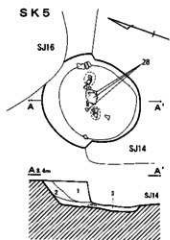
- SK 1
1 暗褐色土 ローム粒子を僅かに含む
- SK 22
1 黒褐色土 ローム粒子少量、焼土粒子を僅かに含む
2 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを含む
3 暗褐色土 ローム粒子を含む
4 黒褐色土 ロームブロックを多く、ローム粒子を含む



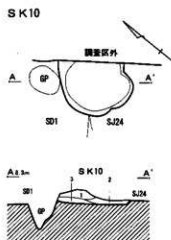
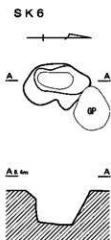
- SK 2
1 黒褐色土 ローム粒子を含む
2 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子を含む
3 褐色土 ローム粒子を多く、焼土粒子を含む



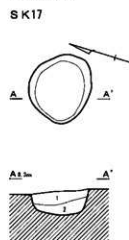
- SK 4
1 褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量含む
2 暗褐色土 ローム粒子を多く、ロームブロック、焼土粒子を僅かに含む
3 暗褐色土 ロームブロックを少量、ローム粒子を含む



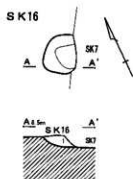
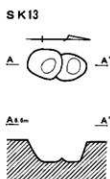
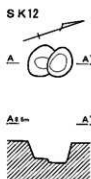
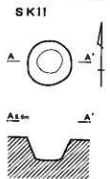
- SK 5
1 黒褐色土 ローム粒子を多く、焼土粒子を少量含む
2 暗褐色土 ローム粒子を多く含む
3 黒褐色土 ローム粒子を多く、焼土粒子を含む



- SK 10
1 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む
2 暗褐色土 ローム粒子を多く含む
3 暗褐色土 ローム粒子を多く、ロームブロックを少量含む



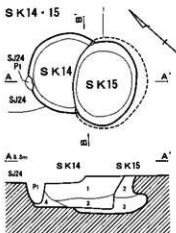
- SK 17
1 暗褐色土 ローム粒子を含む
2 暗褐色土 ローム粒子を少量含む



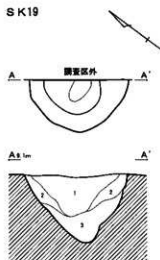
- SK 16
1 ぶい、黄褐色 ローム粒子を含む

0 2m

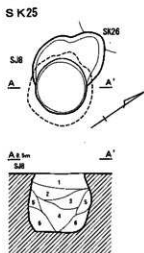
第18図 縄文時代の土壌 (1)



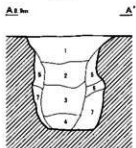
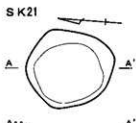
- SK14**
- 1 黒褐色土 ローム粒子多量、ロームブロックを含む
 - 2 暗褐色土 ローム粒子を含む
 - 3 黒褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多く含む
 - 4 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを少量含む
- SK15**
- 1 黒褐色土 ローム粒子を少量含む
 - 2 黒褐色土 ローム粒子、焼土粒子を少量含む
 - 3 黒褐色土 ローム粒子を含む、炭化粒子を少量含む



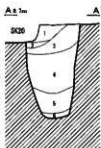
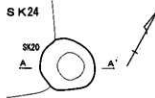
- SK19**
- 1 黒褐色土 ローム粒子を僅かに含む
 - 2 黒褐色土 ローム粒子を少量含む
 - 3 黒褐色土 ロームブロック少量、ローム粒子を含む



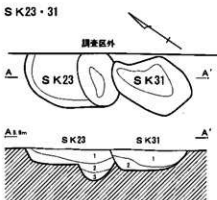
- SK25**
- 1 黒褐色土 ローム粒子を多く含む
 - 2 黒褐色土 ローム粒子を含む
 - 3 黒褐色土 ローム粒子を多く含む
 - 4 黒褐色土 ローム粒子を多く含む
 - 5 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロックを含む
 - 6 黒褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多く含む



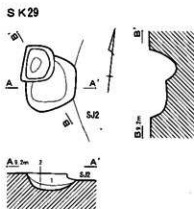
- SK21**
- 1 黒褐色土 ローム粒子を多量に含む
 - 2 黒褐色土 炭化物を僅かに、ローム粒子を含む
 - 3 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを少量含む
 - 4 黒褐色土 ローム粒子少量、ロームブロックを僅かに含む
 - 5 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多く含む
 - 6 暗褐色土 ロームブロックを多く、ローム粒子を含む
 - 7 黒褐色土 ローム粒子を多く、ローム粒子を含む



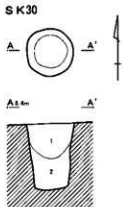
- SK24**
- 1 黒褐色土 ローム粒子を多く含む
 - 2 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む
 - 3 黒褐色土 ローム粒子を含む
 - 4 黒褐色土 ローム粒子少量、ロームブロックを僅かに含む
 - 5 黒土 ローム粒子を含む
 - 6 黒土 ローム粒子を多く、ロームブロックを少量含む



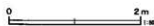
- SK23**
- 1 暗褐色土 ローム粒子を僅かに含む
 - 2 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子を僅かに含む
 - 3 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを含む
- SK31**
- 1 黒褐色土 ローム粒子を僅かに含む
 - 2 暗褐色土 ローム粒子を僅かに、ロームブロックを含む

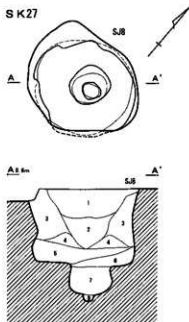


- SK29**
- 1 暗褐色土 ロームブロックを僅かに、ローム粒子を含む
 - 2 に近い黄褐色土 ロームブロックを多く、ローム粒子を含む



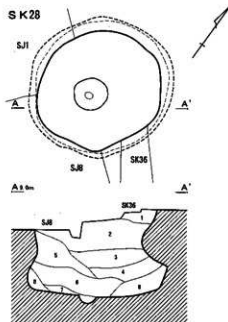
- SK30**
- 1 黒褐色土 ロームブロックを少量、ローム粒子を含む
 - 2 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを含む





SK27

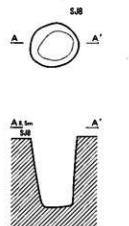
- 1 黒褐色土 黄土粒子を僅かに、ローム粒子を含む
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量、炭化物粒子を僅かに含む
- 3 褐色土 ローム粒子少量、ロームブロックを多く含む
- 4 黒褐色土 ローム粒子少量、ロームブロックを僅かに含む
- 5 黒褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多く含む
- 6 黒褐色土 ローム粒子を僅かに含む
- 7 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多く含む
- 8 黒土 ローム粒子を含む
- 9 暗褐色土 ローム粒子を含む、粘土層



SK28

- 1 黒土 ローム粒子多量、黄土粒子を含む
- 2 黒褐色土 ローム粒子多量、黄土粒子、炭化物粒子を少量含む
- 3 黒褐色土 ローム粒子を多く、黄土粒子少量、炭化物粒子を僅かに含む
- 4 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む
- 5 黒褐色土 ローム粒子を多く含む
- 6 黒褐色土 ローム粒子を多く、ロームブロックを僅かに含む
- 7 黒土 ローム粒子少量、ロームブロックを僅かに含む
- 8 黒褐色土 ローム粒子少量、ロームブロックを少量含む

SK32



第20図 縄文時代の土壌 (3)

63は帯状に縄文が垂下する特徴的な粗製土器である。第14号土壌からの遺物は少ない。

第19号土壌 (第19図)

C-3グリッドに位置する。径1.5m前後と推定される。深さ0.85m。

第25号土壌 (第19図・23図)

D-3グリッドに位置する。径1~1.3m、深さ1.04m。第23図88~96が出土遺物で、92~93の加曾利IV式および同時期の94~95の条線が垂下する底部破片などがある。

第21号土壌 (第19図)

D-3グリッドに位置する。径1.2~1.35m、深さ1.42m。当初は円柱に掘り込まれたものと考えられる。

第24号土壌 (第19図・23図)

D-3グリッドに位置する。径0.8m程度、深さ1.43m。第23図73~87が第24号土壌出土遺物である。73~80が加曾利E III式、81がE IV式、82~87が堀之内式に比定される。

第23号・第31号土壌 (第19図・23図)

C-3グリッドに位置する。第23号土壌は径1.5×1.08m、深さ0.47m。第31号土壌は径1.26×0.85m、深さ0.35m。遺物は第23号土壌から第23図71・72が出土した。

第29号土壌 (第19図)

A-1グリッドに位置する。径0.9~1.0m、深さ0.39m。

第30号土壌 (第19図)

A-2グリッドに位置する。径0.7m、深さ0.98m。

第27号土壌 (第20図・23図)

D-2~3グリッドに位置する。径1.5~1.8m、深さ1.63m。袋状である。底面には径0.4×0.35m、深さ0.4mの楕円形の一段深い掘り込みを有している。梯子穴であろうか。

第23図97~112が出土遺物である。97は縄文が施文された堀之内式粗製深鉢であろう。口径6.7cm、推定器高7.7cmである。

98・99は磨り消し懸垂文の胴部破片、100~101は口縁部破片で、101には逆U字状の磨り消し懸垂文が施文されている。102・103は微隆起線文を有する。107は抱球文の加曾利EⅣ式であろう。104~106は堀之内1式であろう。112は磨り石で、前面に摩耗痕が観察される。

第28号土壌 (第20図・24図)

C・D-2・3グリッドに位置する。径2m前

(3) 遺構外出土遺物

土器 (第25図~28図)

第I群 (第25図1~2)

早期に属するものを一括した。1は稻荷台式、2は茅山上層式であろう。

第II群 (第25図3~21)

前期に属するものを本群とした。

1類 (3~18)

繊維を含む土器を本類とした。3~6は黒浜式有文土器、7~11、14~17は縄文のみの粗製土器である。12~13はいわゆる正反の合の原体で、関山式である。

2類 (19~21)

諸磯式の無繊維土器を本類とした。19は1段多条、20~21は無文である。

第III群 (22~56)

中期に属するものを本群とした。

1類 (22~41)

加曾利EⅢ式。22~30は口縁部破片で渦巻状と方形の文様構成である。31~34は磨り消し懸垂文、

後、袋状で深さ1.61mである。底面に梯子穴と考えられる浅い掘り込みが認められる。

第24図が出土遺物である。113は胴上半に鋸歯状文が施文される波状口縁深鉢で、文様は列点で描かれている。114~117は口唇下に沈線が廻る鉢形土器であろう。117は内面に沈線が認められる。118は抱球文が施文される。119以下に胴部破片を一括した。120~122は磨り消し懸垂文、123は架懸文であろう。124・125は抱球文である。132には対向U字状文が描かれる。135~139は堀之内1式で、混入であろう。140は台付土器の底部で、加曾利E式であろう。

第32号土壌 (第20図)

D-3グリッドに位置する。径0.64~0.74m、深さ1.08m。

36は鋸歯文が施文されている。35は口唇部の列点文以下は全面に縄文である。37は対向U字状文が描かれている。38~41は口縁部文様帯をもたない土器で、比較的幅広い沈線で、逆U字状文が施文された土器である。

2類 (42~56)

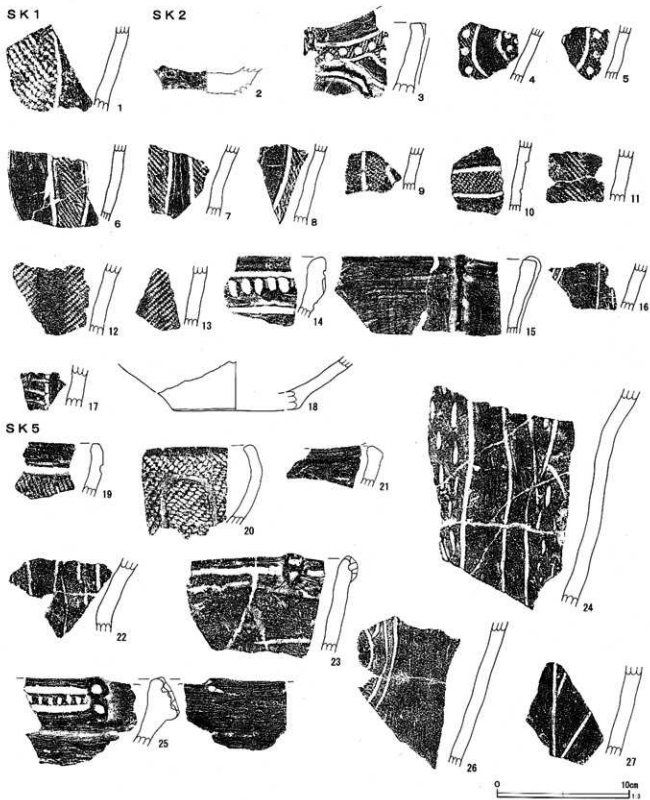
加曾利EⅣ式。42~51は比較的幅狭い沈線で、抱球文ないしは対向U字状文が施文された土器、52は口縁無文部直下に円形刺突が廻る。55~56は鉢形土器で、口唇無文下には条線が施文されている。53~54は微隆起線で文様が描かれた土器である。

第IV群 (57~86)

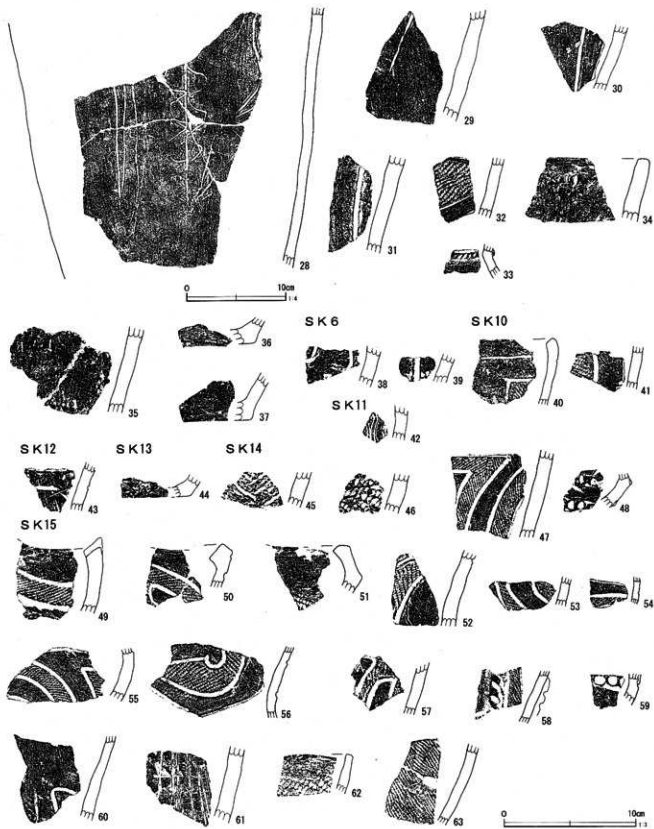
称名寺式土器を本群とした。

1類 (57~76)

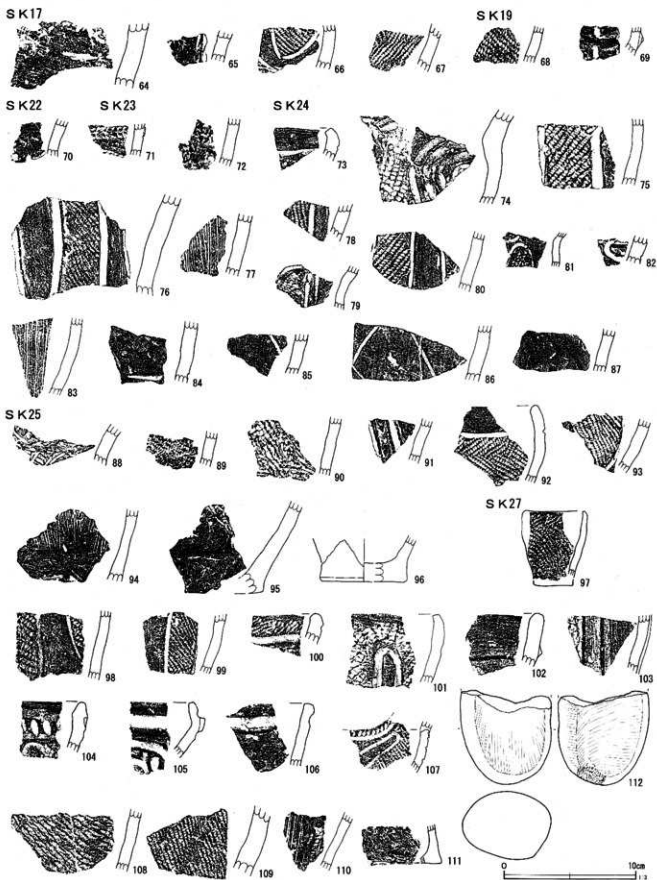
磨り消し縄文により文様が描かれる土器を一括した。上下に連接したJ字文を主眼とするが、66のように杵状の区画文を想起させるものもある。65は文様がはっきりしないが、あるいは後期に下



第21図 縄文時代の土城出土遺物（1）

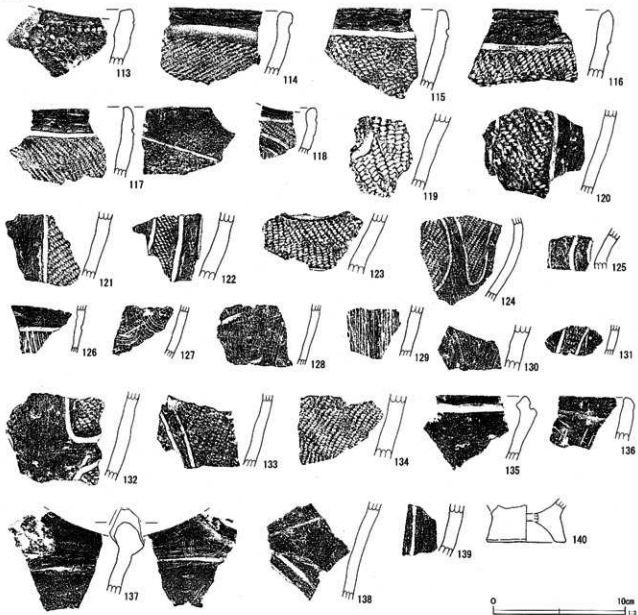


第22図 縄文時代の土壊出土遺物（2）



第23図 縄文時代の上埴出土遺物(3)

S K 28



第24図 縄文時代の土器出土遺物(4)

が加曾利E系の土器であろうか。

2類 (77~82)

沈線間に列点が充填された土器を一括した。77のように、内屈する特徴的な口唇部が存在する。沈線の描出は1類に比較し、雑な観がある。沈線間の充填は、82のような円形刺突もある。

3類 (83~86)

沈線のみで文様が描かれる土器を一括した。

第V群 (87~117・119~121・123~131・133~136)

堀之内1式を本群とした。

1類 (89・90~108)

縄文地上に沈線文が描かれる土器を一括した。幅狭い口縁部文様帯で、胴部に縦区画線の文様が展開される。

2類 (136)

沈線によるJ字状のモチーフを基調とし、横位に連接される文様構成の土器である。壺形の器形が想定される。出土資料は本例のみである。

3類 (87~88・112・114~117・119~121・123~133)

沈線のみで文様が描かれる土器である。口頸部が外反し口縁部が内屈する87~88、115~117、130~131のような器形と、口縁部直下から文様が描かれる109~114・120~121の器形とに2分される。小破片だが、1類と同様の文様構成と見做して差し支えないであろう。

第VI群 (118・122・137~147・152~153)

堀之内2式を本群とした。底部から直線的に開き、胴上半に文様帯をもつ深鉢形土器である。文様は横帯内に鋸歯状、x字状のモチーフが描かれるものと、杵状の区画が描かれるものなどがある

ようである。沈線間には縄文が充填されている。2点の底部破片もこの時期に属するものと思われる。

第VII群 (132・148~151)

加曾利B式土器を一括した。149は4単位波状口縁のいわゆる高井東式土器で、151は胴部破片であろうか。148は格子目状の沈線文が描かれる深鉢、150は口唇下に隆帯が貼付された粗製土器、132は紐線文系粗製土器である。

石器 (第29図)

石鎌 (154)

五角形状で基部に緩い抉りを持つ。チャート製で、長さ3.1cm、幅1.8cm、厚さ1.1cm、重さ14.3gである。

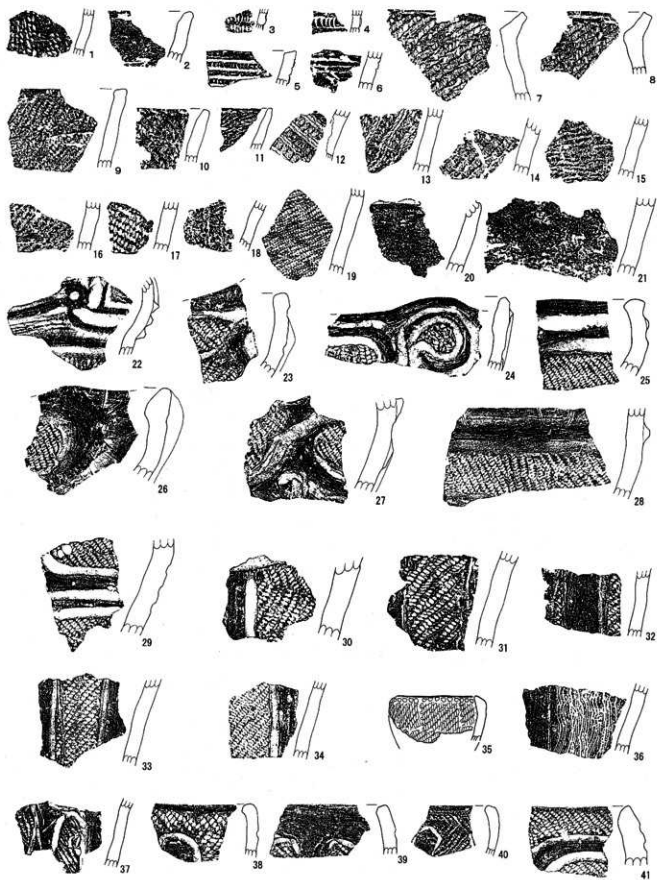
打製石斧 (156・157)

156はホルンフェルス製、長さ10.9cm、幅6cm、厚さ2.2cm、重さ145.6g。157は緑泥片岩製で、長さ5cm、幅4.7cm、厚さ0.9cm、重さ26gである。磨製石斧 (155・158・159)

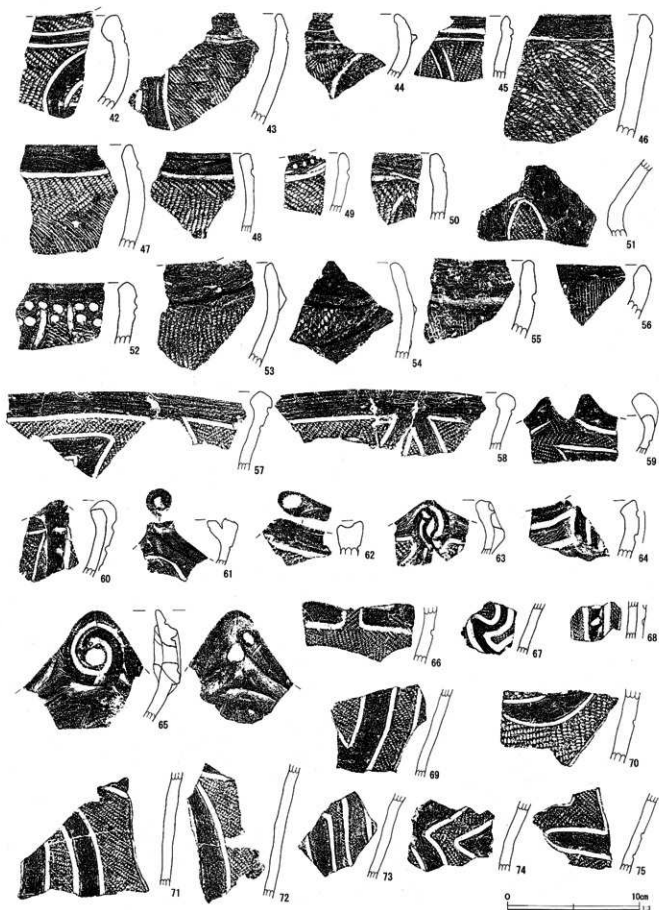
155は製作途中で使用されたものであろう。黒色頁岩製で、長さ4.5cm、幅2.8cm、厚さ0.8cm、重さ14.3gである。158~159はいずれも両側縁が丁寧に面取りされた丁寧な作りで、158は刃部が再生されている。158は頁岩製で、長さ4cm、幅2.8cm、厚さ0.8cm、重さ16.4g。159は緑色岩製で、長さ5.3cm、幅4.5cm、厚さ2.9cm、重さ110.6gである。

石剣 (160・161)

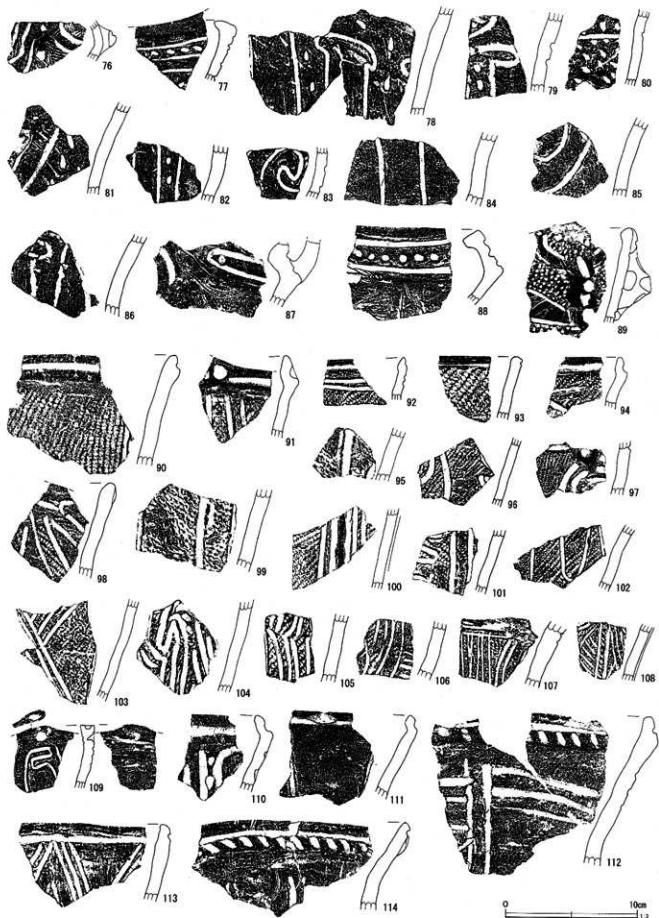
いずれも全体に研磨された丁寧な作りである。160は長さ5.5cm、幅3.1cm、厚さ1.3cm、重さ41.8g。161は長さ19.3cm、幅3.5cm、厚さ2.4cm、重さ261.7g。いずれも緑泥片岩製である。



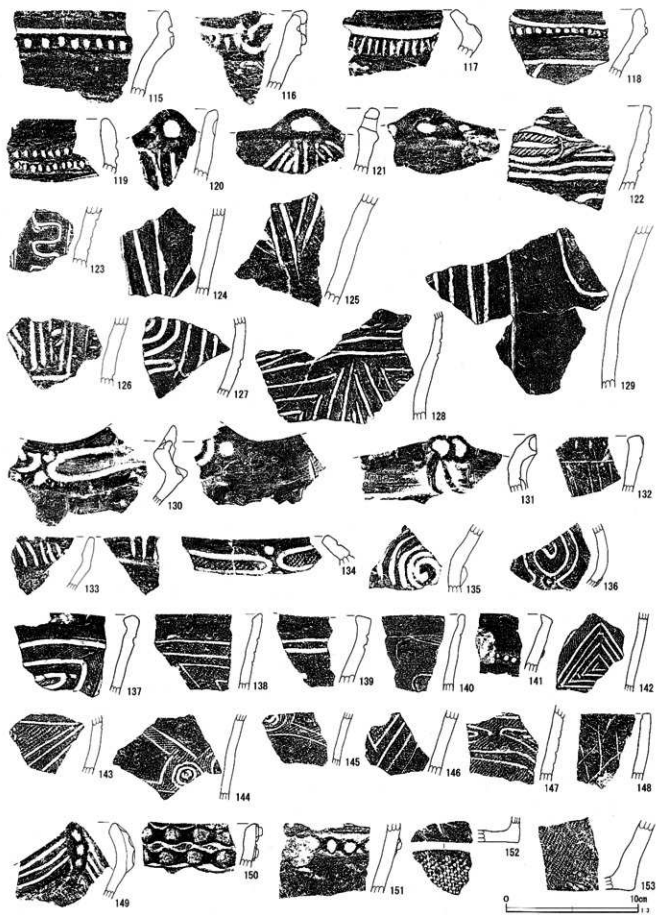
第25图 遺構外出土織文土器(1)



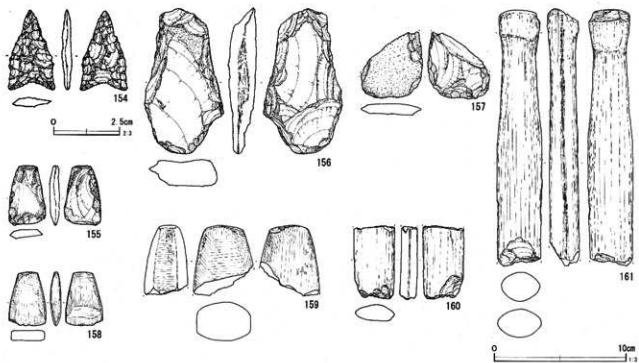
第26圖 遊標外出土縄文土器(2)



第27圖 遺構外出土繩文土器(3)



第28图 遺構外出土繩文土器(4)



第29圖 遺構外出土繩文石器

2. 弥生時代

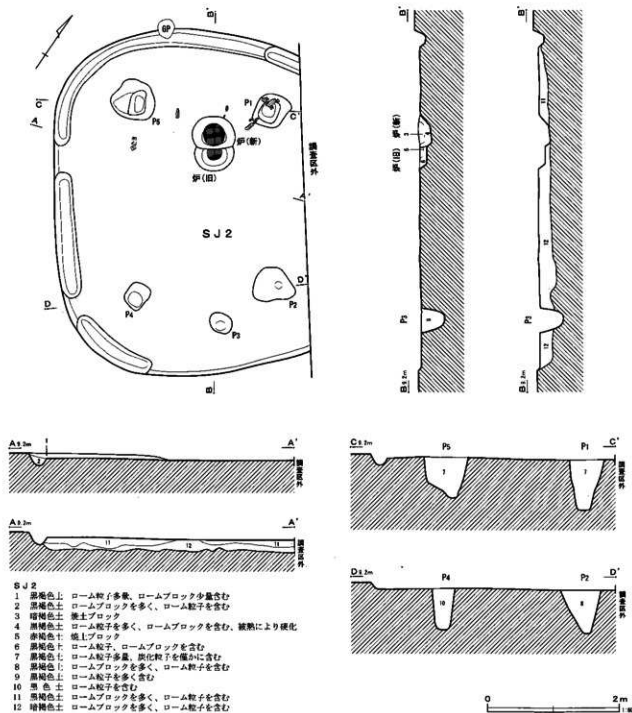
(1) 住居跡

第2号住居跡 (第30図)

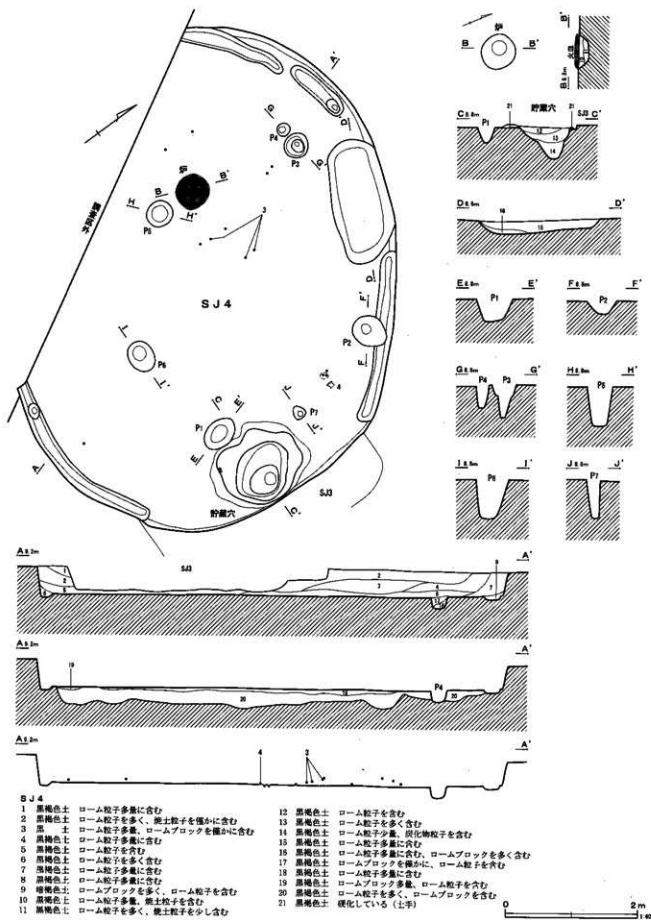
A-1・2、B-2グリッドに位置する。東側の壁は調査区外となる。平面形は隅丸の方形で長軸は5.24m、短軸は現状で3.80mである。主軸方

位はN-35°-Wを指している。

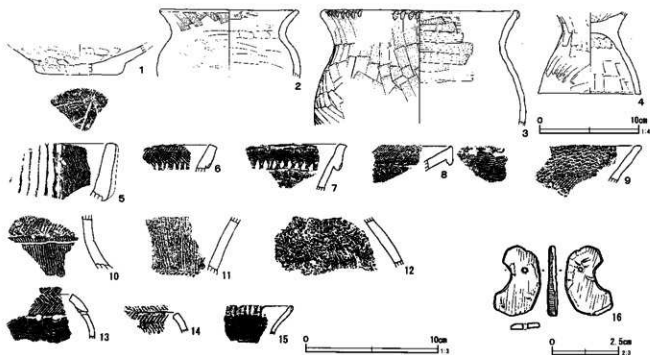
住居跡の掘り込みは浅く、覆土は部分的にしか確認できなかった。壁溝はほぼ全体に廻っている。主柱穴はP1、2、4、5の4箇所検出され



第30図 第2号住居跡



第31図 第4号住居跡



第32図 第4号住居跡出土遺物

第2表 第4号住居跡出土遺物観察表(第32図)

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	壺	—	(3.0)	(8.8)	—	BGH	良好	明赤褐	外面赤彩 底面木葉痕	24
2	甕	10.2	(6.8)	—	—	HJ	堅致	におい褐	—	24
3	台付壺	20.1	(11.6)	—	—	HJ	良好	褐灰	No.6、7 胴部最大径21.3	24
4	台付壺	—	(8.3)	10.4	—	GHJ	良好	浅黄	No.13 底面分割式接合	8
16	勾玉	長さ2.6×幅1.8×厚さ0.4	—	—	—	—	—	—	No.23 滑石	24

た。P5は掘り込みが方形である。P1の周辺から炭化材が検出された。P3は入口に関連するものと思われる。炉跡は2箇所検出されており、切り合い関係から北側に移動したことがわかる。遺物は図示できるものは出土していない。

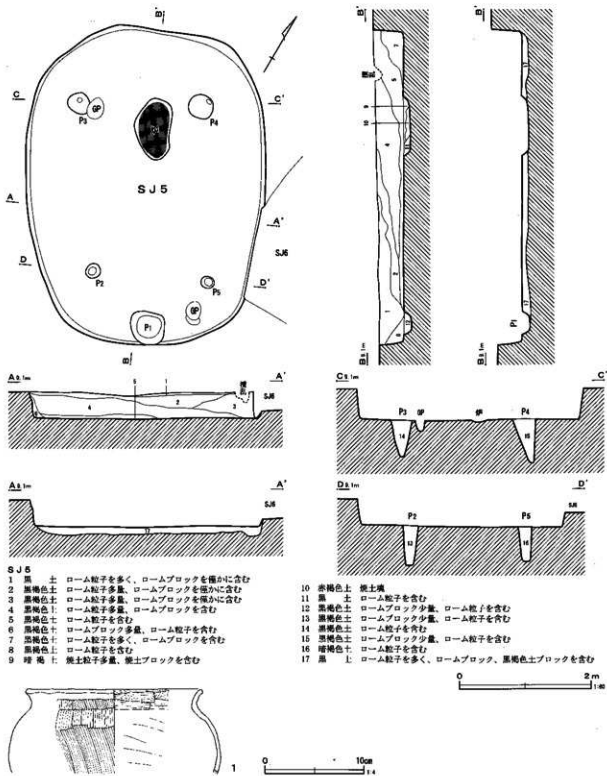
第4号住居跡(第31・32図)

B-1・2グリッドに位置する。西側の一部が調査区外となり、平安時代の第3号住居跡と重複している。平面形は楕円形で長軸は7.65m、短軸は現状で4.88mである。主軸方位はN-54°-Wを指している。

壁溝は、南西側を除くとほぼ全周している。支柱穴は明確でないが、北東側のP3、P7が径は小さいが掘り込みは深く可能性がある。貯蔵穴は南東側の壁の近くに位置し、周辺を土手状の高ま

りが囲んでいる。貯蔵穴の西側に位置するP1は入口関連の施設と考えられる。炉跡は北西側に位置し、火皿が作られている。北東の壁際に、長さ1.87m、幅0.9mの土壇状の窪みがある。

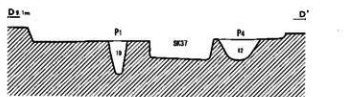
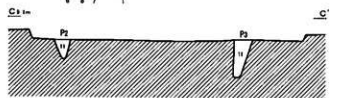
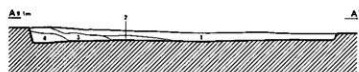
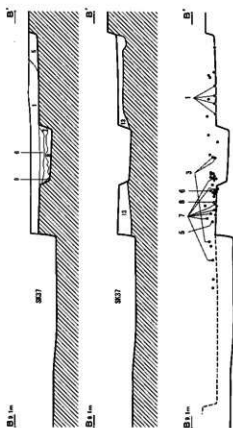
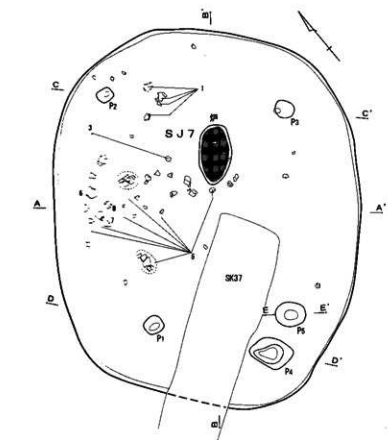
出土遺物は、1は外面赤彩で底部に木葉痕がつく。2は小形の甕である。器壁が厚く丁寧な造りで、口縁部にハケ調整が残り、胴部はハケ調整後に磨きが認められる。3と4は台付壺である。5は複合口縁壺形土器である。棒状浮文が6本貼付されている。ハケ状工具による櫛描波状文3段施文されている。6・7は複合口縁壺形土器である。8は折返し口縁壺形土器である。9は単口縁壺形土器である。10、11は壺形土器の頸部、12は胴部である。13、14は無頸壺口縁部である。15は台付壺口縁部である。16は滑石製の勾玉である。



第33図 第5号住居跡および出土遺物

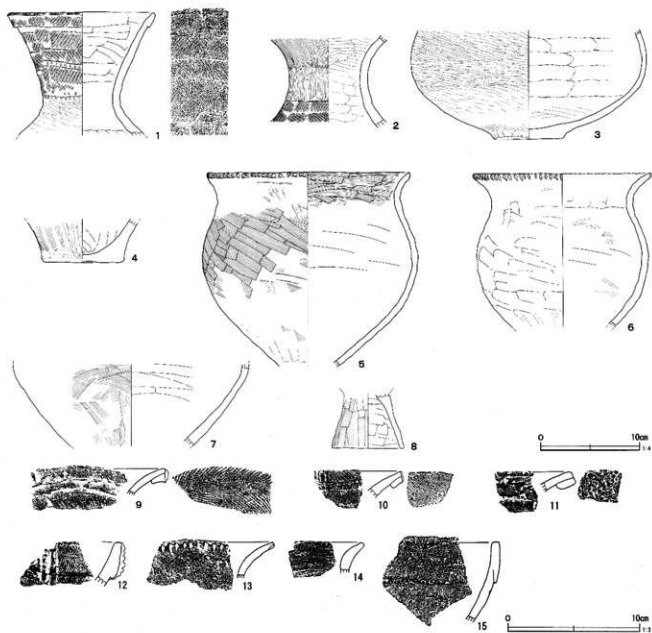
第3表 第5号住居跡出土遺物観察表 (第33図)

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	台付壺	(18.2)	(8.5)	—	—	H J	良好	明赤褐	胴部最大径21.4cm	24



- S J 7
- 1 黒褐色土 焼土粒子を多く、ローム粒を含む
 - 2 黒褐色土 ローム粒子を多く、焼土粒を含む
 - 3 黒褐色土 ローム粒子多量、炭化物粒子少量含む
 - 4 黒褐色土 ロームブロック少量ローム粒を含む
 - 5 黒褐色土 ローム粒を含む
 - 6 黒褐色土 焼土粒多量、ローム粒を含む
 - 7 赤褐色土 焼土ブロック
 - 8 褐色土 炭粉ロームブロック
 - 9 黒褐色土 焼土粒子を多く、ローム粒を含む
 - 10 黒褐色土 ローム粒子多量、ロームブロックを含む
 - 11 黒褐色土 ローム粒を含む
 - 12 黒褐色土 ローム粒少量含む
 - 13 黒褐色土 ロームブロックを多く、ローム粒を含む

第34图 第7号住居跡



第35図 第7号住居跡出土遺物

第4表 第7号住居跡出土遺物観察表(第35図)

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	壺	15.5	(17.4)	—	—	G H J	良好	にぶい褐	No6、7	9
2	壺	—	(8.6)	—	—	G H J	堅致	にぶい赤褐	内面一部に赤彩らしきものあり	24
3	壺	—	(11.0)	7.0	—	G H J	堅致	明赤褐	No11	9
4	台付甕	—	(8.2)	—	—	G H J	良好	にぶい赤褐	胴部 外面一部に煤付着	24
5	壺	—	(4.4)	8.4	—	G H J	良好	明赤褐	底部 内面に煤付着	9
6	台付甕	20.6	(19.5)	—	—	H J	良好	明赤褐	No12、14、17他	24
7	台付甕	18.0	(15.4)	—	—	G H J	良好	橙	No36	24
8	台付甕	—	(5.5)	7.8	—	H J	—	橙	No40	9

第5号住居跡（第33図）

B-2、C-2グリッドに位置する。平面形は楕円形で長軸は4.78m、短軸は3.65mである。主軸方位はN-32°-Wを指している。

掘り込みは遺構確認面から0.46mと深く、残りは良好である。P2～5が主柱穴。P1は入口に関連すると思われる。炉跡は北側に寄り、P3とP4の間に位置する。遺物は台付甕が出土した。

第7号住居跡（第34・35図）

C-2・3グリッドに位置する。平面形は楕円形で長軸は5.67m、短軸は4.68mである。主軸方位はN-42°-Eを指している。

南側の一部が第37号土壌と重複し、壊されているが、掘り込みは、遺構確認面から0.24mと残りは良好である。

壁溝はない。柱穴は5箇所検出された。P1～3・5は主柱穴と考えられる。P4は位置から貯蔵穴と思われる。入口に関連する柱穴は検出できなかったが、第37号土壌によって壊されている可能性がある。

遺物は北東側、炉跡の周辺を中心にまとまっていた。1は複合口縁壺形土器である。口端部及び口縁部にL R単節縄文を施文する。頸部上半はL R→R L→L R→L R単節の順で施文し、それぞれに端末結節が認められる。頸部下半はハケ調整後磨きが施されている。2は壺形土器である。頸部は細い横走線紋により区画し、上を丁寧な縦位の磨きを加えている。線紋下はL R単節及びR L単節縄文を施文して羽状構成になっている。3は下膨れの壺形土器である。胴部下位の最大径より底部に向かって斜位→横位→斜位の順に丁寧な磨きを施している。4は壺形土器の底部である。底部に向かって縦位の磨きを加えられている。5は台付甕である。口端部に刻目を施し口縁部から頸部にかけては、ハケ調整をナデ消している。胴部は最大径付近までハケ調整が明瞭に残るが、以下

はナデ消している。6は口縁部が大きく外反する台付甕である。口端部に刻目を施し、内外面全体にナデ調整を加えている。一部ハケ調整が残る。7は器壁の厚い台付甕である。胴下半部に粗いハケ調整が施されている。8は台付甕の脚部である。

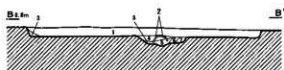
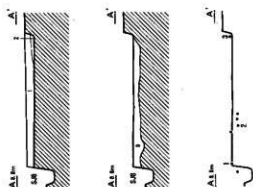
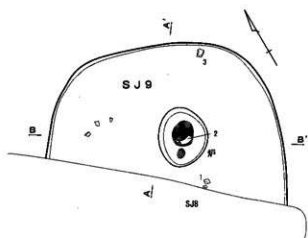
9、10、11は複合口縁壺形土器である。内外面赤彩が施されている。12は複合口縁壺形土器である。口端面にL R単節縄文を施文され、口縁部にR L単節およびL R単節縄文を施文して羽状にしている。刻目を施した棒状浮文を貼付する。13は小形壺の口縁部である。外面に細かいハケ状工具によるナデが施されている。14は台付甕口縁部である。15は折返し口縁の鉢である。口端面にR L単節縄文が施され、口縁部以下R L単節及びL R単節縄文を交互に施文して羽状としている。口端部に円形竹管による刺突列及び、胴部に工具刺突列が施されている。

第9号住居跡（第36図）

D-3グリッドに位置する。南西側は平安時代の第8号住居跡によって壊されており、調査できたのは全体の半分以下である。平面形は楕円形になると考えられる。規模は短軸が3.62mで長軸は不明である。主軸方位は、炉跡の位置からN-30°-Eを指すと考えられる。

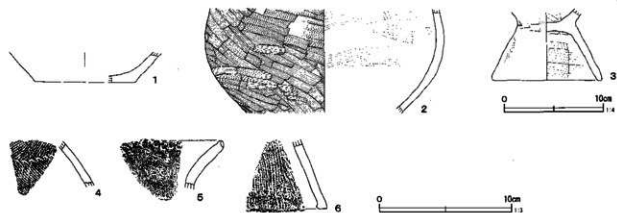
住居跡の掘り込みは、遺構確認面から約0.14mである。住居跡に伴う柱穴は見つかっていない。炉跡の焼土範囲から台付甕（2）が出土した。

出土遺物は、1は壺形土器の底部である。2は胴部の張る台付甕である。外面に斜位のハケ調整が施されている。3は台付甕の脚部である。4は壺形土器の胴部である。上段のL R単節縄文と下段のR L単節縄文の間にZ字状結節文を施文されている。5は台付甕の口縁部である。口端部に刻目が施されている。口縁部外面にナデ調整、頸部に縦位ハケ調整が残る。6は台付甕の脚部である。外面に縦位ハケ調整が施されている。



S J 9

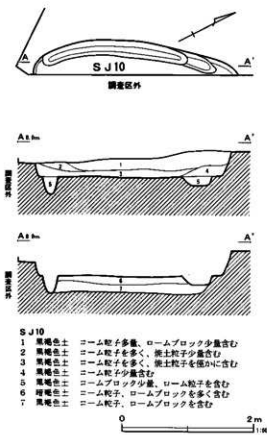
- 1 黒褐色土 ローム粒子を多く、細十粒子、炭化物粒子少量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多く含む
- 3 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多く含む
- 4 黒土 焼土粒子多量、ローム粒子を含む
- 5 暗褐色土 焼土ブロック
- 6 黒褐色土 焼土粒子を多く、ローム粒子を含む
- 7 黒褐色土 ローム粒子を少量、焼土粒子を含む
- 8 黒褐色土 焼土粒子を多量、ローム粒子、炭化物で硬化したロームブロックを含む
- 9 暗褐色土 ロームブロックを多量、ローム粒子を含む



第36図 第9号住居跡および出土遺物

第5表 第9号住居跡出土遺物観察表 (第36図)

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	壺	—	(3.0)	(10.2)						24
2	台付壺	—	(10.2)	—		GH	堅致	にぶい橙	No 2、伊	25
3	台付壺	—	(6.7)	11.2		GHJ	良好	橙		9



第37図 第10号住居跡

第10号住居跡 (第37図)

D-3グリッドに位置する。南東側の殆どが調査区外になるため、詳細は不明である。調査できた範囲では壁溝がめぐっている。遺構確認面からの深さは0.38mである。遺物は出土しなかった。

第11号住居跡 (第38・39図)

ZZ-0・1グリッドに位置する。水道管が埋設されていたため、住居跡の中央部が調査できなかった。東側は第12号住居跡と接している。平面形は隅丸方形で長軸は5.2m、短軸は推定で4.75mである。主軸方位はN-59°-Wを指している。

住居跡の掘り込みは、遺構確認面から0.48mと

深く、2段掘りになっている。

壁溝は部分的に掘られている。主柱穴は北東側のP1とP2は明らかであるのに対し、東側は貯蔵穴の中央に浅い掘り込みが位置的には良いが、貯蔵穴との関係は疑問である。また、遺物が貯蔵穴の上から出ているが、覆土中の高い位置からの出土で、貯蔵穴に伴う遺物とは言い切れない。炉跡は確認できなかった。

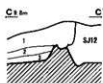
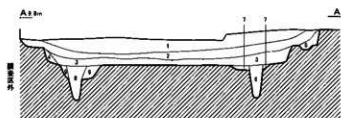
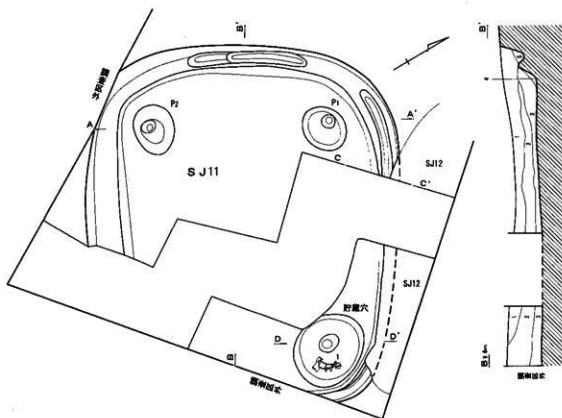
出土遺物は、1は台付甕の口縁部である。口縁部に刻目を施し頸部まで縦位のハケ調整を加える。胴部は斜位のハケ調整後ナデ消している。2は複合口縁壺形土器である。口縁部にRL単節縄文を施文する。口縁部上段から、LR単節縄文、網目状捻糸文、RL単節縄文の順で施文している。口縁下端に刻目を施す。内面に赤彩痕跡が認められる。3は壺形土器の胴部である。RL単節縄文とLR単節縄文を2段施文して羽状構成である。条間に端末結節が認められる。4、5は壺形土器の頸部、6は壺形土器の胴部である。

第12号住居跡 (第40・41図)

ZZ-1グリッドに位置する。西側は第11号住居跡に切られており、東側は調査区外となる。平面形は楕円形になると思われるが、規模は不明である。

住居跡の掘り込みは、遺構確認面から0.58mと深い。調査できた部分には壁溝がめぐっている。P2は主柱穴と考えられるが、P1は性格が不明である。

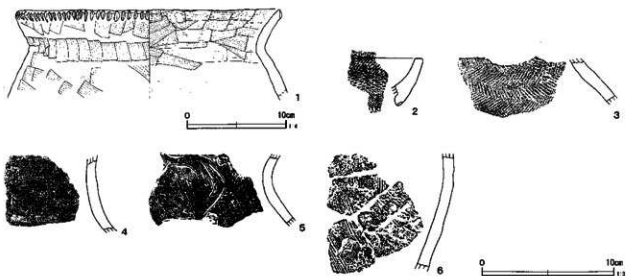
出土遺物は、1は複合口縁壺形土器である。口縁部に横位のハケ調整、頸部は斜位のハケ調整が施されている。2は台付甕口の縁部である。口縁部工具による押捺を施され、内外面ナデ調整が施されている。



- S J 11
- | | |
|----------|------------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子多く、粘土粒子少量、炭化物微量含む |
| 2 暗灰褐色土 | ロームブロックを多く、ローム粒子を含む |
| 3 赤褐色土 | ロームブロック少量、ローム粒子を含む |
| 4 暗灰黄褐色土 | 赤褐色土を多く、ロームブロックを含む |
| 5 暗黄褐色土 | ロームブロック多量に含む |
| 6 暗黄褐色土 | ロームブロック |
| 7 暗灰黄褐色土 | ローム粒子多量、粘土粒子を微量含む |
| 8 赤褐色土 | ローム粒子を多く含む |
| 9 黒灰色土 | ローム粒子多量に含む |



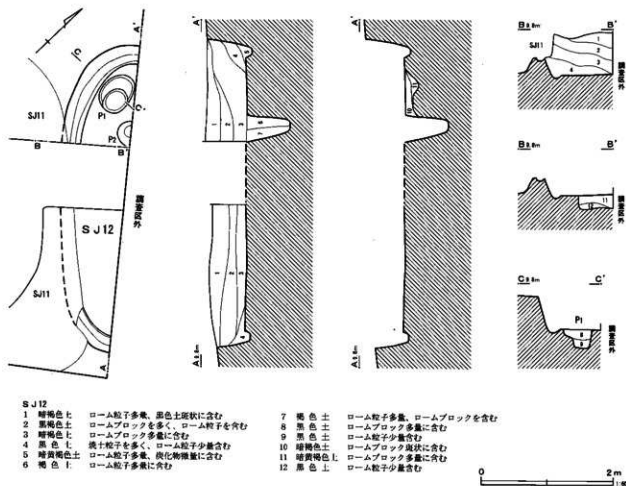
第38図 第11号住居跡



第39図 第11号住居跡出土遺物

第6表 第11号住居跡出土遺物観察表 (第39図)

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	台付蓋	27.5	(9.0)	—	—	HJ	堅致	灰赤	No 1	9

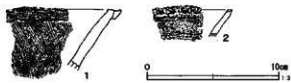


S J 12

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量、黒色土硬状に含む
- 2 黒褐色土 ロームブロックを多く、ローム粒子を含む
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量に含む
- 4 黒色土 炭土粒子を多く、ローム粒子少量含む
- 5 暗褐色土 ローム粒子多量、炭化物微量に含む
- 6 褐色土 ローム粒子多量に含む

- 7 褐色土 ローム粒子多量、ロームブロックを含む
- 8 黒色土 ロームブロック多量に含む
- 9 黒色土 ローム粒子少量含む
- 10 暗褐色土 ロームブロック硬状に含む
- 11 暗褐色土 ロームブロック多量に含む
- 12 黒色土 ローム粒子少量含む

第40図 第12号住居跡



第41図 第12号住居跡出土遺物

第13号住居跡 (第42図)

ZX-99、ZY-0グリッド、調査区の北端に位置する。東側の殆どが調査区外となるため詳細は不明である。

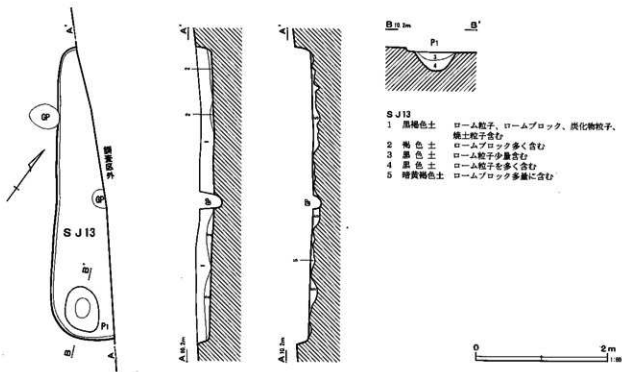
P1は古墳時代初頭の住居跡であれば、貯蔵穴の可能性も考えられる。住居跡の配置から弥生時代後期としたが、遺物が出土していないため、住居跡の帰属時期は不明である。

第15号住居跡 (第43図)

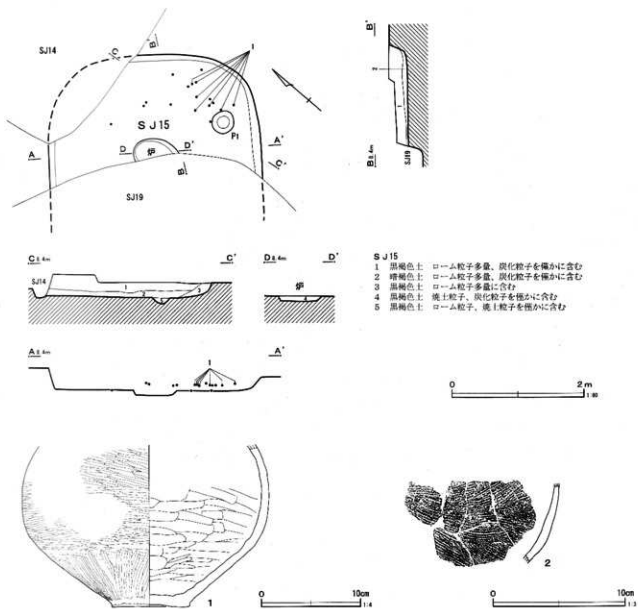
F-4グリッドに位置する。南西側は第19号住居跡、北側は第14号住居跡によって、全体の半分以上が壊されている。平面形はコーナーが1箇所しか確認できなかったが、隅丸方形になると思われる。規模は短軸が3.23mで長軸は不明である。主軸方位はN-50°-Eを指している。

住居跡の掘り込みは、遺構確認面から0.26mである。柱穴が1箇所と炉跡が検出された。

出土遺物は、1は球形磨きの壺形土器である。胴部は丁寧な横位の磨きを施し、底部は縦位の磨きが施されている。外面に赤彩が残る。2は壺形土器の胴部である。最大径部分から下半部の変換部に横位のハケ調整、他は斜位のハケ調整が施されている。



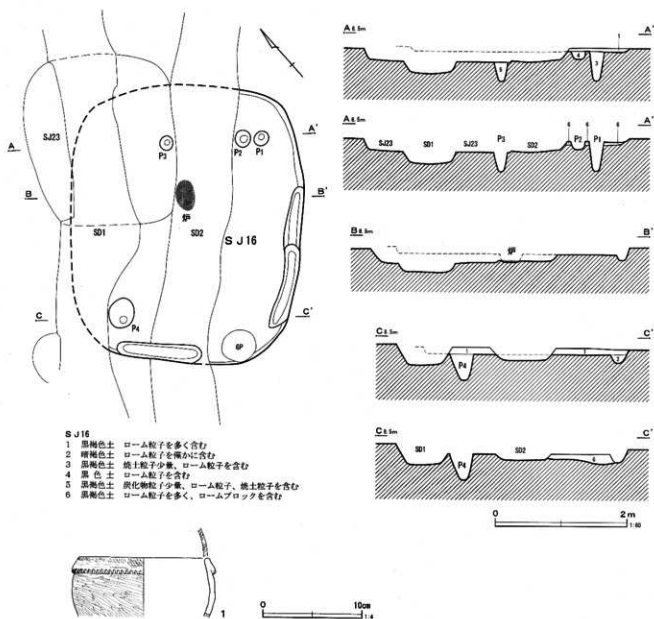
第42図 第13号住居跡



第43図 第15号住居跡および出土遺物

第7表 第15号住居跡出土遺物観察表 (第43図)

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	壺	—	(16.3)	7.8		GHJ	堅致	橙	No.6、7、9、13、14、15 外面赤彩痕跡	9



第44図 第16号住居跡および出土遺物

第8表 第16号住居跡出土遺物観察表 (第44図)

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	無頸壺	13.0	(6.0)	—	—	G H	良好	明褐色	胴部最大径14.4cm	25

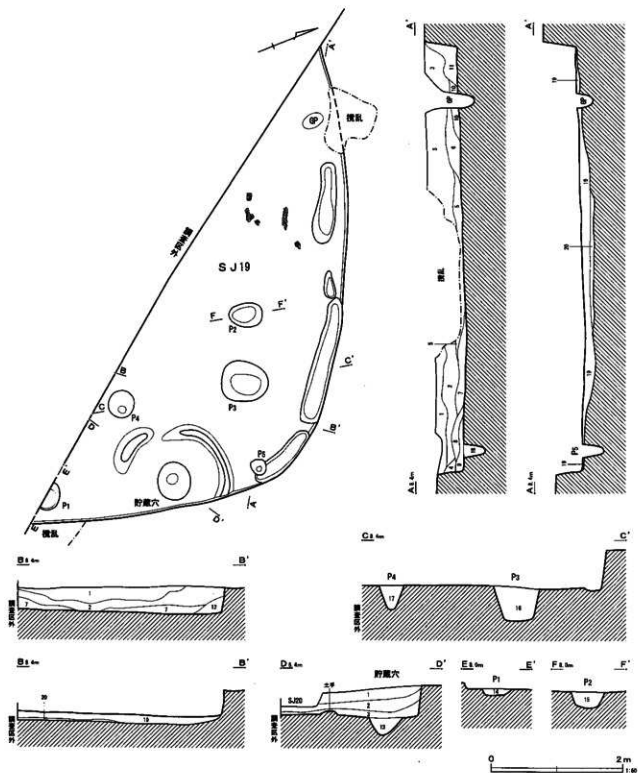
第16号住居跡 (第44図)

E-4グリッドに位置する。第1・2号溝跡と、第23号住居跡が重複している。掘り込みは約0.08mと浅く、北側は推定復元である。平面形は隅丸方形、長軸は4.14m、短軸は推定で3.52mである。主軸方位はN-43°-Eを指している。

住居跡に伴う施設は、壁溝が南東と南西の一部

に見られる。柱穴は4箇所検出されたが、配置から主柱穴と考えられるのは、P1とP3、P4である。炉跡は第2号溝跡下に底部が僅かに残存していた。

出土遺物は、折返し口縁無頸壺である。口端部及び口縁部に無節R縄文を施文する。胴部は丁寧な磨きが施されている。

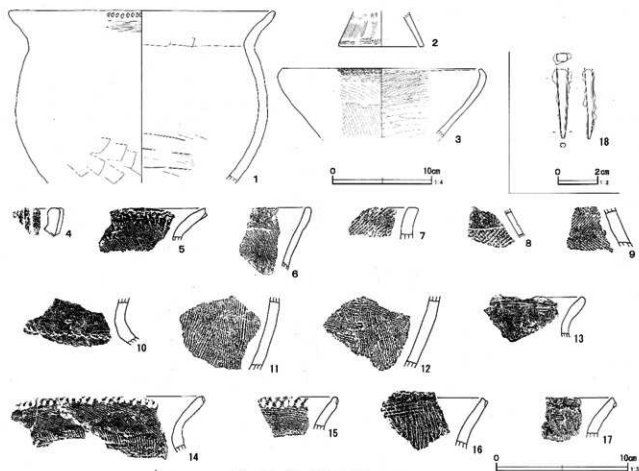


SJ19

- 1 黒褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子を僅かに、炭化物粒子を含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子、ロームブロック少量含む
- 3 黒褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む
- 4 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック多量を含む
- 5 黒褐色土 ローム粒子、焼土粒子多量、炭化物粒子を少し含む
- 6 黒褐色土 ローム粒子、焼土粒子を含む、炭化物粒子多量、ロームブロックを僅かに含む
- 7 黒褐色土 ローム粒子多量、炭化物粒子を僅かに含む
- 8 暗褐色土 ローム粒子少量、焼土粒子を僅かに含む
- 9 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量含む
- 10 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子を僅かに含む

- 11 暗褐色土 ロームブロック多量、ローム粒子を含む
- 12 暗褐色土 ローム粒子を含む、焼土粒子を僅かに含む
- 13 暗褐色土 ローム粒子を含む
- 14 黒褐色土 ロームブロック多量、ローム粒子を含む
- 15 黒褐色土 ロームブロック多量、ローム粒子、炭化物粒子を僅かに含む
- 16 黒褐色土 ロームブロック少量、ローム粒子を含む
- 17 黒褐色土 ローム粒子を多く含む
- 18 黒褐色土 ローム粒子を多く含む
- 19 黒褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多く、焼土粒子を含む
- 20 黒褐色土 ローム粒子、被熱ロームブロックを多く含む

第45図 第19号住居跡



第46図 第19号住居跡出土遺物

第9表 第19号住居跡出土遺物観察表 (第46図)

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	台付甕	27.0	(17.3)	—		G J	良好	にぶい赤褐	No.14, 21	26
2	台付甕	—	(3.5)	(8.6)						26
3	高坏	20.0	(7.0)	—		H	堅致	赤	内外面赤彩	26

第19号住居跡 (第45・46図)

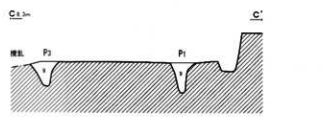
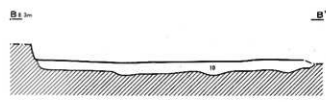
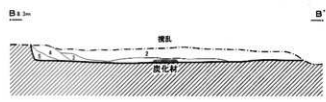
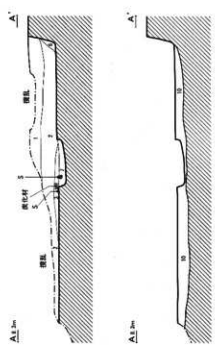
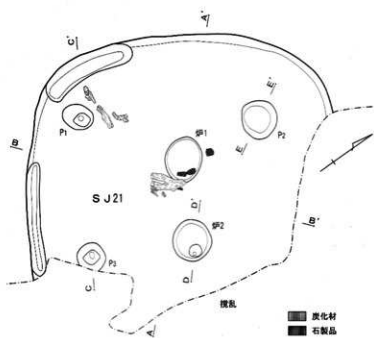
F-4グリッドに位置する。南西側の約半分が調査区外となる。南東部は平安時代の第20号住居跡と重なっている。平面形は楕円形になると考えられるが、南西のコーナーがやや開いている。主軸方向はN-71°-Wを指している。規模は不明である。

住居跡の掘り込みは、確認面から0.42mと深い。中央部が大きく攪乱されている。

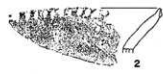
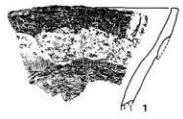
柱穴は5箇所検出されたが、主柱穴と考えられるのはP3、P4の2箇所である。壁溝は北東側に部分的に廻っている。貯蔵穴は東側コーナーに位置し、周辺を土手状の高まりが囲んでいる。床

面から炭化材が検出された

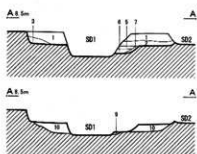
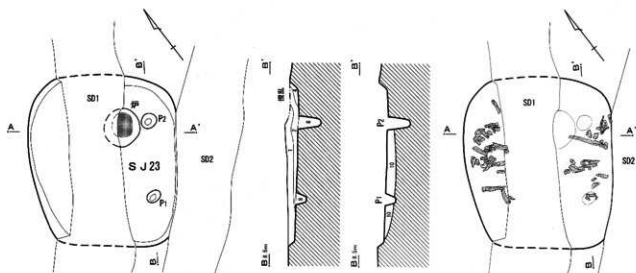
出土遺物は、1は台付甕である。口端部に刻目を施しナデ調整を加えられている。2は台付甕の脚部である。3は口縁部を内屈させる高坏である。口縁部にR L単節縄文を施文し、坏部は横位及び縦位の磨きが施されている。内面も丁寧な磨きが施されている。4は複合口縁壺形土器である。口縁部外面にL R単節縄文を施文し、棒状浮文を貼付する。5~12は壺形土器である。13~17は台付甕の口縁部である。18は釘で、混入品と思われる。長さ35.4mm、幅6.0mm、厚さ3.8mm、重さ1.5gである。



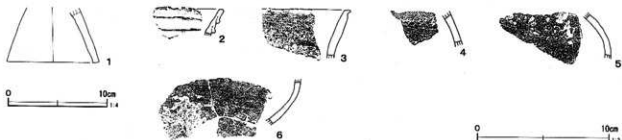
- S J 21
- 1 黒褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子を僅かに含む
 - 2 黒褐色土 焼土粒子を多く、ローム粒子、炭化粒子を僅かに含む
 - 3 黒褐色土 焼土粒子多量、ローム粒子少量、炭化粒子を含む
 - 4 黒褐色土 ローム粒子を多く、焼土粒子、ロームブロックを僅かに含む
 - 5 黒褐色土 ローム粒子、ロームブロックを含む
 - 6 暗褐色土 ローム粒子を多く、ロームブロックを僅かに含む
 - 7 暗褐色土 焼土ブロック多量、焼土粒子、炭化粒子少量含む
 - 8 黒褐色土 焼土粒子、炭化粒子を含む
 - 9 黒褐色土 ロームブロック多量、ローム粒子少量、焼土粒子、炭化粒子を僅かに含む
 - 10 黒土 ロームブロック多量、ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子を僅かに含む



第47図 第21号住居跡および出土遺物



- S J 23
- 1 黒褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子、炭化材を含む
 - 2 黒土 ローム粒子を多く、焼土粒子を僅かに、炭化材含む
 - 3 黒褐色土 ローム粒子を多く、焼土粒子少量、炭化材を含む
 - 4 黒褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多く含む
 - 5 褐色土 ローム粒子、焼土粒子少量、焼土粒子を僅かに含む
 - 6 暗褐色土 焼土ブロック多量、ローム粒子、焼土粒子を含む
 - 7 黒褐色土 ローム粒子少量、炭化物粒子を僅かに含む
 - 8 黒褐色土 ローム粒子を含む
 - 9 暗褐色土 ローム粒子を含む
 - 10 黒褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック、焼土粒子少量含む



第48図 第23号住居跡および出土遺物

第10表 第23号住居跡出土遺物観察表 (第48図)

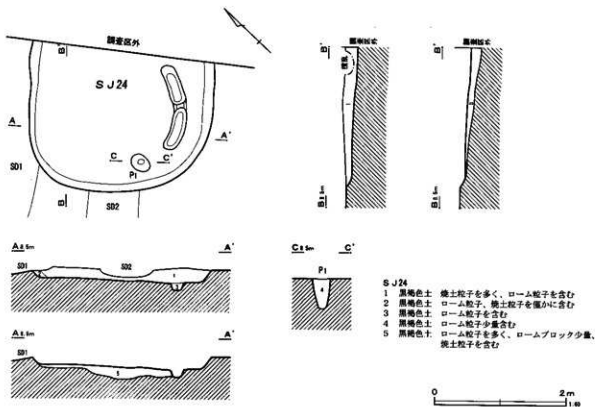
番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	土付瓦	—	(5.5)	9.2						26

第21号住居跡 (第47図)

F・G-5グリッド、調査区の南端に位置する。南側は攪乱によって壊されており、全体を把握できていないが、平面形は楕円形になると思われる。短軸は推定で4.65m、長軸は不明である。主軸方位はN-55°-Wを指している。

住居跡の掘り込みは、遺構確認面から0.4mで

ある。壁溝は南西側に廻っている。主柱穴はP1～3の3箇所確認されたが、P3に関してはP1と炉跡2に近すぎる。6本柱穴の可能性も考えられる。炉跡は2箇所検出された。炉跡1の方が新しく、周辺には板状の炭化材が検出され、炉内及び周辺から礫が出土している。炭化材はP1の近くから、建物部材と思われる棒状のものが住居跡



第49図 第24号住居跡

の中心に向かって放射状に出土している。

出土遺物は、1は複合口縁壺形土器である。口端部を面取りし、棒状浮文を貼付する。口縁部下端の剥落が認められ、貼り付け前のハケ調整が観察できる。内外面に磨きが施されている。2～4は台付甕の口縁部である。

第23号住居跡（第48図）

E-4グリッドに位置する。住居跡の中央を南北方向に第1号溝跡が縦断している。平面形は隅丸方形で長軸は2.55m、短軸は2.25mである。主軸方位はN-39°-Eを指している。

住居跡の掘り込みは、遺構確認面から約0.18mである。主柱穴は東側のP1とP2の2箇所検出された。炉跡は第1号溝跡に一部壊されている。

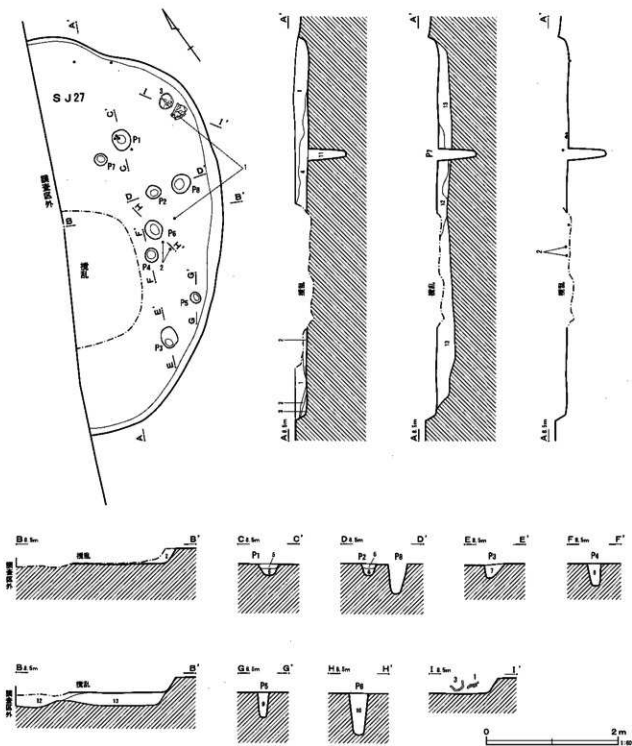
床面から建物の部材と思われる炭化材が多数検出されており、火災住居の可能性が高い。

出土遺物は、1は台付甕の脚部である。2は吉ヶ谷式の壺形土器口縁部である。輪積痕による段を2段設け、口端部及び内面に赤彩が施されている。3は小形の壺形土器の口縁部である。外面に磨きが施されている。丁寧な作りで古墳時代前期に入るものと考えられる。4～6は壺形土器の胴部である。

第24号住居跡（第49図）

E-4・5グリッドに位置する。北東側の約5割は調査区外である。平面形は、隅丸方形から楕円形で短軸は2.82m、長軸は不明である。主軸方位はN-47°-Eを指している。住居跡の掘り込みは、遺構確認面から0.33mである。

北東の壁から少し離れた内側になるが、壁溝と考えられる。柱穴は1箇所検出されたが、炉跡等は見つからなかった。遺物は出土していない。

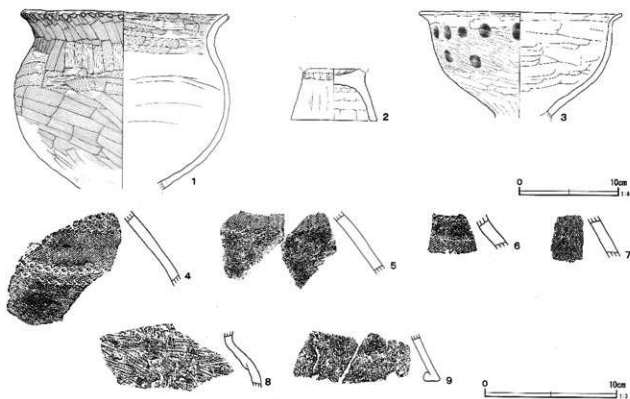


S J 27

- 1 黒褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子を稀かに含む
- 2 黒褐色土 ローム粒子、炭化粒子少量含む
- 3 黒褐色土 ロームブロック多量、ローム粒子を含む
- 4 黒褐色土 ローム粒子多量、ローム粒子を含む
- 5 黒褐色土 ローム粒子多量を含む
- 6 黒土 ローム粒子多量を含む

- 7 黒褐色土 ロームブロック多量、ローム粒を含む
- 8 黒褐色土 ローム粒子を多く含む
- 9 黒褐色土 ローム粒子多量を含む
- 10 黒褐色土 ローム粒子多量を含む
- 11 黒褐色土 ローム粒子を含む
- 12 黒褐色土 ロームブロック多量、炭化粒子少量、ローム粒子を含む
- 13 黒褐色土 ロームブロック多量、炭化粒子を稀かに、ローム粒を含む

第50図 第27号住居跡



第51図 第27号住居跡出土遺物

第11表 第27号住居跡出土遺物観察表 (第51図)

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	台付甕	21.1	(18.0)	—		HJ	整致	にぶい橙	No.2	10
2	台付甕	—	(5.2)	8.6		GHJ	良好	にぶい橙	No.8、9	10
3	高坏	20.5	(10.7)	—					外面2段円形朱文 内面全面赤彩	26

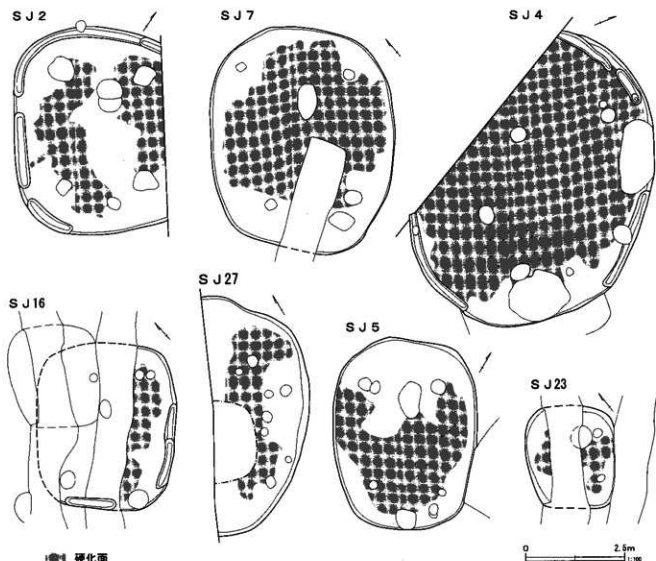
第27号住居跡 (第50・51図)

D-4、E-3・5グリッドに位置する。北西側は調査区外であるが、全体の4割程度が調査できた。平面形は、やや不整形であるが楕円形を呈すると思われる。長軸は6.03m、短軸は現状で3.00mである。主軸方位は、炉跡等がないため明確でない部分もあるが、N-37°-Eを指している。

住居跡の掘り込みは、遺構確認面から約0.22mである。中央部が攪乱されており、炉跡は確認できなかった。柱穴は8箇所検出されたが、支柱穴ははっきりしない。P4～P8が深い配置はばらばらである。

遺物は、北東隅の壁近くから第51図2の台付甕と同4の高坏が並んで検出された。

出土遺物は、1は口縁部が大きく外反する台付甕である。口端部にハケ調整を加え平坦面を作り出し、刻目が施されている。口縁部は斜位のハケ調整、頸部は縦位のハケ調整、胴部は横位及び縦位のハケ調整が施されている。2は台付甕の脚部である。3は口縁部が大きく外反する高坏である。脚部を欠損する。口縁部にハケ調整を残すものの全体に丁寧な磨きが加えられている。坏部外面に2段の円形朱文が周回する。5～7は壺形土器の胴部である。8は台付甕の胴部である。木口状工具によるナデ調整が施されている。9は台付甕の脚部である。脚底部を折り返す。外面は縦位のハケ調整が施されている。



第52図 弥生時代住居跡の硬化面

弥生時代住居跡の硬化面 (第52図)

弥生時代の住居跡で硬化面が確認できたのは、第2、4、5、7、16、23、27号住居跡である。

第2号住居跡は炉跡を挟んで、左右の主柱穴間が硬化しており、炉跡の下位から入口部分は硬化していなかった。第4号住居跡は、貯蔵穴を含む入口部分を除く、床面全体が硬化していた。第5号住居跡は、入口部から炉跡の周辺と主柱穴間が硬化していた。第23号住居跡は、中央部を第1号

溝跡によって削平されているが、炉跡の下位を中心に硬化している。

第16号住居跡は、住居跡の左側2/3が第1、2号溝跡によって削平されているが、主柱穴の内側が硬化していると思われる。第27号住居跡は、全体の左側の半分が調査区外となるが、第2号住居跡と同じように、主柱穴間が硬化していると思われる。

第12表 第1号住居跡出土遺物観察表 (第53図)

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	16.3	5.2	—	85		普通		No 1、2 赤彩	10
2	土師器	坏	—	(2.0)	—		B G H	良好	赤褐	No 3 内外面赤彩	27
3	土師器	坏	14.3	5.8	—	100	C G H I	普通	にがい褐	No 5 底部外面に布目跡あり	10
4	安山岩	台石								No 4	27

3. 古墳時代

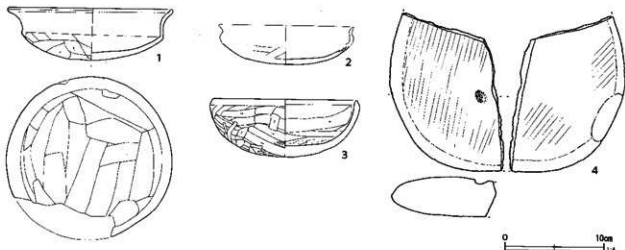
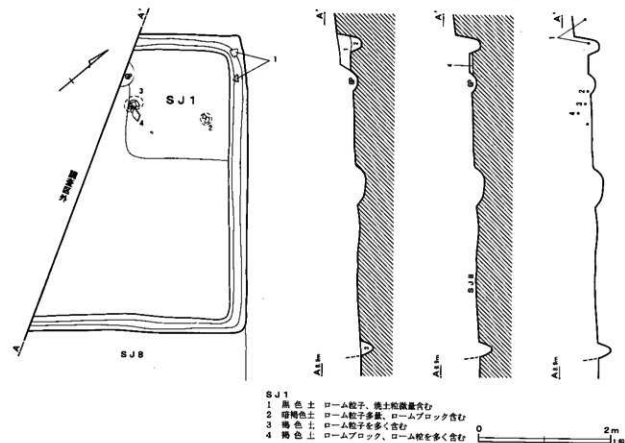
(1) 住居跡

第1号住居跡 (第53図)

C・D-2・3グリッドに位置する。北西側は調査区外、南東側は平安時代の第8号住居跡によって壊されている。覆土が残存しているのは2割程度と思われる。カマド等の施設は調査区外と

なる。現状の規模は南北4.52mである。主軸方位はN-50°-Wを指している。壁溝が全周にめぐっている。

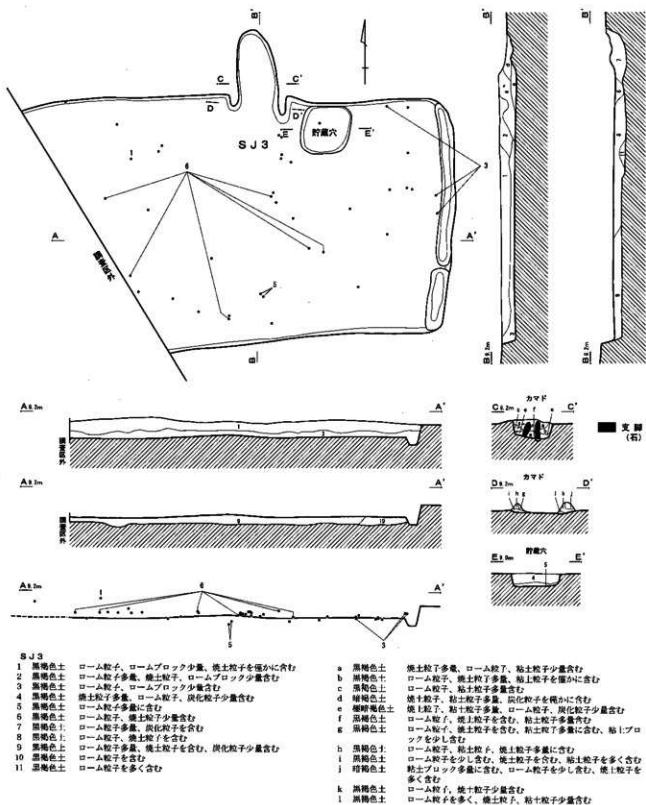
遺物は、土師器の坏と台石が出土している。



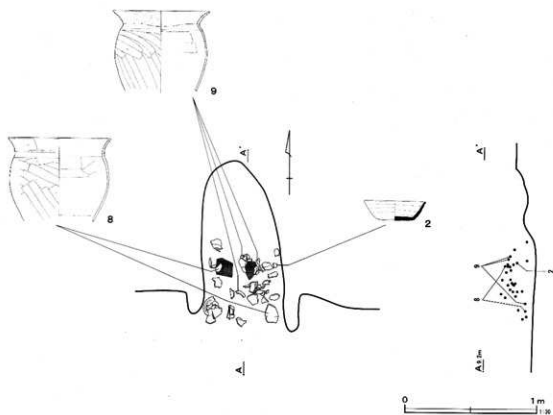
第53図 第1号住居跡および出土遺物

4. 平安時代

(1) 住居跡



第54図 第3号住居跡



第55図 第3号住居跡遺物出土状況

第3号住居跡 (第54・55・56図)

B-1・2グリッドに位置する。西側の一部が調査区外となるが、全体の8割程度が調査できた。弥生時代の第4号住居跡を壊して住居跡と構築しており、覆土中の遺物は弥生土器が混在していた。

平面形は、横長方形で規模は縦軸3.84m、横軸は現状で6.43mである。主軸方位はN-6°-Wとほぼ真北を指している。

住居跡の掘り込みは、遺構確認面から約0.20mである。

住居跡に伴う施設は、カマドが北壁のほぼ中央に位置する。貯蔵穴はカマドの東側に隣接している。壁溝は東側壁に沿って掘られている。柱穴は検出されなかった。

カマドは、袖の一部が残っており、粘土を構築

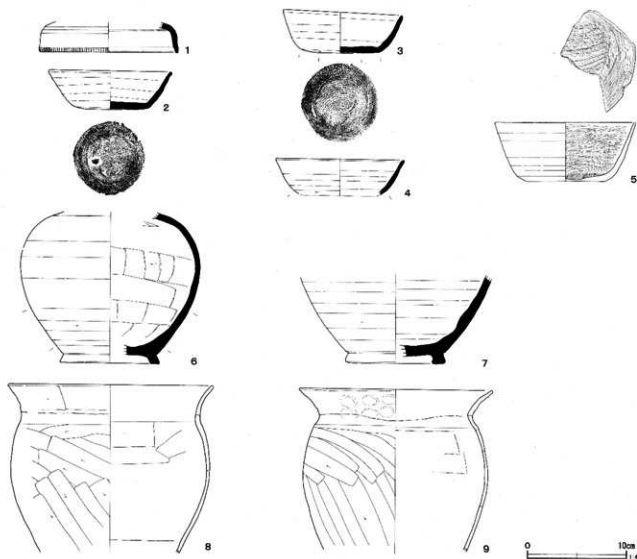
材に用いている。燃焼部は床面からの掘り込みは殆どなく平らである。支脚は2個の石が使われており、燃焼部に横に並べられている。

遺物は、カマドから須恵器坏(2)、土師器(8・9)の甕が出土した。他の出土遺物は、1は須恵器蓋、3~4が須恵器坏、5は甲斐型の土師器坏、6、7は須恵器の長頸壺である。

第6号住居跡 (第57図)

B-3グリッドに位置する。北東側が調査区外のため、南西コーナーだけが調査できた。掘り込みは、遺構確認面からの約0.20mである。断面図から、壁溝がめぐっている可能性があるが、平面的には確認できなかった。

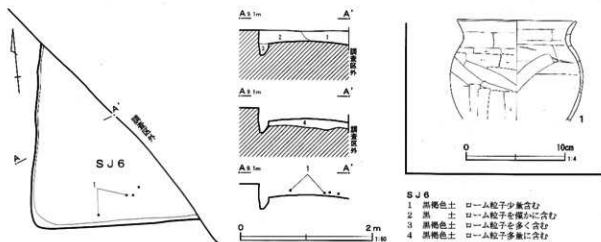
出土遺物は、土師器の甕が出土した。



第56図 第3号住居跡出土遺物

第13表 第3号住居跡出土遺物観察表 (第56図)

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(13.6)	(3.0)	—	15	A B H	普通	灰	No.3	27
2	須恵器	坏	12.3	3.9	7.2	70	C F H I	良好	にぶい褐	No.68 南比企産	10
3	須恵器	坏	11.9	4.1	7.9	50	F G H I K	普通	灰白	No.25 No.26 No.38 南比企産	10
4	須恵器	坏	(13.0)	(3.5)	—	25	F H I	良好	灰	南比企産	27
5	土師器	坏	(14.2)	5.9	(8.0)	20	C D G H	普通	黒にぶい橙	No.16 No.17 甲斐型土器	27
6	須恵器	壺	—	(15.2)	(10.0)	40	A C G H I	良好	灰	A、C、No.6、No.8、No.17、No.20	10
7	須恵器	壺	—	(9.0)	(10.0)	15	A C H I	良好	灰		27
8	土師器	甕	(20.4)	(16.9)	—	10	C D H I	普通	明赤褐	No.40 No.59 カマド	27
9	土師器	甕	(19.4)	(16.2)	—	20	G H I	普通	橙褐	No.42、43、57 S J 4「く」の字状 口縁装	27



第57図 第6号住居跡および出土遺物

第14表 第6号住居跡出土遺物観察表 (第57図)

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	小型甕	(12.0)	(10.1)	—	25	CDGHI	普通	灰褐色		28

第8号住居跡 (第58・59図)

C・D-2・3グリッドに位置する。南西側は調査区外である。北西側は古墳時代の第1号住居跡と重複している。

平面形は、規模から長方形になると思われる。長軸は8.1m、短軸は不明である。壁溝はカマドの位置する北西側を除いて廻っている。住居跡の覆土は遺構確認面から1.8mと浅い。住居跡に伴い柱穴は検出されなかった。

出土遺物は鉄製品で、第59図1は釘で長さ38.7mm、幅7.3mm、厚さ3.2mm、重さ3.5gである。同2は鉄鎌と思われる。長さ34.3mm、幅9.0mm、厚さ3.9mm、重さ3.2gである。

第14号住居跡 (第60図)

F-4グリッドに位置する。平安時代の住居跡で全体を調査できた唯一の住居跡である。

平面形は、正方形に近く規模は縦軸3.80m、横軸は3.55mである。主軸方位はN-80°-Eとほぼ東を指している。

住居跡の掘り込みは、遺構確認面から約0.25mである。カマドが東壁でやや南側に寄っている。壁溝はカマドのある東壁以外は全体に廻っている。柱穴は2箇所検出されたが、主柱穴になるかは不明である。

カマドは、天井部が陥没したと考えられるa・d層に灰黄褐色粘土が多く含まれており、カマドの構築材と考えられる。燃焼部は窪んでおり焼土粒子、炭化物粒子が含まれていた。

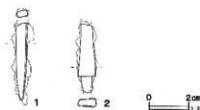
出土遺物は、1～3は須恵器坏、4は土師器坏、5は土師器甕である。6は鉄鎌で、長さ48.9mm、幅11.1mm、厚さ4.4mm、重さ3.5g。7は刃物の一部とみられ、長さ57.6mm、幅18.5mm、厚さ2.4mm、重さ9.2gである。

第20号住居跡 (第61図)

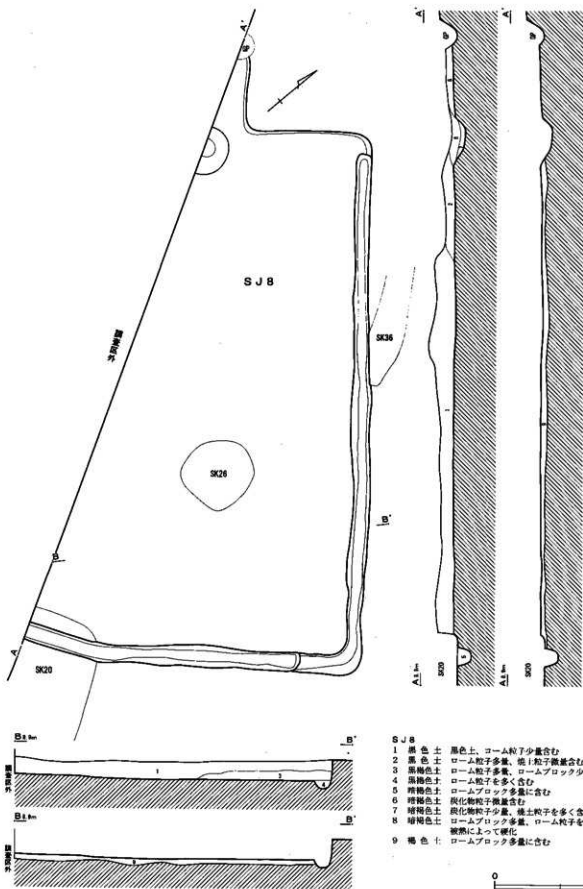
F-4グリッドに位置する。西側の殆どが調査区外、南側は攪乱によって壊されているため、住居跡の規模等は明らかでない。掘り込みは遺構確認面から約0.18mである。遺物は出土しなかった。

(2) 遺構外出土遺物 (第65図)

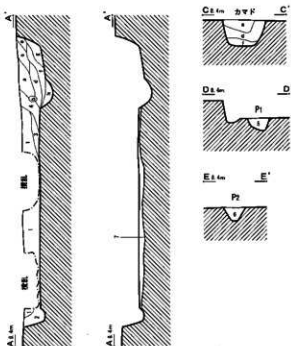
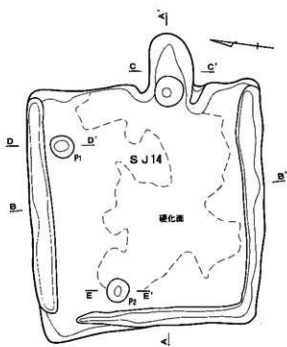
遺構外からも若干の遺物が出土している。1～3は須恵器の坏で、3は上げ底状となる。4は容器をかたどったとみられる手づくねの土製品。5は環状の土製品の一部であろう。



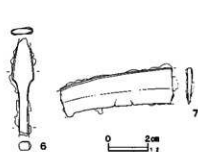
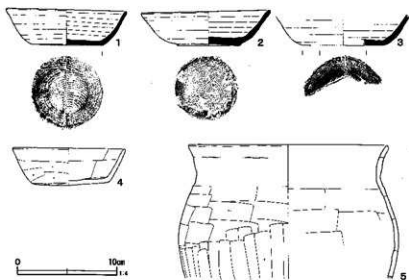
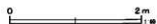
第58図 第8号住居跡出土遺物



第59図 第8号住居跡



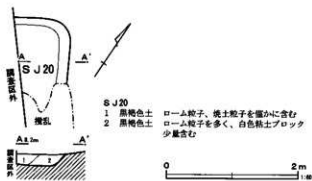
- S J 14
- | | |
|---------|----------------------------|
| 1 赤褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量、焼土粒子を僅かに含む |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子多量、焼土粒子を僅かに含む |
| 3 灰黄褐色土 | 粘土層、ローム粒子少量含む |
| 4 黒褐色土 | 焼土粒子、炭化粒子を多く含む |
| 5 黒褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量、炭化粒子を僅かに含む |
| 6 黒褐色土 | ローム粒子多量、焼土粒子を僅かに含む |
| 7 黒褐色土 | ローム粒子・ロームブロックを多く含む |
| a 暗褐色土 | 灰黄褐色粘土多量、ローム粒子、焼土粒子少量含む |
| b 暗褐色土 | 焼土粒子多量、炭化粒子少量含む |
| c 暗褐色土 | 焼土粒子多量を含む |
| d 黒褐色土 | 焼土粒子、灰黄褐色土多量を含む |
| e 暗褐色土 | 焼土粒子、炭化粒子を僅かに含む |
| f 暗褐色土 | 焼土粒子を含む |
| g 暗褐色土 | 焼土粒子、ローム粒子多量、炭化粒子を僅かに含む |
| h 暗褐色土 | 焼土粒子・炭化粒子少量含む |



第60図 第14号住居跡および出土遺物

第15表 第14号住居跡出土遺物観察表 (第60図)

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	12.2	4.6	7.2	90	FGI	良好	灰白	南比企産「十」のヘラ記号あり	11
2	須恵器	坏	12.9	3.4	6.5	60	FGHI	良好	灰	南比企産	11
3	須恵器	坏	—	(3.1)	(8.2)	30	A F H I	普通	灰白	カマド	28
4	土師器	坏	11.3	3.7	7.8	55	C G H I	普通	にぶい橙	カマド	11
5	土師器	甕	20.0	(13.5)	—	30	G H I	普通	褐	「J」の字状口縁甕	11



第61図 第20号住居跡

5. 中・近世

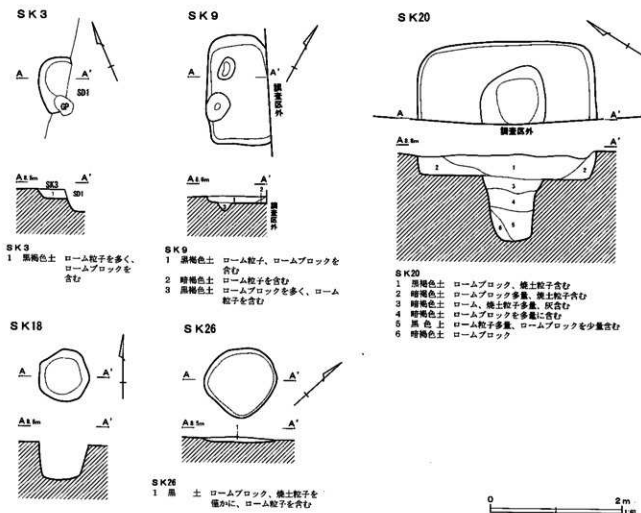
(1) 土壌

第3号土壌 (第62図)

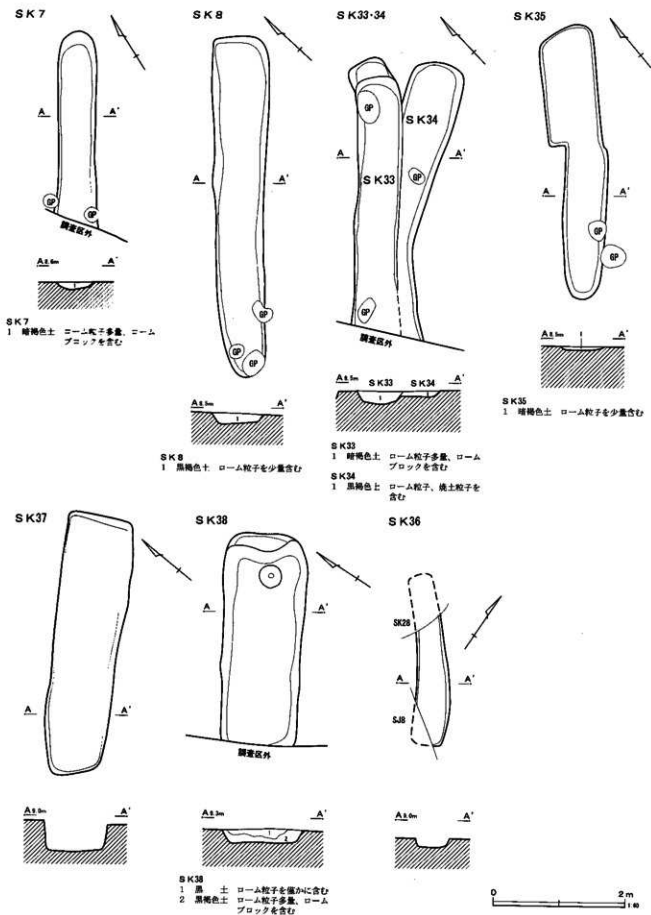
E-4グリッドに位置する。東側は第1号溝跡によって切られている。径は推定で0.86m、深さは0.15mである。

第9号土壌 (第62図)

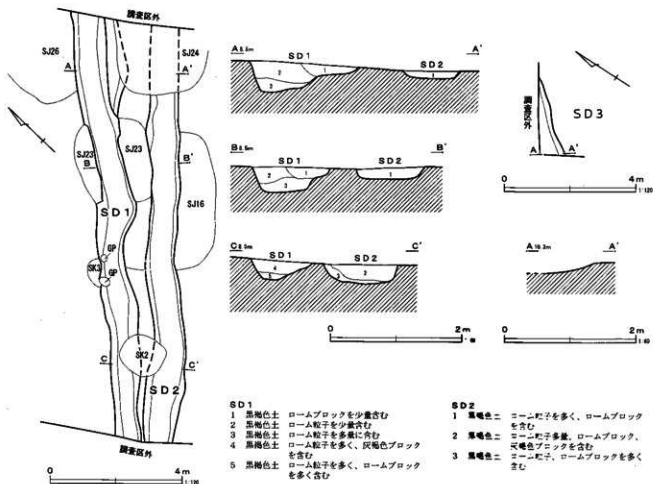
D・E-4グリッドに位置する。平面形は長方形で、長軸は1.66m、短軸は0.94m、深さ0.1mである。主軸方位はN-33°-Wを指す。



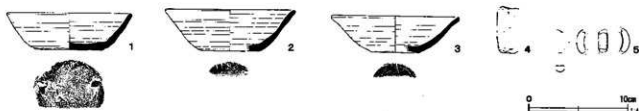
第62図 近世の土壌 (1)



第63図 近世の土壌 (2)



第64図 近世の溝跡



第65図 遺構外出土の古代遺物

第16表 遺構外出土の古代遺物観察表 (第65図)

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(12.4)	3.7	7.0	45	GHI	良好	灰	D-4G	11
2	須恵器	坏	(12.9)	4.2	(5.6)	40	GHI	普通	灰白	D-3G	11
3	須恵器	坏	(12.6)	3.6	(4.9)	40	HI	普通	灰白	D-3G	11
4	土製品	ミニチュア土器?	1.8	4.5	2.0	90	CGHI	普通	褐	C区	11
5	土製品	環状土製品	長さ [1.4] cm × 幅0.95cm		—	—	HI	普通	橙	D-3G	28

第18号土壌 (第62図)

E-4グリッドに位置する。平面形状は円形に近い。径は0.76m、深さは0.55mである。

第20号土壌 (第62図)

D-3グリッドに位置する。西側は調査区外である。上段は長軸2.72m、深さは0.43mである。下段は径9.97m、深さは1.30mである。

第26号土壌 (第62図)

D-3グリッドに位置する。平面形は円形で、径は1.06m、深さは0.08mである。

第7号土壌 (第63図)

E-3グリッドに位置する。南東側は調査区外である。平面形は長楕円形で、短軸0.59m、深さは0.11mである。主軸方位はN-32°-Eを指す。

第8号土壌 (第63図)

E-3・4グリッドに位置する。平面形は長方形で、長軸5.17m、短軸0.90m、深さは0.15mである。主軸方位はN-47°-Eを指す。

第33号土壌 (第63図)

E-3・4グリッドに位置する。第34号土壌と重複し、覆土の観察から切っている。南西部は調査区外である。平面形は長方形で短軸0.69m、深さは0.19mである。主軸方位はN-44°-Eを指す。

(2) 溝跡

第1号溝跡 (第64図)

E・F-4グリッドに位置する。幅は1.60~0.68mで、深さは0.47~0.29mである。方位はN-41°-Eを指している。

第2号溝跡 (第64図)

E・F-4グリッドに位置する。幅は1.16~

第34号土壌 (第63図)

E-3・4グリッドに位置する。南西側は調査区外である。平面形は長方形で、短軸0.83m、深さは0.09mである。主軸方位はN-55°-Eを指す。

第35号土壌 (第63図)

E-4グリッドに位置する。平面形は長方形で、長軸の中央部で段がある長軸4.14m、短軸0.85m、深さは0.05mである。主軸方位はN-39°-Eを指す。

第37号土壌 (第63図)

C-2・3グリッドに位置する。平面形は長方形で、長軸3.95m、短軸1.07m、深さは0.45mである。主軸方位はN-51°-Eを指す。

第38号土壌 (第63図)

A・B-1グリッドに位置する。平面形は長方形で、長軸は現状で3.20m、短軸1.30m、深さは0.18mである。主軸方位はN-60°-Eを指す。

第36号土壌 (第63図)

C・D-3グリッドに位置する。北西側は第36号土壌、南西側は第8号住居跡と重複する。平面形は楕円形である。短軸0.51m、深さは0.14mである。

0.84mで、深さは0.28~0.10mである。方位はN-46°-Eを指している。

第3号溝跡 (第64図)

A-1グリッドに位置する。部分的調査のため詳細は不明である。

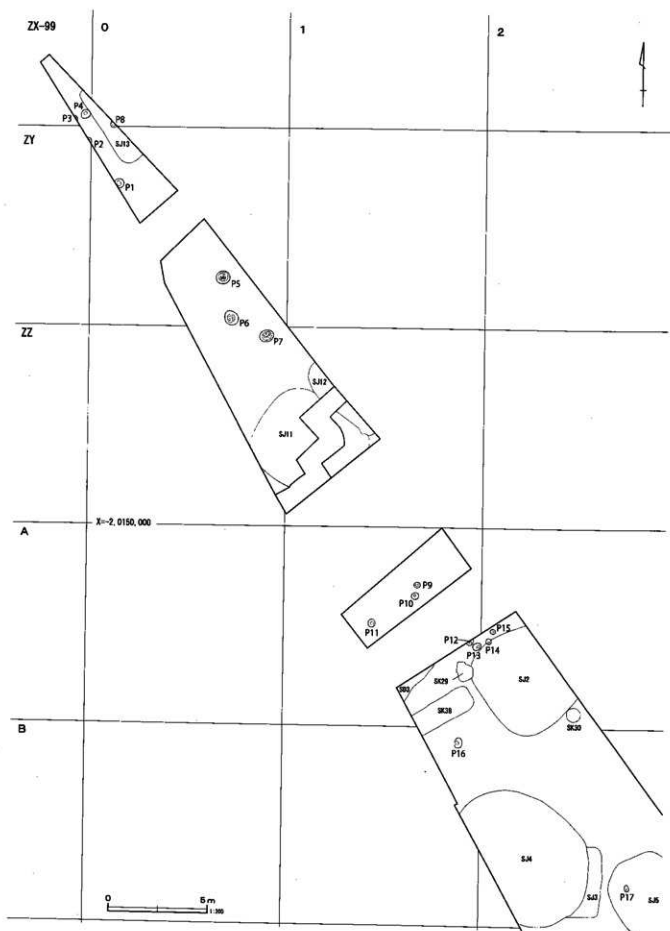
(3) ビット (第66・67図)

調査区全体から69基のビットが出土した。縄文~古代の遺構に伴うものも混じる可能性があるが、

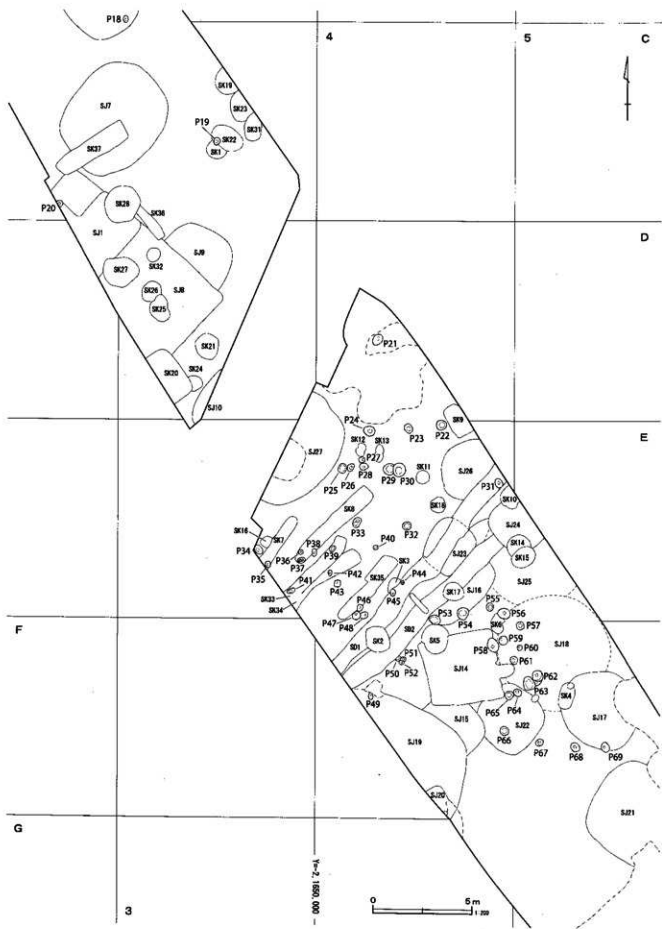
時期確定が不可能であるため、ここに一括した。所在および計測値は第17表を参照されたい。

第17表 ビット計測表

No	所在	長径(cm)	深さ(cm)	調査回数	旧称等	No	所在	長径(cm)	深さ(cm)	調査回数	旧称等
1	ZY-0	18.5	18.7	8次	旧ZX-99 Pit3	36	E-3	25.0	20.7	7次	旧E-3 Pit3
2	ZY-99	46.5	26.6	8次	旧ZX-99 Pit4	37	E-3	42.0	34.0	7次	旧E-3 Pit4
3	ZX-99	28.0	9.6	8次		38	E-3	35.0	27.8	7次	旧E-3 Pit5
4	ZX-99	31.0	23.2	8次	旧ZY-99 Pit2	39	E-4	50.0	32.2	7次	
5	ZY-0	45.5	37.0	8次	旧ZY-0 Pit1	40	E-4	24.0	32.4	7次	旧E-4 Pit8
6	ZY-0	65.5	72.1	8次	旧ZY-0 Pit5	41	E-3	40.0	20.6	7次	旧E-3 Pit6
7	ZZ-0	75.0	75.1	8次	旧ZY-0 Pit6	42	E-4	25.0	20.0	7次	
8	ZX-0	66.0	68.2	8次	旧ZZ-0 Pit7	43	E-4	40.0	15.8	7次	
9	A-1	33.5	14.7	9次	旧A-1 Pit2	44	E-4	22.0	46.9	7次	
10	A-1	34.0	25.3	9次	旧A-1 Pit3	45	E-4	32.0	48.0	7次	
11	A-1	36.5	20.7	9次	旧A-1 Pit1	46	E-4	31.0	39.9	7次	
12	A-1	35.5	62.5	7次		47	E-4	45.0	60.0	7次	旧E-4 Pit1
13	A-1	42.0	40.2	7次		48	E-4	55.0	79.2	7次	旧E-4 Pit2
14	A-2	28.5	32.1	7次		49	F-4	34.5	22.8	7次	旧F-4 Pit7
15	A-2	26.5	39.0	7次		50	F-4	(28.0)	28.1	7次	
16	B-1	48.0	35.8	7次	旧B-1 Pit1	51	F-4	(33.0)	29.2	7次	旧F-4 Pit4
17	B-2	28.0	44.3	7次		52	F-4	28.0	48.1	7次	旧F-4 Pit5
18	B-3	35.0	13.2	7次		53	E-4	56.0	16.5	7次	旧E-4 Pit4
19	C-3	38.0	31.3	7次		54	E-4	64.0	44.8	7次	旧F-4 Pit3
20	C-2	47.0	26.0	7次		55	E-4	40.0	62.0	7次	旧E-4 Pit5
21	D-4	56.0	35.3	7次	旧D-4 Pit1	56	E-4	65.0	76.3	7次	旧E-4 Pit6
22	E-4	45.0	62.0	7次	旧E-4 Pit17	57	F-5	37.5	24.5	7次	旧F-5 Pit6
23	E-4	48.0	20.8	7次	旧E-4 Pit19	58	F-4	68.0	98.0	7次	旧F-4 Pit1
24	E-4	52.0	31.8	7次	旧E-4 Pit16	59	F-4	47.0	62.0	7次	旧F-4 Pit2
25	E-4	45.0	28.3	7次	旧E-4 Pit13	60	F-5	28.0	33.7	7次	旧F-5 Pit7
26	E-4	44.0	14.1	7次	旧E-4 Pit12	61	F-4	42.0	12.9	7次	旧F-4 Pit3
27	E-4	30.0	14.9	7次	旧E-4 P12	62	F-5	76.5	68.1	7次	旧F-5 Pit5
28	E-4	40.0	23.3	7次	旧E-4 Pit15	63	F-5	67.0	27.1	7次	旧F-5 Pit4
29	E-4	60.0	22.0	7次	旧E-4 Pit9	64	F-5	38.5	43.0	7次	旧F-5 Pit3
30	E-4	64.0	26.6	7次	旧E-4 Pit10	65	F-4	48.0	65.7	7次	旧F-4 Pit9
31	E-4	50.0	45.0	7次	旧E-4 Pit18	66	F-4	44.5	29.2	7次	旧F-4 Pit8
32	E-4	44.0	10.8	7次	旧E-4 Pit7	67	F-5	43.0	33.1	7次	旧F-5 Pit1
33	E-4	52.0	39.8	7次	旧E-4 Pit11	68	F-5	44.0	41.6	7次	旧F-5 Pit2
34	E-3	(45.0)	20.5	7次	旧E-3 Pit1	69	F-5	47.5	35.0	7次	旧SK4P12
35	E-3	23.0	33.6	7次	旧E-3 Pit2						



第66図 時期不明のピット (1)



第67図 時期不明のピット (2)

V 自然科学分析

1. 中道・中道下遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

測定対象試料は、S J 21 覆土中から出土した炭化物3点 (1~3 : IAAA-82852~82854) である。

素のみを抽出 (水素で還元) し、グラファイトを作製する。

- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

2 測定の意義

住居跡の年代を確定し、弥生時代後期の実年代を検討する。

4 測定方法

測定機器は、加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置(NEC社製)を使用する。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシユウ酸(HOxII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理(AAA : Acid Alkali Acid)により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80℃)を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空中で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO_2)を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭

5 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。
- (2) ^{14}C 年代(Libby Age : yrBP)は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。この値は、 $\delta^{14}\text{C}$ によって補正された値である。 ^{14}C 年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) $\delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素の ^{14}C 濃度($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に(AMS)と注記する。

(4) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。

(5) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 (1σ=68.2%) あるいは2標準偏差 (2σ=95.4%) で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を使い、OxCalv4.0較正プログラ

ム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

6 測定結果

SJ21から出土した炭化物3点の¹⁴C年代は、1850±30yrBP、1780±30yrBP、1920±30yrBPである。これらは、ほぼ弥生時代後期に相当し、予想年代に整合するが、3点の暦年較正年代には年代差が認められる。試料には樹皮が認められないが、刃材部分の炭化材と判断される。採取位置は、確認された年輪の中でも最外年輪部である。したがって、樹木の枯死年代に近い年代値が得られたと推定される。3点の試料が住居跡の覆土中から出土したことから、試料の出土状況と住居の埋没過程を検討し、その機能年代や埋没年代を総合的に理解する必要がある。試料の炭素含有率は60%以上であり、化学処理および測定内容にも問題は無く、妥当な年代であることを裏付ける。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ¹³ C (‰) (AMS)	δ ¹³ C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
I AAA-82852	1	遺構: SJ21	炭化物	AaA	-30.59±0.61	1,850±30	79.39±0.32
I AAA-82853	2	遺構: SJ21	炭化物	AAA	-28.65±0.56	1,780±30	80.08±0.31
I AAA-82854	3	遺構: SJ21	炭化物	AAA	-29.53±0.85	1,920±30	78.77±0.32

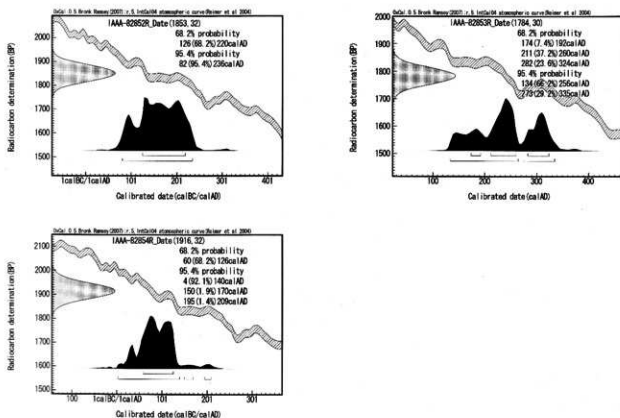
[# 2750]

測定番号	δ ¹³ C補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
I AAA-82852	1,950±30	78.49±0.31	1,853±32	126AD - 220AD (68.2%)	82AD - 236AD (95.4%)
I AAA-82853	1,850±30	79.48±0.29	1,784±30	174AD - 192AD (7.4%) 211AD - 260AD (37.2%) 282AD - 324AD (23.6%)	134AD - 265AD (66.2%) 273AD - 335AD (29.2%)
I AAA-82854	1,990±30	78.04±0.29	1,916±32	60AD - 126AD (68.2%)	4 AD - 140AD (92.1%) 150AD - 170AD (1.9%) 195AD - 209AD (1.4%)

[参考値]

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



第68図 [参考] 暦年較正年代グラフ

2. 中道・中道下遺跡より出土した炭化材の樹種

1 試料と方法

樹種同定試料は、中道・中道下遺跡の住居跡 S J 21 から出土した炭化材 3 試料である。試料は自然乾燥後、ステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の 3 方向の断面を割取り、プレパラートに固定して反射照明型顕微鏡で観察、同定をおこなった。

2 結果と考察

以下に同定された分類群と、木材解剖学的記載を示す。

No 1 (S J 21 炭化材 A) コナラ属クヌギ節

No 2 (S J 21 炭化材 C) コナラ属クヌギ節

No 3 (S J 21 炭化材 E) コナラ属クヌギ節

コナラ属クヌギ節 (*Quercus sect. Cerris*):
年輪はじめに大道管が不連続に並び、その後急に径を減じて丸く壁が厚い小道管が配列する環孔材で、年輪界は明瞭である。横断面では広放射組織が帯状となって目立ち、炭化すると広放射組織の

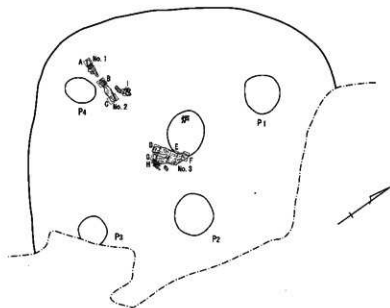
部分で割れやすくなる。道管の穿孔板は単一、放射組織は同性で、単列と広放射組織の 2 種類がある。現生のクヌギ節にはクヌギとアベマキがあるが、いずれも分布は本州の岩手・山形以西。

S J 21 住居跡から出土した炭化材はいずれもコナラ属クヌギ節であった。関東平野中央部の弥生時代後期におけるクヌギ節の出土例は多く、朝霞市の泉水山遺跡や北区御殿前遺跡などで住居内炭化材として多く出土している (山田 1993) ため、周辺に生育していた樹種を利用していたと考えられる。

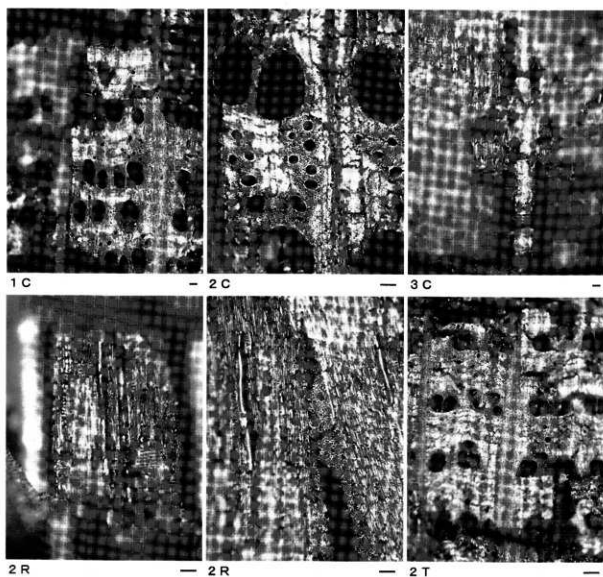
※) 本測定は、当社協力会社・古代の森研究舎にて実施した。

引用文献

山田昌久. 1993. 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史. 植生史研究特別第 1 号. 植生史研究会. 1-244.



第69図 第21号住居跡炭化材出土状況



1-3コナラ属タヌギ節 (1:炭化材A、2:炭化材C、3:炭化材E)
 C:横断面 R:放射断面 T:接線断面 スケール=0.1mm

第70図 中道・中道下遺跡第21号住居跡遺構出土炭化材の顕微鏡写真

VI 調査のまとめ

今回の発掘調査で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡5軒・土壇25基、弥生時代の竪穴住居跡16軒、古墳時代の竪穴住居跡1軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡5軒、時期不明の土壇13基・溝4条であった。

1. 時代ごとの特徴

(1) 縄文時代

縄文時代の竪穴住居跡は、時期不詳である第17号住居跡を別にすれば、中期末葉の加曾利EⅢ式に属するものが3軒、後期前葉の堀之内1式期のもの1軒であった。

中期の住居跡は軒数も少なく、加曾利EⅢ式の極めて限定された時期の小規模集落と考えられる。その成立には近隣に位置する朝霞市泉水山遺跡・志木市西原大塚遺跡という二大集落との深い関連性が想定されるが、詳細は後段で述べる。

後期前葉の住居跡は1軒検出された。これに伴って、斜面やや上方で断面巾着状のいわゆるプラスチックピット2基が検出されている。

背後に貯蔵穴群を伴って住居跡が占地するというありかたは、和光市丸山台遺跡をはじめ、武蔵台地から荒川を挟んだ大宮台地南半にかけて一般的にみられる様相である。

また、後期前葉は南西関東を中心として掘立柱建物の存在がクローズアップされる時期でもある。今回の調査で同時期の柱穴列を確認することはできなかったが、第18号住居跡と袋状土壇群を隔てるE-4・5グリッド周辺からは時期不詳ながら多数の柱穴状ピットも検出されており、一部は縄文時代に属する可能性がある。これらの事実により、斜面下方から竪穴住居-掘立柱建物-貯蔵穴群という遺構配置を想定することも可能だろう。

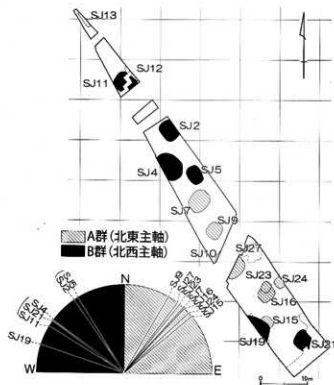
(2) 弥生時代

弥生時代の住居跡は今回16軒が調査された。今回調査された遺構の主体をなすもので、遺構の時期は概ね後期後葉～末葉に限定される。

第4号住居跡の第32図10、第7号住居跡の第35図1・2、第19号住居跡の第46図8・9等が後期後葉の土器であるほか、第11・27号住居跡の土器群も同時期の可能性がある。その他の住居跡は遺物の出土しているものについてはすべて後期末葉であろう。

また土器のバリエーションでは、第4号住居跡の第32図9の結節回転文の口縁部は房総系の壺、第23号住居跡の第48図2の多段の壺口縁部は吉ヶ谷系のものともみられる等、わずかに異系統の土器を伴いつつも、全体としては典型的な南関東系弥生後期土器群の組成を示している。

竪穴住居跡は発掘調査された軒数こそ多いものの、調査区の狭長さや擾乱の影響により住居構造等を明確にし得たものは必ずしも多くなかった。



第71図 弥生時代竪穴住居跡の軸方向

第2号・4号住居跡はほぼ全体を調査し得た例で、隅丸方形プランに4本柱穴で、主軸上に入り口ピットと炉跡の並ぶ標準的な南関東型の住居構造を示している。

また、第4号住居跡では周堤状の施設を伴う貯蔵穴の存在が確認できた。

これらの住居跡が、その主軸方向において二つのグループを構成する点は注目される(第71図)。すなわち、

A:北東—南西に主軸を持つもの

= S J 7・9・15・16・23・24・27

B:北西—南東に主軸を持つもの

= S J 2・4・5・11・19・21

また、後者の主軸方向にはさらにS J 2・5、S J 11・14・21、S J 19という3つのまとまりがみられ、さらなる小集団へと分離し得る可能性がある。

こうした主軸方向の違いは、地形との対応のうえでは黒目川に向かう傾斜にそれぞれ直交・並行する関係にある。

あるいは微細な時期差によるものかとも考えたが、前述の古相の土器群の分布はこれを反映していなかった(S J 7はAグループ・S J 4・19はBグループ)。

いずれ、C・D-2・3からE-3・4、F-4にかけての一带に北東—南西主軸のAグループが集中する傾向を見ることができ、今後近隣部分の調査が進むことで集落構造の全容が明らかになるものと思われる。

第23号住居跡は焼失住居であったが、床面から出土した炭化材の樹種同定の結果、いずれもコナラ属クスギ節であることが判明した。

これは泉水山遺跡出土炭化材をはじめ関東平野中央部における弥生後期の出土木材全体の傾向とも一致しており、当時の武蔵野台地に現在の「武蔵野の雑木林」に近い景観が広がっていたことが跡付けられた。

(3) 古墳時代

古墳時代の住居跡は1軒のみ検出された。平安時代の住居によって覆土の大半を失っており、遺物の出土は僅少であったが、6世紀末から7世紀前半にかけての住居跡と考えられる。

(4) 奈良・平安時代

朝霞市周辺における該期の遺跡としては、掘立柱建物群や灰釉・緑釉陶器、円面硯等の出土で注目された向山遺跡、特異な四面庇建物の存在が確認された官原・塚越遺跡等が知られており、758年建郡された新羅郡との関連も指摘されている。

この二つの遺跡をとりまくようにして、黒目川と越戸川に挟まれた台地の東縁には奈良・平安時代の遺跡が数多く分布していて、中道・中道下遺跡の平安期の遺構群も、こうした古代遺跡群の外縁をなす小集落のひとつとして捉えることができよう。

住居跡は5軒が検出された。カマドを含む全容を知り得るものは2軒に止まるが、うち1軒の第3号住居跡は北向きのカマドに2個横並びの石製支脚を持ち、破片ながら2個体の甕が出土したことから、横位2個掛けのカマドであったことがわかる。

第8号住居跡は全容を知り得なかったが、長径8mを超える大型住居である。

全体として遺物の出土量は僅少であったが、第3号住居跡からは須恵器杯・蓋・長径壺・土師器杯・甕等からなる一括資料が出土した。また、第14号住居跡も須恵器杯・土師器杯・甕が出土した。

須恵器杯はいずれも口径12cm前後と小型で、底面には糸切り後の周辺筋取りがみられる。甕の形態等とも併せて、8世紀末～9世紀前半のものと考えられる。

また、遺構外からは9世紀後半にかかる時期の須恵器杯も出土しており、調査区外にはこの時期の遺構も存在している可能性がある。

2. 加曾利 E Ⅲ式期の集落と土器について

第22号住居跡は3m強という比較的小型のプランを持ち、炉跡と出入口埋堦が互いに近接しつつ、全体として壁寄りに配置される。

加曾利 E Ⅲ式段階の竪穴住居跡のひとつの典型例ということができ、入間市坂東山遺跡や日高市宿東遺跡、所沢市膳棚遺跡等の同時期の遺跡に数多くの類例を見ることができる。

炉跡をはさんで出入口埋堦と正対する位置に伏堦を持つが、この位置には完形土器以外にも不整形のピットや軽微な落ち込みが検出される例があり、住居の廃絶に伴いなんらかの儀礼的行為が営まれている可能性もある。

出土土器は今回発掘調査された遺構一括出土遺物の中でも比較的良好なまとまりを持っている。

土器組成上の特徴としては、

- *伝統的な口縁部文様帯+懸垂文の所謂「キャリパー類」深鉢は安定して存在する。
- *「吉井城山類」に代表される省略された口縁部文様帯を持つ深鉢土器群に多くのバリエーションが生じている。
- *胴上半部に文様帯を持つ両耳壺が伴っている。
- *連弧文系の深鉢が組成中に見当たらない。
- *加曾利 E Ⅲ式が伝統的に持っていた無文胴張りの浅鉢も欠落している。

以上のような特徴から、本住居跡の土器群は加曾利 E Ⅲ式新段階に属するものとみられる。同時に調査された第25・26号住居跡の出土遺物も量は少ないながら同様の特徴を示しており、同時期のものと考えていだろう。

以下、第22号住居跡出土遺物を中心に遺物の分析を試みる(第72図)。

I：キャリパー類深鉢

A：波状口縁タイプ(第12図4・5)

緩やかな波状口縁をなし、波頂部に半円形の小突起を持つ。渦巻文は末端をわらび手状に巻いた円文に変化し、内部に地文縄文を充填する。5は

突起背面にわらび手文を描く。

B：水平口縁タイプ(第12図6~10)

E Ⅲ式古段階との差は僅少であるが、口縁部文様帯下端の断面S字状の屈曲が非常に弱くなっている点、渦巻文が精円文化して内部に地文充填され、10では単純な横楕円文の反復に置き換えられている点等が新しい要素と考えられようか。

II：一段懸垂文類(第11図2)

11-2は水平口縁下に1条の沈線によって区画された無文帯を持ち、胴部は地文縄文上に逆U字の磨消帯が垂下する。ネガ文による逆U字文と考えることができ、これに対しポジ文による逆U字文を描くのが第25号住居跡埋堦である。

III：吉井城山類(第13図16・17)

胴上半部に波状区画、胴下半部に懸垂文を組み合わせたモチーフを描くもので、16は単沈線によるもの、17は磨消を伴う平行沈線によるものである(17は下端開放する逆じ字モチーフの可能性もある)。

16は口縁下に筒状工具による縦位の列点+単沈線からなる文様帯を持つが、これは第25号住居跡の埋堦に共通している。

IV：わらび手文類(第11図1)

胴上半部は単位文化したわらび手沈線と磨消縄文による楕円文が交互配置され、胴下半部はわらび手沈線の懸垂文と磨消縄文による逆U字モチーフが交互配置される。しばしば大木9式と比較される土器群で、アルファベット文等の単位文への萌芽とされる。

V：両耳壺(第13図18・19)

胴上半部に、キャリパー類の口縁部文様帯に由来する区画文を配する。区画文には地文縄文が充填されるが、胴下半部はしばしば縦位の集合沈線によって代替される。19の個体は区画文の下端が微隆起線となり、地文縄文が胴下半部へと溢れ出している。

中道・中道下遺跡が位置する武蔵野台地南縁辺

部には縄文時代中期の遺跡が多数分布しているが、特に大規模で地理的にも近い集落遺跡として朝霞市の泉水山遺跡と志木市の西原大塚遺跡が挙げられる。

泉水山遺跡は昭和48年の発掘調査で加曾利EⅠ式から同EⅡ式にかけての住居跡23軒が検出されており、また地理的にも黒目川を約2km遡った左岸側に立地している。このことから、中道・中道下遺跡のムラを、泉水山ムラを母村とする衛星的な小集落と解釈することもできよう。

一方で、この地域最大の縄文中期集落である西原大塚遺跡においてもこれまで加曾利EⅢ式期の住居跡が多数発掘調査されてきた。

しかし、それらの大半は土器組成中に連弧文系の土器群、さらには曾利系・唐草文系の土器群を含むEⅢ式古段階のものであり、それ以降の資料がきわめて僅少である。

したがって、EⅢ式新段階の小集落である中道・中道下ムラの出現は、西原大塚ムラが終焉へと向かう中での新たな遺跡立地を模索する小集団の存在を暗示するようにも考えられる。

最後に、周辺遺跡から出土した加曾利EⅢ式期の資料について概観しておく。

和光市越後山遺跡第1号住居跡・志木市西原大塚遺跡第134号住居跡はいずれもキャリパー類波状口縁深鉢と連弧文系土器群の組み合わせで、特に西原大塚では連弧文系土器群の量的な優位性がうかがえる。

和光市白子宿上遺跡第2号住居跡ではキャリパー類深鉢に吉井城山類の小型深鉢が伴っている

が、胴上半部の波状区画線に平行沈線の懸垂文が無造作に連結される構成からは、連弧文類と未分化な初期吉井城山類ともいべき様相が窺え取れる。

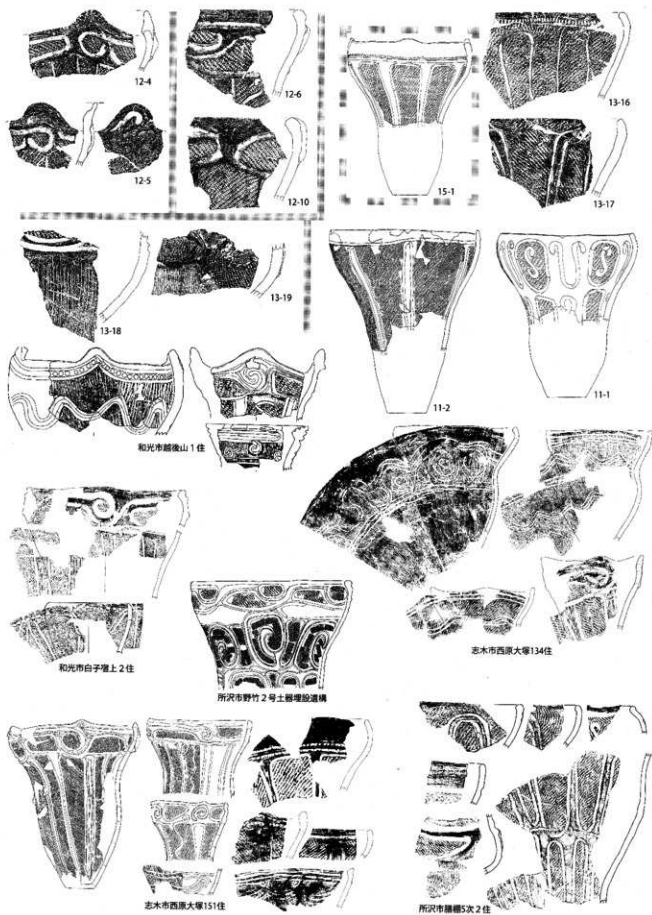
西原大塚151号住居跡ではキャリパー類と一段懸垂文類のセットに加えて、崩れた連弧文類の土器が出土している。キャリパー類の一部と連弧文類を混入として組成から外すことも考えられるが、ここではEⅢ古段階から新段階への過渡的な様相として一定の時間幅を想定しつつ一括して提示することとした。

所沢市膳棚遺跡第5次調査第2号住居跡は吉井城山類と一段懸垂文類に文様帯の崩れた両耳壺が伴っている。キャリパー類が伴わないものの、個別の土器の特徴においては中道・中道下遺跡例に最も近い。

所沢市野竹遺跡(椿峰遺跡群)第2号土器埋設遺構の資料は中道・中道下遺跡例と直接的な関係は薄いものの、キャリパー類の口縁部文様帯と椀山類の胴部大型渦巻文が共存する個体であり、これもまた加曾利EⅢ式新段階のひとつの典型例と評価し得る。

それぞれの遺構の時期的な帰属については、越後山1住・西原大塚134住をEⅢ式古段階、白子宿上2住・西原大塚151住・膳棚5次2住・野竹2号土器埋設遺構をEⅢ式新段階と考えた。

但し、連弧文類の終末と吉井城山類の成立の関係については曖昧な点も多く、資料の増加を待つて再検討する必要があるように思われる。



第72図 第22号住居跡出土土器と周辺地域の土器

引用・参考文献

- 石原敬司・肥沼正和 1996 『向山遺跡・稲荷山遺跡・塚越遺跡』朝霞市教育委員会・朝霞市遺跡調査会
- 尾形剛敏・深井恵子 2007 『志木市遺跡群15』志木市教育委員会
- 加藤定男他 1989 『朝霞市史』第二編 原始・古代』朝霞市史編纂室
- 木村俊彦・鈴木敏弘 1993 『午王山遺跡』和光市教育委員会
- 小出輝夫 1978 『打越遺跡』富士見市教育委員会
- 肥沼正和 1994 『岡・向山遺跡』朝霞市教育委員会・朝霞市遺跡調査会
- 肥沼正和 1983 『泉水山遺跡』朝霞市教育委員会・朝霞市遺跡調査会
- 齊藤欽延 2001 『中道・中道下遺跡第3地点』朝霞市教育委員会
- 佐々木保俊他 2009 『西原大塚遺跡』志木市遺跡調査会
- 鈴木一郎他 1995 『白子宿上遺跡』和光市遺跡調査会・和光市教育委員会
- 鈴木一郎他 2004 『市内遺跡発掘調査報告書』和光市教育委員会
- 谷井彪他 1987 『和光市史 通史編』和光市
- 照林敏郎 2002 『中道・岡台遺跡』朝霞市教育委員会
- 中山清隆他 1983 『泉水山・下ノ原遺跡1』朝霞市泉水山・下ノ原遺跡調査会
- 並木隆他 1984 『椿峰遺跡群』所沢市教育委員会
- 並木隆他 1987 『糠瀬川流域遺跡群』所沢市教育委員会
- 野中和夫他 1992 『丸山台遺跡群1』和光市教育委員会・和光市遺跡調査会
- 西井幸雄・新屋雅明他 1994 『花ノ木・向原・柿ノ木坂・水久保・丸山台』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 西井幸雄 2006 『宮台・宮原遺跡』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 堀口萬吉他 1987 『荒川』『自然』
- 増田逸郎他 1989 『朝霞市史』第二編 原始・古代』朝霞市史編纂室
- 柳田敏司他 1987 『新編埼玉県史 通史編1』埼玉県